
親友と書いて神と読む！

Free Fly

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友と書いて神と読む！

【Nコード】

N8545M

【作者名】

Free Fly

【あらすじ】

俺は華々しく高校生活を始めるはずだった。

しかし、親友によって殺され、親友によって転生させられた。

新たに始まるは異世界での学園生活。

その先で如月 鋼嗣は何を見るのか？

強大過ぎる力を入れた鋼嗣の選択とは？

テキスト設定のチートファンタジー、開幕。

注・この作品は主人公最強系のご都合主義です。苦手な方はご注意ください。また、大変勝手ながらタイトルを「親友（神）よ。」から「親友と書いて神と読む！」に変えさせて頂きました。内容に変化はありませんがあらすじとプロローグを大きく変えました。現在更新停止中

プロローグのプロローグ

桜の花びら舞うこの季節。

中学生は高校生へと成長する。

めでたい事とは裏腹に、大人と子供の境目に苦悩する。

そんな中でも生きてゆく。世界という大きな大きな流れに身を委ねて。

だがしかし、そこから零れ落ちる者もいる。

その者は世界の重みを知ることとなる。

現実と幻想の狭間へと、その身を投じることとなる。

零れ落ちた少年はそこで何を見、何を望むのか。

世界という名の巨大な舞台を離れた少年は、幸か不幸か。

神のみぞ知るその答えは、やがて災厄となりて少年に降りかかる。

神と少年が織り成す物語、どうぞ、お楽しみあれ！

プロローグのプロローグ（後書き）

どうも、作者のFree Flyです。

本来この回はいれないはずだったんですが、次話にいろいろと不満があつたもので

その補助的な役割で入れさせてもらいました。

これから先、ひどい文が続くと思われませんがよろしくお願いします。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

序章・プロローグ（前書き）

作者の初作品です。間違いや意見がありましたらどんどんお伝え下さい。

不定期更新ですががんばっていきます。
どうぞ。

追記

（現在は土日のどちらか、または両方での定期更新（？）です。

）

序章・プロローグ

「……………」

「え？」

「……………」

「何て言ってるんだ？」

「……………」

「答えるよ！」

「………ね」

「？」

「………めん」

「何を言っ………」

ガバアア

飛び起きた。

まだほんのりと肌寒さの残るこの季節にぐっしょりと汗をかきながら少年、如月鋼嗣は目を覚ました。

とても懐かしい声が聞こえた。誰のかはわからないけど、どんな夢かも覚えていないけどもそれだけは分かった。

一体なんだろう？そう思いつつも、ぼさぼさの黒髪を弄りながらベッドを降りて家を出る準備をする。今日は待ちに待った入学式だ。

近所にある、一般的な高校だったが、俺は満足していた。近いという事もあったが、親友である創雑舞とまた共に学園生活を送れるということにある。

8

自分としても友に依存している気がしなくてもないが、それはお互い様なので、深くは考えないことにする。

ピンポーン

そう考えていたらどうやらお迎えが来たようだ。

「はいよ。ちょっと待ってくれ。」

大急ぎで着替え、口にパンを放り込む。その他の事は起きて直ぐにやったので問題ない。

カバンを担ぎ、玄関へと向かう。

「よう、舞。」

「おはよう、コウ。」

肩まで伸びた髪を振り笑顔を向ける姿はかわいらしい限りだが残念ながらこいつは男。

私服姿の時は彼女と勘違いされたり、学校では男と判明した後まで意味深な視線を

向けられることもしばしばあり、色々問題がある。

しかしそれよりもこいつは俺の親友だ。それ以上にもそれ以下にもならない。

「今日もそれつけてんのか？」

「もちろん。これは僕の宝物だからね。これが無くなった時が僕の命日だよ。」

いつでも付けている親父の形見の腕時計のことだ。まったくこいつのこの性格にはほとほと呆れる。

「分かってるよ。長い付き合いだからな。」

「ふふっ。何かあったら頼むよ？」

「ああ、任せとけ。お前のこと、もちろんそれもな。」

何事も無かったのかのようにさらっと恥ずかしい台詞を吐きつつも舞と雑談をしながら学校へと向かう。

ガッツシヤ〜ン！！

角を曲がったところで自転車とぶつかってしまった。

「おい、お前ら大丈夫か？」

乗っていたのは強面のおっさんだったが俺たちのことを心配してくれた。

「ああ、おっさんこそ怪我無いか？」

「はっはっは、生憎とそんなやわな体をしていないんでね。」

おっさんと別れ、歩き出そうとしたところで舞が何かに気付く。

「無い！！」

「ん？何がだ？」

「僕の時計が無い！！」

辺りを探すこと数分、その時計は先ほど自転車とぶつかったせいか遠くに飛ばされて

いた。しかし、その先には車が近づいてきている。

このままではあの時計が轢かれて、それと同時に舞もお陀仏。

「ってそれはだめだあああ！！！！！！」

気付けば俺は走り出していた。

「後ちよつと！！！」

あと少しで、腕時計を掴める。そんな距離まで近づいた。それと同じく、車も直ぐそこに近づいてきている。

(行けるか！？)

あと少し、そのせいで油断したのかもしれない。そもそも取りにいったこと自体、間違っていたのかもしれない。

「もう少し！」

手を伸ばせば届く、そんな距離にまできた。だが、

「コウ、それはありがとう。でもきみにはしんでもらわないといけないんだ。

ごめんね。じゃあそういうことで、ばいばい」

え？何で？それよりもこいつこんな喋り方だったっけ？
というかさっきまであっちに居たのに一瞬でこっちに・・・

そんなことを思考するよりも早く、舞が俺を押しした。
もう直ぐそこまで迫ってきた車へと向かって。

「えっ？」

序章・プロローグ（後書き）

キャラクターの紹介が殆どありませんがそのうちまとめ出します。
また次回お会いしましょう。

追記

プロローグの出来が最悪だったので書き換えてみました。
今後、ひどいところを大幅修正していきます。

前回のプロローグのプロローグはこれを修正したときに
思いついたものです。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

序章・第1話（前書き）

本日2話目です。少しだけ長くなりました。
自分で見ても読みずらかったので書き方を少し換えてみました。

序章・第1話

しばらく1人で騒いだ後、冷静に辺りを観察して見る。
自分がいるのは小高い丘（というよりも山）なので、景色が一望で
きる。

そこから見えたものは近代的な建物や、巨大な森林、
歴史的な建造物などがたくさんある。

「なんだありや」

と思わずつぶやきなくなるほどの信じられない大きさの木が町の
中央に聳え立っていた。

そしてしばらく呆然とその超巨大な木を見つめていたら

「こう、どうだいちょうしは。」

不意に後から声を掛けられた。そのせいで身構えて振り向いた。

『そんなに警戒するなよ。僕だよ僕。』

「なんだ、舞か。……っておい!!」

ここ何処だよ！てかなんであの時俺を突き飛ばした？！」

『何だそんなことか』

近くの岩に腰掛けながらとんでもないことを言う舞。

「なんだそんなことかってお前、自分が何したのかわかってんのか
よー！」

『その事なんだけどね、君の住んでいたせ世界ともう一つの世界

・・俗に言う異世界なんだけど、
その二つの世界の均衡が崩れたから君にも死んでもらった。』
舞が、相変わらず岩に腰掛けながらのんきに言った。

「ちょっと待て、君にもってことは俺以外の奴もしんだのか？」

『ああ、そうなんだけど、死んだとは少し違うんだ。もちろん君も。』

「?????どういうことだ。」

声に少し苛立ちが混じっていた。

きずかないのか無視しているのかは分からないが気にせずには舞は言う。

『正確には、世界同士の均衡を1：1に保たなくてはならなかったんだ。』

だからその人たちは死んだわけでは無くてもう一つの世界・異世界に転生

してもらった。異世界の方で均衡を保っていたはずの”勇者”と呼ばれる

人間が死んでしまつて、世界同士の均衡が崩れたから、失つた分の人数の

調整をしなくてはならなかったんだ。』

「ということは、俺も転生できるのか？」

間髪いれずに俺は聞いた。

『ああ、もちろん。』

「今更だが、なんでお前がそんなことを知ってるんだ？」

『それはね・・・』

男にしては可愛すぎる笑顔で舞は言った。

『僕が、神だからだよ。』

「はあ？お前頭大丈夫か？」

『ああ、もちろんさ。それと、本当はこのまま記憶を消して異世界へ落としちゃうんだけど、僕は君の親友だからね、特別に君に一度だけチャンスをあげるよ。』

「チャンス？」

あまりにも唐突すぎるので馬鹿面で聞いてしまう。

『そう、チャンス。』

僕にジャンケンで勝てれば好きな能力をいくらでもあげるよ。』

「お前馬鹿か？神がそんなに軽くていいのかよ。」

『大丈夫だよ。ジャンケンは人間の編み出したもつとも平和的な解決手段さ。』

この時舞は、自分は神だし、

心を読めば簡単に勝てると思っていたが大切なことを忘れていた。

彼が如月流護身術を使うということ。

そして、その基本が無心ということ。

『それじゃあいくよ・・・』

《あれ心が読めない？え？？まずい！》

「『じゃんけん、ぽい！』」

舞 ぐー lose

鋼 嗣 ぱー win

『えー！！！！！！！！！！』

《まずいまずいまずい！どうしよう。負けちゃったよ。神がジャンケンに負けるなんて・・・。はあ、でもしょうがない。自分が悪いわけだし。》

「まじ？ よっしゃあああー。まさかあれだけで本当に勝てるとはな。」

『あれ使えるならいらない気もするけど、どんな能力欲しい？』
「すごい沈んだ感じの舞が聞いてきた。」

『ちなみに転生先には魔法があるから、それも考慮してね』
「まじか！」

沈んだ舞とは対照的に馬鹿みたいに喜ぶ俺。
ソレを見てため息をつく舞。

「いくらでもいいんだよな？じゃあまずは、「身体能力の最強化」」
『うんうん。』

「次に、「魔法関連の能力の最強化」」
『うんうん。』

「最後に能力自体を創造する力」
『うんうん。・・・ってそれはちよっとまずいって！』

あ、でも制限ありなら大丈夫・・・かも。』
「じゃあ制限有りでもいいよ。」

そんなことを気にしない鋼嗣はあっけからんと答える。

『分かった。制限される事としては”神”、”世界”、
”生命”、”寿命”、を対象にして使うことは出来ない。
また、”戦っている相手とを同じ能力”を使うことは出来ない。
以上の四つだよ。今言ったのだけでいい？』

疲れた声で舞がたずねる。

少しかわいそうに思ったが、そちらの都合で
関わらせられる俺はもっとつらいと思う。

「ああ、もちろん」

『わかった。じゃあこれを握って。』

「？」

渡されたソレは舞が宝物といていた親父の形見である時計だった。

「何でこれ？」

『形見って言ってたけどそれは高位の神にのみ許された神具なんだ。』

「神具？」

『今は説明している時間がないからさっさと握って。』

わけの分からないまま、言いつ通りにする。

「え？」

その瞬間、ものすごい光で視界が真っ白に塗りつぶされる。ソレが収まった後、何だか体が軽くなった気がした。

「なんだ、今の・・・」

『これで、能力の付与は終了。』

「こんな簡単なんだな。」

『まあそれはさておき、転生先はさっき言ったように魔法のあるせかいだ。』

残り時間も少ないので魔法についてはつぱと説明しちゃう。

ところで君はどのくらい魔法について知っている？』

「魔力が必要とか呪文みたいのを詠唱するとかしか。」

『概ねあっているけど、少し違う。詠唱なんてほとんど必要ないし、想像力と魔力さえあれば大抵は誰でも使える。』

「へえ〜〜そうなんだ。」

初めて聞く魔法について想像をめぐらす。

『まあ、詳しい事は向こうの人に聞いてね。』

舞がそういったと同時に地面が割れた。

その真上にいた俺はそのまま落ちていくわけで・・・

「おい、おま、ちょ、まつ・・・おわああああああ」

『それじゃ、がんばってね〜』

そんな言葉を聞いている内に下にある変な穴みたいなのに吸い込まれていく。

その穴に吸い込まれた後に待ち受けていたのは

・・・なんと大空からのパラシュート無しSKYダイビングだった。

「覚えてろよー！ー！！！！舞ー！！！！」

叫びながらもとんでもない速さで落ちる俺。
どうなる。どうなるよ俺。

序章・第1話（後書き）

感想、意見などが有りましたら、お送り下さい。
ではまた次回お会いしましょう。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

序章・第2話（前書き）

こんな小説でも読んでくださる方がいました。
感激です。

序章・第2話

そのまま自由落下を続けた俺はその速度のまま、町の上空にまで来た。

「やばっ」と思ったが自由落下を止めるすべはなく、町の中央公園らしき場所の

噴水近くへと落下、激突した。当然あんな速度の衝撃を殺しきれぬわけもなく、

レンガの敷き詰められた地面に直径10m程のクレーターをつくってしまった。

近くにいた住民らしき人たちは

「##&quot;quot;（）（）＝I、PJB?+&quot; p:gt;」

とわけのわからない言葉をしゃべりながら逃げていった。

しかし、そんなことよりも俺はあの高さからクレーターをつくるほどの速度で

突っ込んだにもかかわらず無傷な自分に驚いた。いくら「身体能力最強化」を

使っているといってもここまでとは思わなかった。

（俺ばけもんじゃね？）

とか内心でつぶやいていたら、

いつの間にか剣やら槍やらいろんな物を突きつけられていた。

どうやら考えすぎて接近に気づけなかった様だ。

一瞬、ここで無双するかとか物騒な考えが浮かんだがソレを消し、取り合えず穩便に済ませる為に話をしよう

「能力自体を創造する力」を使い、新たに「翻訳」の能力を創造した。

この「翻訳」の能力はどんな言語も理解することができ、喋れるし書けるようになる能力だ。

ちなみに「能力自体を創造する力」は創造したい能力を思い浮かべるだけで創れるしそれと同時に創った能力の使い方が直感的に分かる優れものだ。

(何で俺は今能力の説明をしたんだ?)

まあいいや、と気を取り直した時、騎士団らしき人たちの隊長っぽい人物が話しかけてきた。

「貴様何者だ？これだけの被害を出しながらも無傷とは。貴様、もしかやモンスターか？」

このままでは攻撃されかねるので誤解を解こうと喋ろうとした時、何かキザな男が

「隊長、この男は危険です。早く処分してしまいましょう。」

とか言いやがった。
すると隊長さんは

「まあ待て。この男からは事情聴取をせねばならん。だが、私1人ではこの男の処分を決められん、国王様に判断していただく。」

「そういつことでしたら、お前らさつさと拘束しろ。」

さっきのキザ男が命令し他の団員が俺を拘束しに掛かった。

ここで逃げることもできるがいろいろと面倒なことになりそうなのでやめておいた。

素直に拘束されて馬車に乗せられた。

正直、乗り心地が良いとはいえない窮屈な馬車に揺られて数十分、ようやく城に着いたらしい。

「降りろ。」と言われて降りたら、そこは何処の魔法学校だよ、と突っ込みたくなる城門の前だった。「さつさと歩け。」とか

「妙なまねはするなよ。」とか言われながらも歩くこと更に数分。ようやく玉座の間に来た。

来る途中面白そうなところを見つけたが、そこは我慢した。例えば食堂みたいなところや、コロッセオのようなところ、一番目立っていたのは巨大な時計塔だった。

すでに王は玉座に座っていてその周りには大臣や貴族のような身なりをした人たちとたくさん兵士がいた。

(やっぱり異世界っちゅうのはこんななのかね)。はあ先が思いやられる)

入った瞬間に品定めをするような視線と見下し蔑む様な視線をいくつも感じたが、

それらを全て無視し、堂々と王の前まで歩みを進めた。

まあ、拘束されてたけど。

俺を連行してきた兵士と隊長はさすがに緊張しているらしく、少し動きがおかしかった。

「静粛に。」

髭を蓄えた大臣らしき1人が言った。

いかにも金持ちって感じた。

「こちらはテミストス王国、国王であらせられる。」

そしてすぐに隣のがつしりした体つきの男が国王の紹介をした。

国王というよりも武人、といった方がじっくり来る。そんな感じだった。

（へえー、ここテミストス王国っていうんだ。）

「早速だが、お主何者じゃ？」

聞くところによれば、かなり頑丈なようじゃが？」

王は歴戦の武芸者を思わせる雰囲気をもっており、それなりの実力者である事が分かった。

「何者？と言われてもねえ。俺は俺だ。」

名前はコウジ キサラギ。この名乗り方であっているよな？」

俺が自己紹介をしたときの言葉遣いが気に入らなかったのか、周りの視線が鋭いものへと変わる。

だがそんなものは気にしない。

「フォツ、フォツ、フォツ、わしにそんな言葉ずかいをしたのはあの男以来初めてじゃ。お主、わしに雇われぬか？それなりに給料を出すぞ。」

「いや、今はやめておくよ。気が向いたらな。」
「そうか。残念じゃのう。」

国王が心底残念そうにしていると大臣らしき人が国王に
「国王様、話がずれすぎです」と耳打ちされていた。
「身体能力最強化」のおかげで聞き取れたが、なんともまあ突っ込みどころ満載だな。

「おっほん。はなしがずれたがおぬしの処分は法に則ると、まずは王国騎士団の隊長と戦ってもらう。」

負ければそのまま死刑、勝てば実力者としてそれなりに褒美が出る。
「

（おい！法律どんだけ適当なんだよ！
それって強ければ何でもいいみたいじゃねえか！）

この国の法律は適当すぎる。

「お主だけの話じゃがのう。本来は違う処分が下されるが今回はだけは特別じゃ。」
「そうか。なら早速やるう。」

（それはありがたいな。だが、何故だ？怪しすぎる。）

「話が早いろう。レイ、コッヘ！」

「はっ。」さっきの隊長さんがきびきびとした動きで来た。
レイというらしい。

「お主が彼を闘技場まで連れて行ってやれ。」

「分かりました。では、付いて来い。」

数人の兵士とレイにつれられて闘技場（さっきのコロッセオの事らしい。）へ。

さーて、どうすつかねえー！。

序章・第2話（後書き）

基本的に木、金の更新になりそうです。

追記

（今は違いますよー。）

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

序章・第3話（前書き）

初めての戦闘描写です。

少しおかしいかもしれないけどよいぞ。

序章・第3話

コロッセオに向かうまでの間、周りの兵士たちが「レイ隊長とだよ。かわいそうに。」とか言っていたので、隊長さんはきつとそれなりの実力者なのだろう。

(まあ、俺には関係ないけど。)

隊長さんと戦う前にいくつかの能力を創ることにした。まずは「創造」。

これさえあればいいんじゃないかね、っていう突っ込みは無視無視。

次に「分解」の能力、これまたチートで物質を原始レベル以下まで分解し、

再構築することができる。そして、最後に「加速」、

これはオーオーマンキ○ゲイナーにでてくるオーオースキルで、正確には少し違うが、超加速により周りの動きが遅く見えるというチート能力。

→作者的には、ロボット系のアニメではかなりのチート能力だと思う。)

(ん？何だ、今のは？気のせいかな？)

計3つの能力を創った。

そんなことをしている内にいつの間にかコロッセオについていた。

さっき見た時は遠くからだったのでかなりでかいぐらいしか分からなかったが、

いざ近くで見ると全長100mぐらいで、高さは40mぐらい、たくさん観客席もあり、かなりのスケールだった。観客席にはかなりの人数の兵士と大臣、貴族たちがいた。

もつとも俺よりも隊長さん目当てなんだろうけどね。

それよりも面倒なことにならなければいいんだが。

「ま、ここまで来た時点で選択ミスってんだけどねえ！。by作者」

（おい！今のテロップなんだよ！消せ、今すぐに！）

俺がごちゃごちゃと考えている内に準備が整ったらしく、王が

「説明については、わしからしよう。」

と何故が張り切って説明してくれた。

説明してくれたルールをまとめると、

審判の合図で試合を開始する。

お互いに相手を殺してはならない。

武器及び魔法の使用についての制限はなし。

審判の判断で戦闘の続行が不可能と判断された場合、その者の負けとする。

らしい。剣は分かるが魔法もありかい。なら俺もがんばりますかね。隊長さんもすでに準備が終わっているらしく、待っていた。

「両者構えて、では・・・始め！」

審判はさっきのキザ男がするらしい。
わざとらしく髪をかきあげている。

いちいち動作がうざったい。

「ぼつっとしてるなよ。坊主。」

たいしてない距離を縮めて隊長さんが迫ってきた。

「はあっ！」

気合とともに横なぎに一閃。俺はそれを「創造」を使い刃渡り150cm程、柄が50cm程の巨大な刀を瞬時に創り出す。

方翼の天使が使ってたのじゃアリマセンヨ。

それを使い、繰り出された両刃剣の一撃を受け止めた。

「な、」

隊長さんが驚いているうちに背後まで回りこみ、剣を叩き落とそうとした時、

硬直が解けた隊長さんが

「貴様、中々やるな。俺も騎士団長の名に恥じぬよう全力でゆこう。火よ、我に宿りて、その力を示せ、フファイヤーボール！」

と言って、何やら呪文のようなものを詠唱し火の弾を作り出し攻撃してきた。

とつさに刀で受け止めた俺は勢いを殺しきれずに刀を弾き飛ばされた。

それを好機と見たか隊長さんはさっきと同じ様な詠唱をして今度は10個程の火の弾を作り出し、いっせいに俺に向かって飛ばしてきた。

まずいと思った俺は、

「分解」を使い自分に着弾する前にそれら全てを消し去った。

「何っ！まさか貴様、魔法も使えるのか！」

「ならばっ！」

そういつて、隊長さんは腰のベルトからなにやら奇怪な文字やら記号やらが書かれた10cm四方の紙を取り出し、地面へと投げつけた。

その瞬間紙に書かれたのと同じ模様が地面に広がり直径10m程の巨大な

魔方陣のようなものが現れた。

「来い！我が魔獣、ゴーレムよ！」

隊長さんが言うのと同時に魔方陣の中から、レンガを重ねてできたような、ドクエ版のゴーレムが出てきた。

「オオオオオオー！！！」

叫び声とともに魔方陣からできたゴーレムが俺に襲い掛かってき

た。
だが、

「遅い。」

言い放ち俺は「加速」を使い一瞬でゴーレムの真上に跳び、

「用途が若干違うが食らえ、
〽如月護身流剣術攻式壱ノ型 二重葬
」！」

跳ぶ途中に創りだしたさつきと同じ刀を使い、
相手を2回葬れる速さと威力の斬撃でゴーレムを3枚おろしにして
やった。

驚きすぎて、口を開けてポカンとしている隊長さんに向かって、

「ほいじゃ、お疲れさんつと。」

そう伝えて、首に峰打ちをして気絶させた。

「審判審判、判定は？」

審判を含む観客たちが静まり返っていたので取り合えず呼びかけて
みた。

「え？あ、あ、えーとレイ隊長気絶により、戦闘続行不能。
よって、勝者・・・コウジ キサラギ！！」

1人だけ拍手をしていた王様に吊られて周りの観客たちも
引きつった顔でパラパラと拍手しだした。

「フォツ、フォツ、フォツ。期待通りじゃのう。」

とかのんきなことを言っている王様をよそに回りの観客たちは口々に「ま、まさか隊長がやられるとは・・・」とか「俺の掛け金がー！」とか騒いでいた。

(ってこの試合に掛けてたのかよ。)

隊長さんがやられたのは予想外なようだなにやら訝しげな視線を向けられていた。そんな中で王様が一際大きな声で

「キサラギ コウジ、お主の実力を見込んでちと頼みごとがしたい。しばらく休憩してからわしの執務室に来てくれんか？何、そう変な顔を

するでない。お主にとってはそれほど難しくはないはずじゃて。頼んだぞ。

その者を客室まで連れて行ってやれ。」

そついい残して王様はさっさと行ってしまった。

そして近くにいた兵士の何人かが

「客室までお連れします。付いてきてください。」と言って案内してくれた。

さっきまでは俺を拘束していたのに、ずいぶんな変わりようだ。気にしても仕方ないので、何も言わずに付いていくことにした。

(うーん。何か面倒なことになりそうな予感がする。)

くほーらね、やっぱり by 作者

(おい！またか、またこのテロップか！)
1人で突っ込んでいたが無視することに決めた。
なんだかまたあのテロップが流れてきそうで怖い。

そうこうしている内に複雑な通路を抜けて、醜くない程度に豪華な
部屋へとついた。

「こちらが客室です。

我々は部屋の外で待機していますので何かありましたらお呼び下さい。」

兵士の1人がそっくり残してさっさと出て行ってしまった。

(さて、とりあえずは現状の把握をしますかね。)

そう思いベッドの上に寝転がりながら今後のことについて思索し始めた。

序章・第3話（後書き）

どうでしたか？

もう少ししたら魔法などについての解説を入れます。

ではまた次回お会いしましょう。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIB>です。ご協力お願いします。

キャラクター紹介（前書き）

若干のネタばれや本編に登場していないキャラもいますが書ききれていない部分の補足としてどうぞ。

追記

学年も追記しました。年齢は本編または後ほどの解説にて。

キャラクター紹介

如月 鋼嗣 きわいづ かねつぐ

身長173cm、体重65kg。男。黒目、黒髪のぼさぼさヘア！。
主人公。

学園1年生

本人いわく運動以外普通らしい。

だが実際はテストでもそれなりの成績を取っており、顔も上の中ぐらいで

かなりのイケメン。父親と祖父により、如月護身流を叩き込まれており、

地獄すらも生ぬるいと思えるような修行を続けた結果、

常人離れた身体能力を手に入れた。鋼嗣いわく

「馬鹿親父は力で押しつぶすことに特化しており、馬鹿爺はとんでもない技術力で、

紙だろつが石だろつがとにかく武器になるものを持たせた時点で負けは確定。」

らしい、かくいう鋼嗣は2人のいいトコ取りらしいが片方だけではどちらにも及ばないらしい。親友（神）の舞にチートな能力を貰い、それを活用中。

創薙 舞 きざし まい

身長162cm、体重46kg。肩ぐらいまでのショート。一応男。
年齢不明

本人いわく高位の神らしい。

父親の形見と言っていた腕時計は高位の神にのみ許された神具らしい。

神具については後程本編にて。

一応男だが、カッコイイと言うよりもかわいい顔立ちをしていて、通っていた学校の劇で異様なほど似合う女装をさせられて以来、男に告白されたことがあり、それがトラウマになっている。
如月 鋼嗣の親友。

デスタ・テミストス・ガーラント

身長194cm、体重82kg。髪を後にまとめている。へそあたりまで髭を伸ばしている。

男。5〜60才前後

テミストス国の国王。歴代最強の王にして、国民から絶大な信頼を得ている賢王。

好々爺然とした雰囲気をもっとはいるが、見るものが見れば、その下に見え隠れする歴戦の武者としての面も見ることができ、自分に対して碎けた態度で接する者を好む。
過去に”勇者”との面識があるらしい。

テミストスは王家のみに与えられる名でガーラントは家名。

レイ

身長180cm、体重74kg。男。
20代前半

王国騎士団の隊長でかなりの実力者。だが鋼嗣にあっさりと敗れる。簡易魔方陣を使った魔獣召還と火属性の魔法、剣術を使う。

本編では書かれていないが実はゴーレムなどの魔獣を何度も倒している。

ハルピユア・テミストス・ガーラント（愛称・ハル）

身長158cm、体重44kg。腰までの淡い金髪ストレート。目も淡い金色。

学園1年生

国王の娘。

召還の巫女兼預言者。美少女と形容してもおかしくない容姿をしており、常に冷静沈着。そこだけ見れば、冷たいように見えるが生き物や草花を

大切にする優しい心の持ち主。異世界からの”勇者”を召還する巫女を

つとめているが異世界から人を召還するほどの魔力を持ち合わせておら

ず、預言者としての天性の才がありこちらの方が重宝されている。

その預言により”勇者”が死ぬことも、鋼嗣が現れることも分かっている

てそれを父（王様）に予め伝えておいたので鋼嗣の処分があんなものになった。

王自身も、鋼嗣の実力が気になったのでそれを測るためにレイと戦わせた。

召還と預言、それに風と光属性の魔法を得意とする。

親しいもの、自分の認めたものにはハルピュアという名前は長いのでハルと

呼ばせている。

父（王様）と同じく、テミストスは王家のみに与えられる名でガールントは家名。

キャラクター紹介（後書き）

女性キャラが1人なのでもう少し増やそうと思っています。

ではまた次回お会いしましょう。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIB>です。ご協力お願いします。

魔法について（前書き）

魔法がでましたが良く分からないと思ったので書いてみました。ですが本編にて解説らしきものは含まれますので、分からなくなった時の参考程度にしといてください。読み飛ばしても支障はありません。

魔法について

魔法は下位、中位、上位、特殊、古代に別れていて、

下位に 火、水、風、土、雷^{かみなり}

中位に 炎、氷、嵐、木、雷^{いかずち}

上位に 光、闇、破

特殊に 召還（魔獣）、探知、身体能力強化、無効

古代に 召還（人間）、預言、時間、空間、創造

がある。基本的な詠唱は

「○よ、我に宿りて、その力を示せ、^ハ ^ハ ^ハ」

○に属性名。火の場合は「火よ・・・」になり、^ハ ^ハ ^ハの中が使う魔法の名前。

ファイヤーボールを使う時は

「火よ、我に宿りて、その力を示せ、^ハファイヤーボール^ハ」
になる。

今のところ魔法はレイしか使用していないが、そのうちに色々登場する予定。

舞による説明では詠唱なんてほとんど必要ないといっていたが、それは鋼嗣か

熟練の魔法士の場合で、一般的には詠唱が必要。

各キャラクターの魔力や得意属性については本編にて。

魔法について（後書き）

まだ魔法の種類や設定が増えると思うので、
多分これだけじゃないです。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIB>です。ご協力お願いします。

序章・第4話（前書き）

今回は舞と鋼嗣の会話が主体となっています。
それと、主人公がまたパワーUPします。

序章・第4話

ベッドに寝転がったまま俺は取り合えず、現状の把握を試みることにした。

俺が今いるこの国の名前はテミストス王国で、城下町はそれなりに活気が

あった。馬車の中から良く見えなかったが雰囲気は分かった。

だが、まだ分からないことが多いな。後であの王に聞いてみるか。

(そういえばその王に何か頼みごとみたいなのをされたな。部屋に来てって言ってたし。)

そう考え、そろそろ行くかなと思いベッドから降りようとした時、

《まだ行かなくてもだいじょぶそうだよ。》

頭の中に声が響いた。ベッドから降りようとした時だったので、体制を崩して床に頭から落っこちた。

「何だ？今の」

《また驚かせてしまったかな？僕だよ、コウ。》

「何でお前が・・・」

《おや？僕が神だとお忘れかな？》

「頭がおかしくなったかと思っただじゃねえか。」

《ははっ、ごめんごめん。君に伝えておきたい事があってね》

「伝えておきたいこと？」

《ああ、そうだよ。でも、その前に独り言に聞こえるから声を出すのはやめたほうがいい。心の中で喋ってごらん。念じる感じで。》

(こっか?)

《そうそう、そんな感じだよ。》

(それで?今更何のようだ。)

《まだ、落とした事を怒っているのかい。それについては謝るよ。本当にごめん。でもあれが一番手っ取り早かったから。》

(分かった。許してやるよ。でも他に方法があっただろうに。)

《だから一番手っ取り早かったからだよ。》

つと、話がそれだね。それで伝えたい事なんだけど・・・

(待て待て待て、俺はそっちの方が気になるんだが。)

《これ以上焦らすと読者の方g・・・

(分かった!分かったからそれ以上はダメだー!!)

《おほん。じゃあ、気を取り直して。》

伝えたい事なんだけどそれは君がいる国と君の能力についての事なんだ。》

(この国と俺の能力?)

《ああ。まずはその国についてなんだけど、今君がいるくには代々、召喚の巫女と呼ばれる人が”勇者”の召喚をしていたんだ。でも、今の巫女は”勇者”をいせかい異世界から召喚をするだけの魔力が無くて困っていたんだ。でも、

(でも?)

《でも預言者としての才能に恵まれていて、君が来ることが分かっていたんだ。それを国王も伝えておいたから、君の処分があんなものになったんだ。》

(そうだったのか。だから王様はあんなことを。)

《そう。だから多分面倒なことになると思っけどがんばってね。》

(おい、ちょっとまって！俺はどうなるんだよ！)

《その辺は王様次第さ。それよりも君の能力についてなんだけど、「能力自体を創造する力」ってあっただろ。》

(それがどうかしたのか?)

《うーん、何とか効果について若干の修正があるんだ。》

(へー、どんな?)

《二つあってね。まず一つ目は、制限として
“神”、“世界”、“生命”、“寿命”、を対象にして
使うことは出来ない。また、“戦っている相手と同じ能力”
を使うことは出来ない。”だったでしょ。》

(ああ)

《その”生命”、“寿命”ってところは、正確には”生命自体”
と”寿命自体”・・・具体的には「見ただけで相手を殺す」能力とか
「自身を不老不死にする」能力とかそういうのがだめなんだ。
ようするに君が創った能力の一つで「分解」があったらどう？
あれを使って生命を対象にしたりすることは出来るんだ。》

(そうか。じゃあ別に俺は不老不死なんかにはなりたかないし、
何の問題もないじゃねえか。)

《ただ・・・》

(ただ、何だ?)

《君が創った「想像」の能力がまずかった。》

「まずいって、どんな風に?」

《非常に言いにくいんだけど、
あれを人の身で使うのには少し無理があるんだ。》

(無理、だって・・・?)

《ああ、あれを使えるようになるために君の体は神に近づいた。そして寿命が数千年単位で伸びた。》

(はあ！？なんだって！お前さつき自分の寿命は対象にできないって・・・)

《僕が言ったのは、君の能力を使って君自身の寿命を対象に出来ないって言ったんだよ。君の寿命が伸びたのは”世界”の影響だよ。”世界”が君を神として受け入れつつある。》

(何だよそれ！俺はお前が力をくれるって言うから、貰っただけなのに！どうしてそうなるんだよ！舞！)

《僕も、反省しているよ。親友だから、という理由だけで力を得るチャンスをおぼえてしまったからね。神失格だよ。それにあの時もっとよく考えていればこんな事にならなかったのに。全て僕の責任だ。許してくれ、コウ。》

(あそこで何も考えずに言った俺も悪いんだ。だから、謝らないでくれよ。)

《・・・。。。ありがとう。こー。お詫び、

ってわけでもないけど、君にもう一つだけ僕から力をあげよう。》

舞がそう言ったのと同時に俺の体が淡く光った。

初めて舞に能力を貰った時のような強烈な光でなくてよかった。

(今度は何だ？)

(そう心配しないでくれ。今度の能力は「念話」だよ。

君のいる世界にもあるけどそれよりももっと便利なやつだよ。(

(「念話」?)

《そうだよ。今しているような事が何時でも誰とでもできる。今度のは”神”をも対象に含めるよ。まあ、僕だけだけど。これは比較的君への負担も少ない。》

(これでいつでもお前と会話できるな。)

《そうだね。それと君が神として受け入れられつつあるって言うのは君の能力を過剰に使わなければ”世界”に神として認識されることはないから心配しなくていいよ。》

(そうか、これから気をつけるよ。)

《そうそう、君にあげた「魔法関連の能力最強化」は魔法が使えるようになったわけじゃなくてただ単に魔法関連の能力が上がっただけだから。

新たに「魔法使用可能」の能力でも創っておいたらどうだい?》

(そうだったのか。じゃあまた創っておくよ。)

《最後に、君はさっきいったように”世界”から神として認識されかけている。そのせいで君には「神力」が、僅かながら宿っている。》

(「神力」?)

《神のみに宿る魔力のようなものさ。

正確には少し違うけど、^ハドラゴン^ヰと呼ばれるような生物に傷を殆ど負わせられないのはこれのせいだ。あいつらにも、君よりも少ないながら微量の^ハ神力^ヰが宿っているんだ。君の場合は^ハ神力^ヰがあいつらよりも多いからもつといろいろ出来るはずだよ。便利な力だからためしてごらん。《

(なあ。舞。)

《ん？なあに？》

(俺つてもうすでに神を名乗っても良いんではなかるうか？)

《ははっ、ちがいない。》

(笑い事じゃないぞ！俺は元の世界でも人外だったのにそれすらも通り越して神かよ。俺どんだけ化けもんなんだよ。)

《でもコウはコウだよ。それ以外の何者でもないさ。》

(舞……。ありがとう。少し気が楽になったよ。)

俺が親友の言葉に感動していると

「国王がおよびです。」

外の兵士から声がかかった。

折角人が感動に浸っているというのに。

《さて、そろそろ行ったほうが良いんじゃないか？》

(そうするぞ。)

「ああ、直ぐ行く。」

そう外の兵士に声をかけ入り口へと向かう。

(がんばってねコウ、僕に出来ることは少ない。だからせめて君の無事を願うよ。)

舞の眩きは鋼嗣に聞こえることもなく霧散していった。

序章・第4話（後書き）

まだ、序章すら抜けていません。
次は王様たちとの話し合いです。

ではまた次回お会いしましょう。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIB>です。ご協力お願いします。

序章・第5話（前書き）

今回は少し長めです。

後2話ぐらいしたら学園にはいれるかもです。

序章・第5話

兵士に連れられながら城内を歩き回ること約10分。
ようやく王の執務室らしきところにたどり着いた。

俺を連れて来た兵士の1人が、部屋の前の近衛らしき兵士に
俺が来たことを伝えるに言った。

そしてどうやら入室の許可がでたらしく、中に案内された。

すでに王と巫女服に身を包んだ少女が1人いた。

「ご苦労。もう下がってよいぞ。」

「ハッ。」

王が兵士にねぎらいの言葉をかけて下がらせた。

その姿は威厳があり、これが王なんだなと、思い知らされた。

「早速じゃがお主に頼み」

「お父様、さすがにそれは失礼でしょう。」

王が喋りだした時、隣の少女に遮られてしまった。

「おっと、そうじゃったな。」

コウジよ、こいつはわしの娘のハルピュアじゃ宜しく頼むぞ。」

「ハルピュア・テミストス・ガールアントです。」

宜しくお願い致します。」

そついい礼儀正しくお辞儀をするハルピュア。

「ああ、知っていると思うが俺はコウジ キサラギだ。
こちらこそ宜しく頼む。」

いい終わり握手を求めた俺に、笑顔でこたえてくれた。

「あなたのことは存じていますよ。」

この世界に来る前から。」

「そうか。」

大して気にした様子もなく返した。

「そうか、ってよくこんな大事なことを言われて平気ですね。」

俺の素っ気ない反応が面白くないのか、
僅かに口を尖らせながら聞いてきた。

「異常事態や驚く様なことに遭遇し過ぎちまったせいでそういうの
には
なれているんでね。」

それと俺に対してそんなにかしこまった態度で接しなくてもいい。」

「そう言われるのでしたら。」

はあくっと大きいため息をつきながらも少し緊張を緩めてくれた。

「話中悪いがそろそろ本題に入らせてもらおうぞ?」

王様そっちのけで話していたら急かされてしまった。

「いいぞ」

「お願いします。」

2人そろって返事した。

「うむ、まずはお主にこの国のことを話さなければならんの。」

「頼む、俺もそれが聞きたかった。」

大体のことは分かっていたが怪しまれないよう、
続きを促がした。

「そうか、ではまずハルピユアについてのことなんじゃがの、
ハルピユアはこの国で召還の巫女を務めておる。」

「召還の巫女？」

分かっていることだが一応聞いてみる。

「そうじゃ。召還の巫女とは代々この世界の平和の象徴として、
時には本当の平和のためにこの世界ではない異なる世界
から”勇者”を召還する者のことじゃ。」

「しかしながら、私には異世界から”勇者”を召還をするだけの
魔力を持ち合わせておらず、困り果てていました。」

「しかし、じゃ。ハルピユアは生まれながら預言者としての才
を持ち、それを使って今までこの国の危機を何度も救ってきた。
じゃが、・・・」

「やはり平和の象徴である”勇者”が不在ではこの国は
安定しませんでした。」

ですが私は1月ほど前にあなたが異世界からここに来る、

と預言しました。正確には、異なる世界から1人の少年が現れる、でしたが。」

「わしはそれを聞いた時心から喜んだ。遂にこの国が救われると。そして今日お主が現れた。」

じゃからわしは王としての権力を使い、お主の処分と言う名目で実力を測らせてもらった。

ここまで話せばわしの頼みごとが何かわかるな？」

王とハルピュアが交代交代で説明してくれた。

だが、その王の”頼みごと”が気に入らなかった。

「ちょっと待て、その巫女さんの預言では少年が現れる、と言っことしか分かってなかったんだらう？

何故俺だと分かったんだ？」

「それはその後、私がもう一度預言をしてどのような現れ方が、どのような容姿か、などを改めて預言しました。」

「それは分かった。だが、事情を話せば俺がはい、そうですか”勇者”をやらせていただきます、と言っつても思っていたのか？」

「それはもちろん、やって下さると思っっていましたよ。”勇者”になるのはとても名誉なことですから。」

「本当にそう思っっているのか！？
だとしたらお前らは頭が腐ってるよ！！！」

怒りを隠そうともしないで俺は言っつ。

「何故ですか？」

さすがに頭が腐っているとまで言われては黙ってられないのか
ハルピユアが多少の苛立ちを混ぜて聞いてくる。

「何故かって？笑わせんじゃねえよ！！」

俺はいい、だがもつと昔には異世界から無理やり召還されたやつら
がいただろう！そいつらはどうすんだよ！？自分の世界から急に
連れて来られて家族や親しい人たちと別れさせられる！
拳句の果てに言葉も分からない！」

「そ、それは・・・」

「もし自分がその立場になったらどうするよ！？
力のある奴はいい、だがそれすらもないやつはどうしたらいい！？
それを考えてやってんのかよ！？答えてみるよ！」

「まだ確立されてはいませんが元の世界に送り返す魔法だって・・・」

俺の迫力に押されて言い訳をしようとしたが
そんなもので終わらせる気はなく、途中で遮った。

「まだ確立されてない？」

戻せる確証もなしにその人間の人生を壊すのか！？」

「すまん、そこまで考えておらなんだ。わしらが浅はかじゃった。
むかしからの慣わしでそれが平然と行われていたからのう。
ほんとうにすまなかつた。」

床に手を着いて土下座の姿勢をとる王。

感情のままいってしまったのでまさかここまでなるとは思ってたなかった俺は慌ててしまう。

「俺に謝らないでくれ。」

それは過去”勇者”にされた者達へと向けられるべき言葉だ。

俺は当たり前のことを言ったただけだ。だから顔を上げてくれ。」

「そうじゃな、おぬしに謝ってもしょうがない。後でハルピュアと歴代”勇者”の墓にでも行って来るとするか。」

さっきまでの空気は消え、最初の雰囲気にもどる。

「それに俺は召還された勇者様じゃないんだ、

そんな俺でいいのか？」

そういつた瞬間さっきまで暗い顔をしていた王とハルピュアは顔を輝かせ

「「やってるのか（やっってくださいるんですか）？」」

2人して顔を近づけてきた。

「近い近い。まずは俺に頼んだ理由を聞かせてくれ。」

「それは異世界から来た者は総じて身体能力が優れ、

魔法の才もあり、カリスマ性があることから任されていました。

異例ではありますが同じ異世界から来たあなたに頼むことにしました。」

「少し待て、俺はまだ了承していないんだが。」

「ええ！やってくれないんですか？」

驚いたような声を上げるハルピユア。

「まだこのことは誰にも言っていないのか？」

それをスルーして王に尋ねる。

「ああ、まだ誰にも言っておらん。この噂が広がるとまずいので、
わしら二人と数人の信用できる部下しかしらん。」

「そうか。」

「改めてお主に頼みたい、
”勇者”をやってはくれぬか？」

「最初から事情を説明してお願いしてくれば良かったのに。」
「事情説明はしたのに・・・」

「それは、その、お願いの仕方と考え方に怒りを感じただけであっ
てだな。」

「それはさておきやってくれるのか？やってくれないのか？」

「そうだな、ならこういう条件でどうだ。」

俺はまだこの世界についての知識が少ない、
だから学校に通わせてくれ。これがまず1つ。」

「学園のことか？それぐらいならわしが手を回しておこう。」

「よし、では次に。この国に腕を上げながら、

金の稼げる組織はあるか？」

「ああ、”ギルド”と呼ばれる組織があるぞ。」

「ならそいつに俺を加盟させてくれ。これが2つめだ。」

「お安い御用じゃの。」

「そして最後に、仮の”勇者”はしてやるが

それは俺がこの世界に慣れてきてからだ。

ちなみにさっき象徴か本当の平和か、と言っていたが、今回はどっちだ？」

「今のところは象徴としてじゃの。」

お主に何かしらの因縁をつけてくる奴もいそうじゃが。」

「それならあまり問題ないな、

”勇者”をするのはある程度たってからか俺が必要になってからだ。その時は報酬を出してくれ。」

「お、お金とるんですか？」

「もちろん、あいにくと俺はボランティア精神は持ち合わせてないんでね、

ただ働きはごめんだよ。」

「ちゃっかりしとるのお。そういえばお主、

住むところなんかはどうするんじゃ？無いんだったら、学園の寮を確保しておくが？」

「ああ宜しく頼む。」

「それと、ハルピユアがお主のお供として付いていってくれるはずじゃ。」

これからお主の事を助けてくれる。」

「召還の巫女は代々”勇者”の補佐役を努めましたから。

分からないことがあったら私にきいてくださいね。」

「ああわかった。これから長い付き合いになりそうだからな。改めて宜しく頼むぞ。」

「はい。こちらこそ。」

お互いにもう一度握手してお互いを確認しあった。

(これじゃ”勇者”というより

”雇われ勇者”といったほうがいいかもね。)

(……そうだな、舞。でも何か久しぶりだな。)

「それでは参りましょうか。」

「ああ」

とりあえず王の執務室をでようと扉に向かおうとした時、

「コウジ。」

王が呼び止めた。

「なんだ？」

「おぬしには感謝しておるぞ。」

お主はさっき当たり前のことを言ったただけだ、と言ったがその当たり前にわしらは気付けなかったからの。それに仮でもあるが”勇者”をしてくれたしの。」

「あくまで仮、だがな。」

なんだか急に恥ずかしくなつてハルピユアを残し、
急ぎ足で部屋を出てしまった。

「フォツ、フォツ、フォツ、コウジなら

何かしてくれるかもしれないの〜。」

「ええ、そうですね。」

1人部屋を出てきてしまった俺は帰り方が分からずしばらく
辺りをさまよい、執務室から出てきたハルピユアに連れられて
何とか客室までたどり着いた。

これからどうなることやら。
考えるだけでため息がでる。

はあ〜。

序章・第5話（後書き）

次はおそらくハル先生の授業です。
ではまた次回お会いしましょう。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIB>です。ご協力お願いします。

序章・第6話（前書き）

今回は予告通りハル先生の魔法授業です。

では、じじじ。

序章・第6話

「さて、まずはコウジ様の魔力量と使用できる属性を調べましょうか。」

今俺は魔書庫に來ている。

魔書庫とは魔法関連の書物やある程度の道具、検査機などがある。

俺の前には気持ち悪い透明なスライムみたいなものが置かれていた。

「・・・その前にちよつといいか？」

「ええ、どうぞ。」

「この気持ち悪いのはなんだ？」

「これは触れた人の魔法に関係する情報を読み取る魔道具です。」

「魔道具？」

「はい。魔道具とはドワーフなどが作る魔力を宿した物で、

危険なものから便利なものまで色々です。」

「そうなのか。それで俺はどうすれば？」

取り合えず目の前のスライムのが分かったので、
何をするか聞いてみる。

「簡単です。」これ”に触ってください。」

「こ、これに触るのか。」

見た目が気持ち悪いので触るのがためらわれる。

だが勇気をだして触ってみる。

その瞬間いままでくによくよだったスライムが水晶のような形に変わった。感触も硬くなった。

「うわ、なんだこりゃ。」

そう言ったとたんスライム（水晶）七色に光りだした。
瞬間、スライム（水晶）が木っ端微塵に吹き飛んだ。

「……………」

「……………」

スライムの破片を浴びながら啞然とする俺たち。

「す、す、凄すぎですっ！」

なにやら興奮しきった声でハルピュアが叫んだ。

「そ、そんなのすごいのか。」

「当たり前です！魔力を測っただけで魔力測定器を

木っ端微塵にするなんて！

非常識にもほどがあります！」

鼻息荒く大声でわめくハルピュア。

そんな彼女の様子に周りの人たちが一斉にこっちを向いた。

それに気付いたハルピュアは顔を真っ赤にしながらも

さっきのことについて説明してくれた。

「えと、普通の魔法士が測ったら色が変化して光るだけなんですよ。
光った色により得意な属性が決まり光の強さで魔力量が決まります。
あなたの場合は魔力量が測定不能な上におそらく

基本属性が全て使えます。あれだけでは測定できない属性もあります
すが。」

「それってやっぱりすごいのか？」
「すごいなんてもんじゃありませんよ。」

(なあ舞、これってそんなにすごいのか？)

《そうだね僕のおけた能力のおかげでもあるけど、
かなりすごいことだとおもうよ。》

(ふん。)

「気を取り直して魔法を使ってみましょうか。」

まず、魔法は下位、中位、上位、特殊、古代に別れていて、

下位に 火、水、風、土、雷かみなり

中位に 炎、氷、嵐、木、雷いかずち

上位に 光、闇、破

特殊に 召還(魔獣)、探知、身体能力強化、無効

古代に 召還(人間)、預言、時間、空間、創造

があります。まだ確認されていないものもありますが、
これで大体です。

次に詠唱ですが、例えば、レイ隊長が使っていた、
ファイアーボールですがあれの場合は

火よ、我に宿りて、その力を示せ、
「ファイヤーボール」

になります。」

そういつて、実際に火の弾を作り出してくれた。
しかし隊長さんのよりも幾分か小ぶりで勢いも弱かった。

「人によつて得意属性が違つてそれにより魔法の
威力や魔力消費量に大きく変わります。

私の得意属性は光と風なのでこの二つ以外はそれほど
強くありません。もっともコウジ様の場合は関係ないでしょうけど。
それと上位魔法と特殊魔法はごく一部の人にしか使えません。
光属性なら私のような巫女だけ、闇属性なら王だけ、
など使用できる人が限られています。なぜかは分かりませんが、
おそらく血筋の所為でしょう。あとは古代魔法は賢者クラスの魔法士
でなければ使えませんし正確な使用方法なども詳しくわかっていま
せん。」

「それなら早速俺もやってみる。」

「ではまずはさっきのようにファイヤーボールを使つてみてくださ
い。

想像力が大切ですよ。」

「えつとたしか、

火よ、我に宿りて、その力を示せ、
「ファイヤーボール」
・・・あれ？」

俺が魔法を使おうとした時なぜか発動しなかった。

「どうして使えないんでしょう？」

「コウジ様ほどの魔力があれば使えてもおかしくないんですが。」

「そういえば。」

「何か心当たりが？」

「ああ、ちよつと待つてくれ。」

忘れていたが俺は「魔法関連の能力の最強化」により能力だけ最強になっていたが、魔自体が使えるわけではなかったのだ。なので俺は「魔法」の能力を創った。「魔法」はそのまんまで魔法が使えるようになるだけのシンプルな能力だ。

「これでよし。」

「魔力の流れが変わった？」

待っていてくれと言われた少し後、コウジ様の魔力の流れが変わり、このまま魔法を発動させたらまずいと思った。だが一足遅く

「火よ、我に宿りて、その力を示せ、フファイヤーボール」

鋼嗣の手の上には直径3m程の巨大な火の玉ができていた。

「こ、これどうしたらいい？」

「早く外に投げ捨ててください！」

言われて直ぐに窓えと駆け寄りそこから無人の庭に向かって火の玉を投げつけた。

その瞬間、地面が大爆発して、俺が落ちてきた時よりもでかいクレーターを作った。

「あ、あはははは・・・」

引きつった笑顔をみせるハルピユア。

「何で、威力の一番低い下位魔法であんな事になるんですか!？」

「すまん、まさかこんな馬鹿みたいな威力になるとは。」

何か怒られたから謝った。

「何から何まで非常識すぎですっ！」

「ごめん。」

何か謝ることしかできなかった。

おんなのひとは怒ると怖い。次から気お付けよう。

「それではそろそろ部屋まで戻りましょうか。」

「・・・そうしよう。」

これ以上魔法を使うと危ないのでさっさと立ち去ることにした。

客室に戻るまでの間ハルピュアといろんな会話をした。

「そういえばコウジ様、私の名前長くて呼びずらくないですか？」

「いやとくになんともないが。」

「でしたら私のことはハルとお呼びください。」

親しい人たちにはそう呼んでもらっています。」

俺の言葉をスルーしてそういつてきた。

さつき執務室でスルーした仕返しだろうか？

まあいいやと思いつながらハルと呼ぶことにした。

「そうだな、そうさせてもらおうよハル。」

「ええ、ありがとうございます」

満面の笑顔で答えてくれた。

「なら俺のことはコウと呼んでくれて構わないぞ。俺の親友もそう呼んでいたし。」

「ならそうさせてもらいます。コウ様。」

「様は取れないんだな。」

「私の癖のようなものですから。」

「そういえコウ様がレイ隊長と戦っている時に10個ものファイヤーボールを消し去りましたがあれは何ですか？」

「魔法を使った様子もありませんでしたし。」

「ああ、あれはだな」

(なああ舞、俺の力のことって言うてもいいの？)

《言うてもいいけど、多分神様とかなんとか崇めるられるとおもつよ。》

(よし、やめておこう。)

《その方が良く、適当にごまかしといたら。》

「なんかこう、達人が使える気のようなものでだな、その、消したと言うかなんと言うか。」

「へえ〜、そうなんですか。」

微妙に疑いの視線を向けられたが、

「でも、コウ様ならなんでもありですよ〜。」

と言って納得してくれた。

まずいつ、こつちの世界でも人外として扱われかけているっ。
速くなんとかしなければっ。

俺がそんなことを考えていたら、今度は

「もう一つ聞きたいことがあるんですが、

ゴーレムを倒した時のあの技と武器は何ですか？」

「あれか？まず武器についてだが、」

言っであの時使った刀を創り出す。

「こいつだよな、

っであれ？なんでそんなポカンとしてんだ？」

「なんでって、それは人間では不可能と言われた

創造の魔法を使ったからに決まってるじゃないですか！」

「キニスンナ、オレノイタセカイノヤツラハミンナデキタ

・・・ハズダ。」

「何で急に片言になるんですか！

ごまかさないで下さい！」

ごまかしきれなかったから話題の転換を試してみる。

「ゴーレムを倒した時の技なんだがなあれは、

俺の家の武術である如月護身流の剣術で本来は真剣ではなくて
木刀なんかで、相手の急所を連続して攻撃する技なんだが
真剣でやったから、あんなことになった。」

あんなこととは勿論、ゴーレムを三枚おろしにしたことである。

「そうですか。」

「じゃあ、魔法以外の才能もあるんですね。」

「なんとか食いついてくれたが、」

「俺は昔を思いだして頭を抱えていた。」

「ちがう、あれは才能じゃない。」

「馬鹿親父と馬鹿爺によって地獄のような訓練を」

「させられたから自然と身に付いちまったんだ！」

「そ、そうですか。」

「なんか俺がダークな感じになりかけてきたら」

「同情の視線を向けてきやがった。」

「同情しないでくれ〜！」

「いえ、そんなことは。」

「言いながら目をそらすな！」

「そう思っていますよって言外に言っているようなもんだぞ。」

「そ、それはともかくまだ不慣れでしょうから」

「取り敢えず部屋に戻る前に城の案内をさせていただきますね。」

「今度はこいつが話題転換をしやがった。」

「・・・そうか、なら案内を頼む。」

「ええ、では行きましょう。」

1人元気よく出発するハル、
それを後から追いかけて行く俺。

《なんだかんだ言っで、結局この世界で楽しんでいるんじゃないかな》。

舞の呟きが聞こえたが無視してハルを追いかける。

「ちょっと待てお前早いつて。」

ああ、今日もいい天気だ。

序章・第6話（後書き）

次は城の紹介後、おそらく学園に行きます。

ではまた次回お会いしましょう。

追記、

作者はまだ中学3年生のため夏期講習やらテストやらで忙しいので

これから努力はしますが毎日更新はきついかもかもしれません。
こんな小説を読んでくださる方々、申し訳ありません。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

序章・エピソード（前書き）

こんな小説を読んでくれている皆さん、更新遅れてスイマセンでした。

これからも度々更新が遅れる事があると思うので御了承下さい。

今回はまたまた主人公がパワーUPします。

ようやく学園偏に入れます。

それとエピソードと言っても序章の、ですよ。

急いで書いたので少しおかしいかも知れませんがどうぞ。

序章・エピローグ

「ふう、疲れた。」

ハルに城の中を案内してもらった。

案内してくれるのはいい、だが、あの変な生物や部屋はなんだ？

クラゲとライオンとゴリラが混ざった様な気持ち悪い生物、巨大な食虫植物（あれはもはや食人植物だった。）、思い出すだけで気持ち悪くなる。

他にも入っただけで肩に人の重みを感じる部屋や

マッドサイエンティストみたいな爺さんがいたりとか散々だった（解剖されかけた。）。

それに加えて今日こちらの世界に来たばかりで疲れが溜まっていたので

ベッドに横たわった瞬間、強烈な眠気が襲ってきた。

コンコン

音がした。

「コウジ？いるかの？」

「ああ、王様が、入ってくれ。」

眠い体に鞭打ち王の対応をすべくベッドから起き上がった。

「では、失礼するぞ。」

そう言つて王が部屋に入ってきた。

その手には綺麗な装飾の施された鞘に納まっている刀があった。

「なんだそれ？この世界には刀が無かつたみたいだが。」

「こいつは初代勇者が魔王討伐をした時の妖刀じゃよ。何千年も昔、名工が魂を込めて死ぬまで打ち続けたと言われる名刀じゃ。」

「勇者が妖刀かよ。」

「細かいことは気にするな、こいつは使用者が弱れば弱るほど切れ味と威力が上がっていくんじゃ。」

「おお、マジで妖刀だな。」

「こいつをおぬしにやろうと思つてな。」

もうすでに学園の手配が整つたからその餞別じゃ。」

言つて王は刀を投げてよこした。

「いいのかよ、こんなもん貰つて。」

「使えるのはお主だけなんじゃ、

我が国の宝じゃが使える者が使つた方が良からうて。」

「そういうなら貰つとくよ。こいつに名前はあるか？

名刀なら名があつてもおかしくないからな。」

「おお、そうじゃつた。そいつの名は陽影じゃ。」

名前の由来は、その美しさにある。」

言われて俺は刀を鞘から抜いてみた。

「すげえ。」

そこには一種の完成された何かがあつた。

美しい真っ白な刀身に正反対の夜を切り抜くような漆黒の波紋。

柄の所には太陽と月の装飾が施されていて、そこには赤と青の宝石みたいなのが埋め込まれていた。声を失うには十分すぎる美しさだった。

「わしもそれを見た時は、感動した。」

「どうすればこんな刀が打てるもんかと思ったわい。」

「ありがたいな王様。」

「何か言葉遣いと呼び方があっておらんのう。まあよいか。」

「そういえばさっき、学園の手配が済んだと言ってたがいつ出発するんだ？」

「そのことならいつでも良いぞ。今日中にでも出発できる。」

「そうか、でも出発は明日の朝ぐらいにしてくれないか？」

「今日は色々ありすぎて疲れてんだ。」

「ならゆっくり休むことじゃ。」

「そうさせてもらうとするよ。」

「では、わしはそろそろ戻るとするかの。」

「おっ」

部屋を出て行くこととした王様だが不意に何かを思い出したようで急に振り向いた。

「おっと、もう一つお主にしらせがあった。」

「何だ？」

「“ギルド”の登録が済んだからそれも伝えようと思ってたんじゃ。すっかり忘れておったわい。」

なにやら懐からカードと手紙のようなものを取り出して

渡してきた。

「これは？」

「"ギルド"の登録証明証とわしの書いた紹介状じゃ。それがあればかなりの優遇が受けられる。」

詳しいことは"ギルド"のものから聞いてくれ。」

「何から何まで悪いな。」

「お主らしくないのう、」

お主は自分に出来る事をしてくればそれでいいんじゃない。わしもわしに出来る事をする。」

「そっか、じゃあまた明日。」

「うむ、では改めて失礼する。」

王様から貰った物をひとまず机の上に放置し、ベッドに倒れこんだ、辺りはすっかり暗くなってきた。また直ぐに眠気が襲ってきた。

次の日俺はいつもの癖で5時前に起きてしまい、暇していたので体を動かそうと昨日隊長さんと戦ったコロッセオに向かうことにした。

一応”勇者”ということは広まっていないのでお手伝いさん
の人たちも気軽に話しかけてくれた。

コロッセオに到着し、

まずは準備運動を使用した時、舞から念話が入った。

《ねえねえ、コウ〜。》

(何だよ、気持ち悪い声出して。)

《ぬっ、気持ち悪いとは失礼な。

今日は君にお願いがあつてね、それで連絡なんだ。》

(今度は言つたい何なんだ?)

《なに、簡単さ君に僕の使いになってほしい。》

(は?使い?神の使いにでもするつてののか?)

《そう、その通りだよ。

使いになれば、君は”世界”から神として認識されな
くて済むし、君の魔力や神力がさらに桁外れになる。

その上、能力の制限が一部解除されて寿命もまた伸びる。》

(俺が更に人から外れていく・・・)

《じゃ、そゆことで。よろしく〜》

(え?待て、俺に拒否権は?)

《そんなものは最初っからあるわけないじゃないか》

(お前さっきお願いって言ったのに強制かー！)

舞に突っ込みを入れた瞬間、俺の体がピカッ、と光った。

「これはもしかして・・・また俺が神への一步を・・・」

《これでOK、また一步神に近づいたね。》

「くそっ。」

《まあまあ、何かしてごらんよ。》

言われたので、元の世界にいた時からやるうとしていたことをやってみる。

「あれできるかな？」

《あれ？随分昔にきみがいつてたやつかい？》

「そうだ。馬鹿親父で3人、馬鹿爺で4人が限界だった、あの技を。」

《ちなみにコウは二人が限界だったよね。》

「ああ、今の俺ならどのくらいいけるか分からないがな。」

言って構える。

「では、早速。

〔如月護身流体術 秘奥 幻武無双〕

言った瞬間鋼嗣が2人に分身した。

《おお、すごいね。》

「「まだまだ。」

更に魔力と気を使い身体能力を上げ、次々に分身、ついには100人を超えた。

「「「うわお、俺自身ビックリだぜ」「」

《100人とはやるね、そこまでいけば神にも通用するんじゃないか?》

おどけた様に問う舞。心の中のだが。

「どうだが、神様に向かう気は無いさ。」

そんな舞の問いに分身を解いて答える。

《でも、元の世界で二人に分身出来ただけでもすごいとおもつ。》

「うるせいつ。どうせ俺は人外だ。」

《ははっ、君は既に神なみだよ。》

「笑えない冗談だ。」

《今更なんだけどさ、護身ってついてるのに少し過剰防衛じゃないかい？》

「それは俺も爺に聞いたことがあるんだが、爺いわく、
「やられたら殺り返す、やられてなくても殺つちまえ、
護身はあくまで名目だ。それは気にしたら負けなんだよ。」
とか言ってるやがった。」

《と、とんでもないお祖父さんだね。》

「ああ、でなければ今の俺はないからな。」

《おっ、そろそろお呼びがかかったようだよ。》

コロッセオの端から兵士が来た

「それじゃあ、行くとしますか。」

「コウジ様、ご飯の用意ができました。王様方がお待ちです。お急ぎ下さい。」

「はいよ。」

玉座のあった部屋の近くにある王族専用の食堂のような所で少し早めの朝食を取ることになった。

テーブルについて料理が来るまでの間、ハルや王様と会話をすることにした。

「なあ、ハル。お前はどつするんだ？」

「どつ、と言われますと？」

「学園のことだよ。お前が補助してくれるって言うってたけど俺が学園にいたらそれも出来なくなっちゃうだろう。」

「その事でしたら、すでにお父様に話してありますよ。」

「私も一緒にいきます。」

「えっ？いいのかよそんなことして。」

「大丈夫じゃ、ハルピュアにとつてもいい経験になるじゃろうつて、それにお主と一緒にいくと言つて聞かなかつたしのつ。」

「なつっ！それはくそのくえつと、」

「そうか、それは嬉しいな。俺なんかに付いて来てくれるなんて。」

「はい、私も一緒に行けてうれしいです。」

本当にうれしそうな笑顔で言うハル。

「普通の学園生活になりますように・・・。」

誰にも聞き取られないように小さく呟く。

だが、王様だけがこつちを見て苦笑いしていた。

どうやら聞き取られたようだ。

一体何者なんだろう。

くきみに平穩などあるわけ無いだろう（笑） by 作者く

またあの悪魔のテロップが流れてきた。

俺はあえてそれを無視して、無理やり話を進めた。

「な、なあハル、学園って基本的に何をするとこるなんだ？」

「学園はですね、魔法に関することと普通の勉強、それに
ある程度の武術、あと、王国騎士団を目指している人が受ける
特別訓練など大抵のことは教えてくれます。」

「それなら俺も十分に楽しめそうだ。」

「フォツ、フォツ、フォツ、楽しんで来るんじゃないな。」

ハルピユアもの、めったに無い機会じゃから。」

「おう、楽しんでくる。」

「折角の機会ですからね。」

「うむ。」

そんな話をしているうちに料理が出てきた。

いかにも金のかかったっぽい料理だ。味も見た目通りうまかった。

そして王様たちとの楽しいおしゃべりも直ぐに終わり、
いよいよ学園へ行くことになった。

「では気をつけての。コウジ、ハルピユア。」

豪華な馬車に乗り込み待機しているとき外から
王様に別れの言葉をかけられた。

「おう、行ってくるぜ。いろいろありがとな。」

「行ってまいります。」

2人して返事をした。

「うむ、行って来い。」

王様と数人の兵士に見送られて、学園へ出発した。

「ようやく到着したな。」

「ええそうですね。」

馬車に乗ることおよそ3時間。それほど離れてはいないようだ。表面上は何事も無く無事に学園に着いた。

（実際は来るまでの間にモンスターに襲われそうになったがそのたびに鋼嗣が魔法の練習の的にしていたので誰も気付く事は無かった。ちなみに、ここに来るまでの間に鋼嗣は全属性の魔法を発動できるようにはなっていた。）

周りにはすごい人数の人がせめぎあっていた。

「まずは何処に向かえばいいんだ？」

「多分、受付だと思っんですが・・場所が・・」

「なら周りの奴らについていくか。」

「そうですね。では、行きましょうか。」

しばらくの間はぐれないようにしながら人の波に流されていった。そして歩くこと数分、ようやく受付らしきところに着いた。

「受付をしてきますね。」

そう言っただけで受付に向かうハル。

しかしその途中で貴族っぽい格好のやつにぶつかってしまい、腕をつかまれた。

「何処まで俺の平穩を壊せば気が済むんだ？この世界は。」

しょうがなく助けに行くことにする。

「お嬢さん。ぶつかったらとりあえずは謝りましょうよ。」

「そっちからぶつかってきたのでしょう、謝るのはあなたの方ですよ。」

「素直に謝ってくださいよ、
でないとうっかりと手が出てしまいますからねえ。」

行って平手打ちをしようとした男の顔面をを手加減してぶん殴った。

「へぶつ。」

変な声を上げて吹っ飛んでいった。ざまあ。

「きみ、僕を誰だと思っているんだい。」

ぼくはね、上級貴族」

むかついたので続けさせずにまたぶん殴ってやった。

「――僕を怒らせたね、この代償高くつくよ。」

「ああ？うるさい黙ってるお坊ちゃん。」

「きみ、許さないよ！」

少し怒ったそぶりを見せる男。

「我が前に立ちはだかる敵を無効化せよ　ハクリアーウォール！」

「えっ、結界魔法？」

ハルが驚いた顔をしている。

男が詠唱した瞬間、俺と男の周りに透明なバリアみたいのが出来た。

「ふふ、ここは発動者以外の者が魔法を発動することが出来ない結界だ。さあ、謝るなら今のうちだよ。君たち。」

「コウ様！」

「大丈夫だよ。こんなの。」

「なっ。こんなのだって、ふざけるのも大概にしてほしいね。」

風よ、我に宿りてその力を示せ　ハウィンドカッター！！」

何もせずにその場に立ちつくす俺。

「コウ様！避けてください！」

「ふははは、死ねえ！」

直撃。辺りに砂煙が立ち込める。

しかし俺は無傷。煙の中から無傷の俺が姿を現したとき、

「良かった。」

春が安堵の声を漏らす。

「何っ！魔法は使えないはずなのに、一体何を。」

「何もしてないさ、あんな攻撃避けるに値しない。」

今度はこっちの番だ。行くぞ！

「如月護身流剣術攻式式ノ型 鎧透」！

鎧透は実際の10%の威力の斬撃を相手の神経に直接ぶち込む技だ。流石に陽影だと殺してしまいかねないので木刀を創り、それで攻撃した。

「がああああ！！」

今までに味わったことの無い痛みが相手の体を駆け巡る。痛みを耐え切れずに男は気絶した。

それと同時に結界が消滅しハルが駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか？お怪我はありませんか？」

「ああ、何処もなんとも無いし平気だ。」

「そうですか、では改めて受付をしましょう。」

周りが何か騒いでいたがそんなものはお構いなしに、引きつった笑いを浮かべた受付のお姉さんに受付をしてもらい、なんとか中に入れた。

「では、体育館へお進み下さい。」

途中の案内人に案内されて、入学式（入園式？）の会場へと向かっ

た。

「いよいよですね。」

「ああ、学園生活、どうなるのかな。」

もといた世界ではまともな学校生活を送れなかったのが
今度こそ普通に平穏な学園生活を送ろうと決意する鋼嗣であった。

序章・エピソード（後書き）

いかがでしたか？

しばらく更新が出来なかったので報告し損ねましたが、

この小説のPVが6000オーバー、ユニークが1200オーバーになりました。

まだまだ少ないですが皆様のおかげです。ありがとうございます。

毎日更新できないだけで1日あたり5分の1程度のアクセスしかないですね。

これからもがんばっていくのでよろしくお願いします。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

第1章・1話 測定（前書き）

今回からようやく第1章に入れます。

それと第1章からタイトルが付きます。

では、どうぞ。

第1章・1話 測定

「これより入学式を開始する。」

司会者が開始を宣言した。

「では、校長先生お願いします。」

学園なのに一応は入学式なんだな、とか思っていたら校長の話が始まるようだ。

どちらかと言えば線の細い、人のよさそうな人壇上に上がって礼をした。

「皆さんこんにちは。ご存知の方もいらっしやると思います。私はこの王国立ルシフ学園の校長です。

長つたらしく話すのもつまらないので手短に済ませましょう。」

なんとも生徒に優しい校長である。

「てめえらあ！学園生活を骨の髄まで楽しみやがれえ〜！！！！」

一拍開けて校長がハイテンションで叫ぶと周りも反応して

「~~~~わあああ~~~~！！！！！！！！！！」

結構のりのりだった。

「なんだかな、あの人こんな感じには見えないんだけどな。」

「人は見かけによりませんよ。」

ハルとそんな会話をしていたら今度は生徒会長の話へと移った。

「はい！生徒会長のレミネ・クレイ・ヴァイトですっ。

新入生の皆さん、宜しくお願ひしますねっ。」

アイドルっぽい雰囲気の新入生会長さんが学園についての説明をしてくれた。その途中、生徒の中からなにやら危ない視線が向けられが新入生会長さんはまったく気にせずにいる。

結構、神経は図太いようだ。

「ではこれにて入学式は終了します。」

新入生はこれよりクラス分けを行うので闘技場まで向かってください。

係りの案内しますので付いて行ってください。」

ぞろぞろと立ち上がり移動する生徒の波に飲まれて俺とハルも向かうことにした。

「なあ、ところでハルは目立たないのか？」

「私は召還の巫女としてはたいして目立ってはいませんよ。」

おそらく殆どの方が召還の巫女と言うよりも預言者、と言った方が分かりやすいでしょう。それでも顔は見せていませんので気付く方は皆無だと思われまます。」

「それならいいか。俺はあんまり目立ちたくないのね。」

「そんなこと言ってもさつき受け付けのところだ。」

めっちゃくちゃ目だっていましたよ。」

「あれはしょうがない。正当防衛だ。」

「手を出されたのは私なんですけど・・・」
「細かいことは気にするな。」

ハルと話をしながら人の流れに流されていったら、
もうコロッセオに着いたようだ。

・・・最近時間がたつのが早い気がする。

「それでは新入生は先生達と戦ってもらおう、それによりクラス分けを行う。先生の判断により、S、A、B、C、D、E、F、G、Hの順にクラスが振り分けられる。先生達はそれなりに手加減してくれるから心配するな。」

ちなみにSに近づくほど優秀と判断されている。
クラス分けには魔力量などはほとんど関係ない。なるべく上のクラスに入れるようにがんばってくれ、では・・・始め!!」

104

かなり巨大な闘技場なので同時に30人程の先生が生徒を1人づつ相手にすることができていた。
そうこうしている内に俺の番が来た。

「では次っ！来い！」

この戦闘狂じみた先生が俺の相手らしい。
この人さつきからたくさんの新入生を
タンカーで運ばせているが、大丈夫なのだろうか、教師的に。

「宜しく頼む。」

「はっはっはっ、面白い新入生だな、俺にタメ口とは。
さあっ、楽しませてくれよっ！」

どうやら戦闘狂で間違いないようだ。
まったく。先生が戦闘狂ってどうよ？

「何もしてこないのか？ならこっちからいくぞ！」

一瞬で背後に回りこみ練習用の木剣で斬りかかって来た。

「甘いよ。」

言って、陽影を抜刀し振り向く形で先生の一撃を受け止める。

「俺の動きについてくるか！面白い！」

だが、次はそう簡単は行かないぞ！」

先生がそういった瞬間、

炎と氷の竜をかたどった攻撃が俺めがけて飛んで来た。

「無詠唱！？でも、俺にはきかないよ。」

陽影に「分解」を纏わせてその魔法を切り捨てる。

「ぬっ、無効化か？だが魔力反応が無い？

わからぬならっ、押し切るまで！！」

さっきと同じようなだが大きさがケタ違いの竜が
属性違いで20体、あらゆる角度から飛んで来た。

ドガアアアーン！！！！

とんでもない爆音とともに闘技場の地面にクレーターを作る。

「やり過ぎちまったか？」

「いやいや、先生、今のは無いでしょう。
並みの新入生なら死でいますよ。」

爆煙を陽影を振るうことで払い、
何事も無かったかのように飄々と言う。

「！？あれでくたばらないとは、いいねえ、楽しませてくれる。」

いつの間にか戦っているのが俺達だけになっていて、
周りからすごく注目されている。

「そろそろ決着つけるとするか。行くぞ！

「如月護身流体術 我流奥義 砕九」！

「俺も全力で行くかあ。おらよつて・・・がはっ・・・」

先生は構える前に血を吐いて倒れた。

余裕で、構えを取らない俺の動きから

先生の攻撃が先に当たると思われたが、

実は俺の攻撃はすでに当たっていたのだ。

それは刹那の出来事。

認識するよりも早く、結果となって現れる。

砕九は光速で回避不能な打撃を打ち込む技。

魔力による浸透破壊を9連続で打ち込み圧縮した

魔力を体内で暴発させる荒業だ。

この世界に来てから考案したものだ。魔力自体を操作できるようにしたのはいさつきなので先生が実験台だ。威力は最小にしたが、まだ完全に魔力を操りきれしていないので万が一もありえる。

そのため直ぐに駆け寄った。

「先生、大丈夫か？」

「ああ、なんとか。それにしてもあの技は反則だな。俺だからいいものを、一般の生徒に使うんじゃないぞ。後、お前は文句なしにSクラス決定だ。受付の時に大暴れしてた奴がいると聞いたがあれはお前だよな？」

既に答えが分かっているのか確認の意味で聞いてくる。

「あれでも威力は最小だよ。先生こそ本気ではなかっただろう。」「ばれちまったか、これでも生徒を殺すのは気が引けるからな。」「そんなこと言っても途中、完全に殺す気だったろう。」「そ、そんなこと無いって・・・多分。」「多分かよっ！そこは否定してくれよ！」「ふう、ではそろそろ戻るとするか。」「

横たわったままそんな事を言う。

「無視すんな。」「

「そろそろ行かんとまずいだろう。」「

こっちを心配そうに眺めているハルと目が合った。

「そうだな、行くか。」

体があまり動かない先生に肩を貸して立ち上がらせた。

「とりあえずこの人頼む。」

近くにいた救護班らしき人たちに先生のことを任せて
さっさと戻ることにした。

「さつきから無茶すぎです。もう少し気をつけてください。
見ていて危なっかしいです。」

どうやら心配をかけてしまったようだ。

「すまないな。心配かけて。善処しよう。」

取り合えず謝つといた。

「そうしてくださいね。ほんと。」

「そろそろ教室に向かうか。」

「なんかはぐらかされた気がしますがまあ行きますか。」

周りまたしても騒いでいたがあえて無視して教室まで向かうことに
した。

案内板に従い教室まで何とかたどり着いた。

入っていきなり、注目された。あれだけ暴れれば当然だろう。だが、それらの視線を無視して空いている席に適当に座る。

(入学早々、先程ハルに言った事を訂正せにやらんな。)

「全員そろったか？そろったら自己紹介をはじめろぞ。」

さっきの先生がいた。

「復活はやっ！」

「俺のとりえは回復の早さだからな。それよりも、まずは自己紹介からだ。最初は下の列の一番右端から始めてくれ。」

教室は教卓を中心に段差上に生徒が広がっている感じた。

俺は自己紹介なんかに興味が無いので取り合えず寝ることにした。

「コウ様、そろそろですよ。」

結構いたので時間が掛かると思ったのだが、それでも無かったようだ。

結局直ぐに俺の番が回ってきた。

「コウジ キサラギだ。宜しく頼む。」

「よし、全員終わったな。そして最後に俺だ。

俺はレイト・ノアズ・フォールズ。これから

長い付き合いになる、宜しく頼むぞ。」

生徒では俺が最後だったらしく最後に先生が自己紹介をした。

「とりあえず、朝のホームルームはここまで、これから休み時間だ。全員次は魔力測定だから準備しとけよ。」

授業の説明や学校の事についてはもう少ししてからだ。以上、解散。」

そう言って出て行くレイト。

休み時間になったせいか急に騒がしくなった。

「ねえ、聞いたわよ。」

あなたがあのおうざっいたらしい貴族をばこしてくれたんだって?」

「うるさいなあ」「とぼやいていると不意に声をかけられた。」

「貴族?ああ、受付の時のか。あれはうざかったからな。」

何でこいつがそれを?と思いつつも聞き返す。

「くすっ、あなたとは気が合いそうね。」

「僕と結婚してください。」

「えっ?ええっ?」

「何やってんの、馬鹿!」

「うはっ・・・」

俺が見知らぬ女子生徒と話している時その隣にいた

男がハルに変なことを言っつて女子生徒に殴られていた。

この絵図らは中々面白い。

「そついえばお前ら誰だ?」

「あそういえば自己紹介がまだだったね。
私はナナ・エリス・エンプティーよ。
それでこっちの馬鹿が・・・
「ラウ・ロード・リベオンだ。よろしく」
「ああ、馬鹿だな。」
「ええ、馬鹿よ。」
「気持ち悪いです。」

ハル、ストレートすぎるのは色々問題だぞ。

「ハル、思っけていても言っちゃだめだぞ。」
「俺を馬鹿って言わないでくれ〜!!!!」
「これはほつといてとりあえず自己紹介だな。
俺はコウジ キサラギだ。よろしく頼む。」
「ハルピュア・テミストス・ガールントです。
ハルとお呼びび下さいね。」
「ええ。よろしくね。」
「こ、これ?・・・って俺は物扱いか!」

落ち込んでいる馬鹿^{ラウ}を放って置いて話を進めた。

キーン、コーン、カーン、コーン

学校特有のあのチャイムが鳴った。

「やばつ。次は魔力測定だった。急ごう。」
「ええ。」
「はい。」

「おう。」

4人で大急ぎで支度して教室を飛び出た。

こんな日がいつまでも続けばいい、
そう願わずにいられない鋼嗣だった。

第1章・1話 測定（後書き）

砕九・・・分かった人いますか？

ちよつとマイナー（？）なゲームからのパクリ技です。

ではまた次回お会いしましょう。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIB>です。ご協力お願いします。

第1章・2話 部活（前書き）

今回はラウがとってもかわいそうな事になっています。
最近アクセス数が回復してきました。
では、どうぞ

第1章・2話 部活

「急げ急げ、遅れるぞ。」

「分かってるって、そんな走らなくても多分間に合ってる。」

「何を言っている、失われた時は取り返せないんだ、だから俺は常に全力で生きるのだ!!!」

うおおー!!!とか言って走り去っていく馬鹿。

「まったくあの馬鹿は、くくはあくく。」

俺とナナが揃ってため息をつく。

「ま、まあ、ああいう考え方も一理ありますし、ほら急がないとラウさんを見失ってしまいますよ。」

「そうね、さっさとあの馬鹿を追いかけてみましょうか。」

「そうするか。それにしてもとんでもなく広い学園だな。」

「それはここの創始者が趣味で作ったみたいよ。」

他にも迷惑極まりないトラップや迷宮みたいなのまであるみたい。」

「創始者も馬鹿か。ここは大丈夫なのかな。」

雑談をしながら馬鹿を追いかけることにした。

魔力測定器があると思われる教室の前には結構な人数の人だけかりができていた。

時々、「おおつ。」とか「すげ〜。」とか声が聞こえる。

自分の魔力量なんかが周りにも知らされるのだろう。

その中に馬鹿の姿もあった。

「おい、何やってんだ？」

「見てみる、今やっている女子。」

「ん？べつに魔力量が高いわけでもなく、使える属性もそんなに多くないぞ。」

「馬鹿、ちげえよ、よく見てみる。かわいいじゃないか。」

学園と言えは女の子、俺はこのために来たんだZ・E！青春だ〜！
！」

「「死ね、変態。」

言って女子に跳びかかるうとする馬鹿を俺とナナでぶん殴る。

「じvひしyぶあおjrbく」

俺とナナにより、挟み込みで顔面をぶん殴られた馬鹿は、
意味不明な叫び声をあげてダウンした。

「「一生くたばってる、変態。」

俺たちの息ぴったりのコンビネーション技により苦笑いを浮かべるハル。

「ちよつとやりすぎじゃないですか？」

「馬鹿にはこれぐらいが丁度いい。」

「ほつとくと付け上がるしね。」

「俺はこの程度ではくたばらん！諦めん！暗記らめんぞお〜！〜！」

何か復活してきたらラウ。

「「もう一回くたばれ！変態！」

「じゅひしゅぶあおじぶく」

復活して早々また飛び掛りそうだったのもう一度沈めといた。今度はダブルデボディーブロー決めといたからしばらくは平気だろう。

・・それにしても同じ悲鳴を上げるとは器用な奴だ。

「ふ、復活早かったですね・・・」

「馬鹿にはああいうのが多いんだ、気をつけるよ。」

「次の生徒、どうぞ。」

馬鹿ラウを葬っていたら俺たちの番になったようなので教室に入った。

「では1人ずつこれを持ってください。」

そこには城の魔書庫にあったスライムとは違い、CTスキャンを小型化したみたいなのが装置があり、まずはナナから測ることになった。

「動かないで下さいね。」

白衣を着た女の先生が装置をいじりだした。見た感じ、保険の先生か何かだろうか？

「はい、もういいですよ。これがあなたのデータです。後で確認しておいて下さいね。」

「ありがとうございました。」

なにやらたくさん書き込まれた紙を持ってナナが装置から離れた。

「じゃあ、次は・・・」

「俺が行く！」

ハルに行ってもらおうとしたらいつの間にか復活したラウが測定してもらったことになった。

「はい、あなたのはこれね。」

さっきと同じ操作をして、できた紙をラウに渡す。

「後で一緒に食事しませんか？」

「はい、次の人どうぞ。」

「無視しないで下さい〜。」

ラウの発言を見事にスルーした白衣の先生、ラウはこのようなキャラで確定だな。

「次はハル行つて来いよ。俺は最後でいい。」

「はい、行つてきますね。」

同じ作業を終えてついに俺の番が廻ってきた。

「じっとしててくださいね・・・え？あ、まずい！！
みんなここから離れて！！！」

先生が言った瞬間、城の時のように装置が木っ端微塵に吹き飛んだ。

「大丈夫ですか？怪我はありませんか？」

先生がまずはみんなの安否を確認する。

「それにしても何なんだよ、今は。」

「俺が測定をすると毎回こうなる。」

降り注ぐ装置の破片を浴びながらラウとそんなことを話していると先生が、

「装置を壊すなんて・・・賢者クラスでもありえないのに・・・」

ぼうつとしながら呟いた。

さっきまで生徒の心配をしていたが、今、事態に気づいたらしい。

「あつ、こ、これがあなたのデータです。」

自分の役目を思い出し、何とか残ったらしい紙をくれた。

直ぐに教室を後にしたが、

外にいた生徒たちが「何だ？」とか言っていたので

あまり怪しまれないように測定室を立ち去る羽目になった。

「クラス分けの時に強いつてのは分かってたけどまさか魔力測定器を壊すなんてね。」

「お前、すごいな。あんな魔力量、始めて見た。」

「何度見ても非常識ですね。」

直ぐに教室に戻った俺たちは自分たちのデータを見せ合っていた。

「ああ、なんせ測定不能とかでできたし。」

俺たちのデータはこうだった。

コウジキサラギ

魔力量・・・測定不能

使用可能属性・・・全て

得意属性・・・無し

ハルピュア・テミストス・ガーラント

魔力量・・・A

使用可能属性・・・火、水、風、土、雷、嵐、光

かみなり

得意属性・・・風、光

ラウ・ロード・リベオン

魔力量・・・B

使用可能属性・・・火、土、炎、岩

得意属性・・・炎、岩

ナナ・エリス・エンプティ

魔力量・・・S

使用可能属性・・・火、水、風、土、かみなり雷、無、破

得意属性・・・無、破

魔力量の評価はSSSまであり、それに近づくにつれて多い魔力を持つことを表すしている。また、一部の特殊なものは表示されない。

「無なんて珍しいですね。」

「ええ、家の血筋の女の人は全員使えるのよ。」

無属性の魔法は使える魔法士が少なすぎてあまり知られていない。

「それよりも、コウジ、お前一体何者なんだ？」

「なんでもないさ。ただの人外の青年だよ。」

「人外って自分で言ったら駄目でしょう」

そんなコウジの言葉に呆れながらも突っ込みを入れてくれるナナ。

「お前ら、全員魔力測り終わったか？」

終わっていれば次は学校の説明と魔法に関する授業だ。

場所はここでやる。遅れるなよ。」

俺らが見せ合っている内に測定が終わったらしい。

・・・そういえばあの測定器どうしたんだろう。

弁償させられなえればいいけど。

キーン、コーン、カーン、コーン

「ではまずこの学校についての説明を始めるぞ。まずは最初にパンフレットを配る。」

チャイムと同時にレイトが説明を始めた。

意外としっかりしてるんだな〜とか思いつつ話に耳を傾ける。

「こころシフ学園では魔法や武術に加え、通常の授業や王国騎士団を目指している奴が受ける特別訓練など様々なことを教えている。実技と筆記の定期テストもきちんとかやるから覚悟しておけよ。」

「『『『ええええ』』』』『『『』』』』」

テストの単語が出てきたときクラスじゅうから声が上がった。

「それよりも！この学園の行事の一つに武芸大会や体育祭、学園祭に校長の思い付きによる色々なじけん・もとい色々な催しものがある。」

おいおいおい、今、最後のところ事件って言いかけなかったか？

隣にいたハルに目を向けてみるがハルもこちらを見て苦笑いしていた。

周りの生徒もざわざわしていた。

「と、とにかくそれらは魔法の使用も許可されている為、非常に危険だ。

特にお前ら新入生はまだ魔法の使い方が完璧ではない。だからそれまでに

魔法を使いこなすべくたくさんの魔法の授業が入る。その授業とは

主に

魔力操作や対モンスター用の戦闘訓練などだ。
これらを毎日4時間以上はしてもらおう。」

「……よ、4時間!?」「……」

「ああ、まだまだ序の口だな。
それと、全員特別な理由が無い限り部活動には強制参加だ。
各々興味のある部活に見学しに行ってくれ。」

「……はい。」「……」

「よし、じゃあ今日の授業はここまで。」

50分授業らしいがなんだかすごく短かった気がするが気にしない
ことにする。

それにはほ高校と同じなのに50分授業ってどうよ?

現在は本日二回目の休み時間。

「どこいくかな?。」

配られたパンフレットを眺めながら悩む。

「行く場所が無いなら、生徒会にでも行かないか?」

「あそこって部活なの?」

「さあ?」

それにさつきからそれしか言われてないよ?」「
「それはあんたが本当に気持ち悪いからよ。」

ナナがバコツといい音をさせてラウの頭を引っぱたいた。
これは・・・漫才か?

「何でそこで殴る!?!」

「なんとなく。」

すっぱりと言い放つナナ。それって結構ひどかったりします。

「まだあつて間もないのに俺の扱いひどっ!」

「それだけ仲がいいって事なのだよ。」

「おお、そうだったのか!感動したぜ!」

ごまかしに感動するラウ。哀れに思いながらも続ける。

「そうだ、みんなお前のことを親友だと思っているよ。」

「そうか、ナナやコウジ、ハルちゃんの対応がひどかったのは俺のことを親友だと思っていたからだったんだね。」

ここまでくると本当にかわいそうになってくる。

「哀れね。」

「かわいそうです。」

「ん?なんか言ったかい?」

「「「いや(いえ)何も。」」」

「そうか?では気を取り直していこう。」

鼻歌交じりにスキップを再開するラウ。

「ほんと、何があるんだろう。いやな予感しかない。」

「同感ね。」

「同感です。」

馬鹿^{ラウ}を追いかけていく事数分。それらしき部屋付近に到着。

そういえば何故ラウは道を知っているのだろうか、

ふと、そう思いながらも魔法研究部と書かれた板の張ってある部屋へと向かう。

部屋の前で入室の許可を取るべく声をかけようとしたとき、ドアが急に開いて人が急に出てきた。

出てきた人物は……

第1章・2話 部活（後書き）

ラウが絡むと凄く書きやすいです。

これからも葬られてもらいましょうかね。

では、また次回お会いしましょう。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

キャラクター紹介 その二(前書き)

若干のネタばれがありますが前回のキャラクター紹介同様、書ききれていない部分の補足としてどうぞ。

キャラクター紹介 その二

レミネ・クレイ・ヴァイト

身長168cm、体重52kg。女。茶色つばい髪、金色の瞳。長めの髪をまとめている。

生徒会長兼魔法研究部部长。スタイルはいいらしい。学園4年生

小さい時からの癖で大勢の人の前でスピーチをすると緊張の所為で変な

喋り方になってしまう。それ以外ときは、かなりハイテンションでよ

く語尾に を付ける。意外とSつ気がある。魔法の技術はかなりに高く

魔力量はSSランクで下位と中級魔法は全て使える。

生徒から絶大な人気を得ており、ファンクラブ的なものまで存在する。

ナナ・エリス・エンプティ

身長156cm、体重43kg。女。黒つばい灰色の髪、黒目。

首筋くらいまでのショートカット。学園1年生

明るく活発な感じ。コウジと一緒によくラウをぶちのめす。

何故だか微妙にコウジとのシンクロ率が高い。

一家の女性は魔法士としては珍しい無属性を得意とする。

たくさんの人が集まると作者的に扱わずらいが、

ラウが関係する時はとても使いやすいキャラ。

ラウ・ロード・リベオン

身長178cm、体重68kg。真っ赤な髪に同じく真っ赤な瞳。
現代アイドル風の髪型。学園1年生

馬鹿。だが、馬鹿であるが故に正義感が強く、自分に対して真っ直ぐ。

よく変態的な行動や馬鹿なことをしてコウジとナナにコンビネーションアタックを食らい沈められるが馬鹿的な補正により驚異的な復活力を誇る。

作中、最も書きやすく最も扱いやすいキャラ。

レイト・ノアズ・フォールズ

身長184cm、体重76kg。男。黒髪、黒目。坊主に近い長めのショート。

コウジ達の担任教師。クラス分けの時にコウジとの戦闘を楽しむなど戦闘狂じみた性格をしており、それが災いしておりよく問題を起す。

しかしながら、チャイムと同時に授業を始めるなど、意外とまじめな一面もあり、生徒からの信頼は厚い。

キャラクター紹介 その二（後書き）

今日は時間が無いのでこれで勘弁してください。
また明日、本編を投稿出来ると思います。

ではまた次回お会いしましょう。

第1章・3話 魔法研究部（前書き）

本来作者の苦手分野である恋愛要素が少しだけ出てきたかものです。

では、ごきげん。

第1章・3話 魔法研究部

部屋から出てきたのは……なんと、会長さんだった。

しばらく驚いた顔をしていたが直ぐに立ち直り聞いてきた。

「え〜っと、あなた達は？」

「魔法研究部の見学に来ましたっ！」

会長が尋ねた瞬間にラウが間髪いれずに答える。

その反応の速さに若干ひいていたが、すぐに笑顔で対応してくれた。

「じゃ、じゃあ中に入って、部活動の紹介をするわ。」

そう言っただけに入れてくれた。

中は20畳程ありかなりの広さだった。

本棚にはたくさんの本と資料が収められていた。

机の上には生活感あふれる光景が広がっていた。

具体的には空の弁当や紙コップ、大量のゴミにノートや本、

極めつけは用途不明の毒々しい色をした液体入りのプラスチックが多数。

なかなかすごい部屋だ。

「ああ、気にしないでね、直ぐ片付けるから。そこら辺のイスに座って待ってて。」

言っただけで会長さんは大急ぎで部屋の片づけを始めた。

と言っただけで、部屋の奥の開いているスペースへ押し込んだだけだが。

「はあ、はあ、さっそく部活の紹介でもしましょうか・・・疲れた。」
「取り合えず落ち着けよ。そんなに急いで片付ければ疲れるのは当たり前前だ。」

今にも倒れそうだったので肩を貸してイスを引いて座らせる。

「あ、ありがとう・・・」

会長さんは意外と背が高い為、俺と目線の位置があまり変わらない。そのため顔の位置が近く、その金色の瞳を見つめるような形になってしまった。

だが、そんなことは気にしない俺はそのまま会長さんを下ろした。

「もう少し反応があってもいいような気がするんだけどな。女の子としては何か複雑ね。」

小さく呟く会長さん。

聞かなかったことにして取り合えず質問をしようとする。

「ずるいぞコウジ。」

「うっさい黙ってる。」

ラウがなんか言ってきたので、取り合えず黙らせてから質問した。

「この部長は？」

「私よ、そういえば自己紹介がまだだったわね。」

生徒会長兼魔法研究部部長のレミネ・クレイ・ヴァイトよ。」

やたら長い自己紹介なこと。言い辛そうだな。

「なんだか入学式の時のスピーチしていた時とは雰囲気が違うな。」

「大勢の前で話す緊張してあんな喋り方になっちゃうのよ。」

それにしてもあなた、先輩に対してもタメ口なのね。」

「ああ、俺は敬語つつうのが苦手だな。先生に対してもこんな感じだ。」

「そうなの。」

「あのお、お二人さん、お話中悪いんですが、部活の紹介を。」

とりあえずラウが代表してたずねる。

「そうだったわね。ここ、魔法研究部ではそのまま魔法の研究をしているわ。」

それ以外にも魔法の訓練や授業の補修なんかもしているわ。」

比較的、新人生にはお勧めよ。分からないことがあっても先輩に聞けるし。」

「いいですねっ！」

「鼻息を荒くしながら言うな、あと気持ち悪い視線で会長さんを見るな、

失礼だと思うぞ。」

「会長があまりにも美人さんだったのでつい、

それに君に失礼とは言われたかないね、敬語すら使って無いじゃん。」

「俺のは気にするな、もう手遅れだ。」

「自分のは棚に上げんのかよ。」

「はいはい、そこまで、今言い合いなんてしないで欲しいんだけどな？」

少々けんか腰になってきたところで会長さんから静止が入る。

「はい。」

面倒なことになる前に素直に従つとく。

「よし、で、結局あなた達はどうするのここに決める？」

「応今は諸事情により部員は私だけよ。」

「俺はここでもいいがお前たちはどうする？」

「コウ様がいいのならわたしもここで。」

「俺はもちろんここにきまつてるじゃないか。」

「私もここでいいわよ。なんかほかがいいところなさそうだし。」

「じゃあ、ここにサインしてね。」

4人分の紙とペンが渡される。セリフが何か怪しい気もするが、俺たちはそれにサインして会長さんに渡す。

「ありがとね、いや、部員が足りなくて困ってたんだ、ほんと。」

「なんか一気に軽くなったな。」

「部員確保できるまで相手を不快にさせちゃ駄目だと思ったからね。」

「そんなこと気になさらなくてもよかったのに。」

ラウが言う。

「「「すみませんこんな馬鹿で（気持ち悪くて）」」」

今まであまり喋っていなかったナナとハルが2人して結構ひどいことを言う。

それに慣れかけてきているのかラウは最初程ダメージを受けていないようだ。

それでもかなり傷ついているようだったが。

「きみたち面白いわねえ、部活に来てくれてよかったわ。これからとつても楽しそう。暇じゃなくてよさそうだね。」

嬉しそうにクスクス笑う会長さん。

その姿は実年齢よりもずっと幼い少女のようだった。

しかし、そこには注意深く見なければ分からないが、そこはかとなない悲しみと・・・恐怖？が見え隠れしていた。

「あなた達は武芸大会について何か知ってるかしら？」

「いや開催されるぐらいしか知らない。」

「私たち魔法研究部はその武芸大会の中の部活動対抗戦に出るんだけど

毎年けが人が続出してるのよね、それでえつと・・・」

自己紹介をしていないことを思い出して4人とも自己紹介をする。

「コウジ キサラギだ。」

「ハルピユア・テミストス・ガールアントです。」

ハルとお呼び下さい。」

「私はナナ・エリス・エンプティーです。」

「ラウ・ロード・リベオンです。キラン」

ラウが無駄に歯を輝かせてアピールしたが

馬鹿に付き合ってもしょうがないと思い、会長さんも含む全員でスルーした。

というかどうやって歯を光らせたんだ？

「またスルーか。俺は、俺はどうすればいいんだ〜!!」

一人で騒いでるラウは放って置いて話を進める。

「ええ分かったわ。それでね、

今年は君たちに出場してもらっただけど、大丈夫かしら？」

心配してるっばかったので、俺たち全員の魔力測定データを渡した。

これを見れば少しは分かるだろう。

「な、何これ、とんでもないわね。

もしかしてレイト先生を倒しちゃったのってあなた？」

「そうだ。」

「そこのお馬鹿さん以外はかなりやり手のようね。特にコウジくんは。」

「俺も会長からの愛があればいくらでも強くなれますっ!」

感動的なセリフだがそれは寒いだけだ。

「じゃあ、一度だけ好きって言ってあげるから、死んでくれるかな？」

笑顔で言う先輩の目は笑っていなかった。

それを見たラウは・・・

「す、すみませんでしたあ〜!調子乗ってました!」

土下座の姿勢でびびりまくっていた。情け無い。

「ふふふ、最初からそうしていればよかったのに。」

怪しく目を光らせながら言う会長さん。

「俺には会長さんがよく分からなくなってきた。」

「よく言われるわ、それ。」

そんなことよりもそろそろお昼だからみんなで食べに行かない？

「べつに構わん。」

「はいっ、行かせていただきます。」

「行きましよう。さっきからお腹がなつてて。」

「構いません。」

もう昼飯の時間になっていたので生徒用の食堂へと向かう。

教室からそれほど離れたところにあるわけではないので直ぐに着いた。

そこで俺とラウがカレーみたいなのを、ハルとナナがサンドイッチみたいなのを、

会長さんはサラダとハンバーグみたいなのを頼んだ。

この世界に来てから間もないのでちゃんとした料理名が分からないので

それっぽい物を頼んだ。

それにしてもこの世界のあるものは俺のもといた世界のそれとほとんど変わらない。

特にこの学園なんて、現代の日本に建てても通用しそうだ。

「会長さんは生徒会でどんなことしてるんだ？」

「うーん、主に学生間でのトラブルの解決と時々来る雑務なんかよ。」

「そんな大変でもなさそうだな。」

「あら、そんなことは無いわよ。」

「なんなら生徒会に来てみない？歓迎するわよ。」

「いや、遠慮しとく、めんどくさそうだ。」

「残念。」

心底残念そうにうな垂れる会長さん。

俺を引き込もうとする人はなんだか断られた後の顔が同じ様な気がする。

「お待たせしました。」

学食の癖に頼んだ料理を届けてくれた。値段の割りには味もうまいし、

サービスもいい、この食堂はかなり人気がありそうだ。

「俺らはいつ頃部活に参加すればいいんだ？」

運ばれてきた料理を食いながら質問してみた。

「それなら私が会長としての権力を使って連絡するわ。」

それってありなのか？

「ずいぶん軽いんですね。」

「何か言ったかしら。」

「いえ、滅相もございません。」

「そう。」

「うわあ、ハル、あれがヘタレの鏡よ。絶対に気にしたら駄目よ。」

「はい、なるべく関わらない様にします。」

「俺を見捨てないでくれえ。コウジは！コウジは見捨てないよな！？」

助けを求められたので目が合わないように目をそらす。

「頼むよお、そこで目をそらさないでくれえ。」

情けない声でわめくラウに例のごとくナナとコンビネーションアタツクを

繰り返し黙らせといた。

今回は俺らが悪かった気がしないでもないがそこはスルー！

「結構えげつない事するのねあなた達。」

「これが一番楽だからな。」

「馬鹿を黙らせるには効果的な方法なんです。直ぐに復活しますが。」

絶望していたせいもあってか珍しくなかなか起き上がってこないラウを

放置し俺らは食べ終わった。

食器を片すべく会長さんたちが立ち上がった。

「いいよ、食器は置いてくれ、俺が運ぶから。」

「あら、優しいのね。」

「人のために怒れるような方ですから。」

茶化す会長とどこか嬉しそうに話すハル。

「じゃあ、宜しく頼もうかしら。」
「ああ。」

言って会長さんから受け取ろうとした時、ハルが水をこぼしてしま
い、

そのせいで会長さんが滑って俺の方に飛んできた。

って、よくこぼれただけの水で滑れるな。

「おわっ!」

「きゃあっ!」

会長さんはそのままの勢いで俺に突っ込み、
覆いかぶさるような格好になってしまった。
流石にこのままではまずいのでとりあえずどいて貰うことにした。

「すまないが、どいてくれないか?重くて。」

「むっ、そこまで反応がないとなんか負けたような気がするわっ。
それに、女の子に向かって重いとは失礼な。」

むっ、と唸る会長さん。

「なんとなく言っただけだ、気にするな、実際は重くなかったから。」

「ならいいんだけど、なんか複雑ね。」

「すっ、すみません、お二人とも大丈夫でしたか?」

責任を感じているのかハルがたずねる。

「気にするな、俺はなんともないから。」
「私も、コウジくんが下敷きになってくれたから無傷よ。」
「そうですか、よかったです。」
「じゃあそろそろ片して教室に戻るとしますかね。」
「そうしましょう。」
「ええ。」

改めて食器を片付けて食堂を後にした。

「何か忘れてない？」

ナナが聞いてきた。

「そういえば、？ 何だろうな。」
「トイレで行き忘れたんじゃないの？」
「そんなことはないですよ。」

ふざけた答えと、それに対してまじめに答えるハル。

「気にしてもしようがない、さっさと行こうか。」

本当になにを忘れていたのだろうか。
まあいいや、そのうち思い出すだろう。

俺たちは教室へと向かった。

一方その頃食堂では。

「あれえっ？みんな何処いったのー？おーい、どーして？」

よじぢやく復活したラウがいた。

第1章・3話 魔法研究部（後書き）

やはりラウが葬られっぱなしですね。

少し改善していかないとマンネリ化しそうです。

では、また次回お会いしましょう。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIB>です。ご協力お願いします。

第1章・4話 夢（前書き）

今回はのやつは4回程パソコンの不具合により消去されてしまいました。

それによりすこしやつちやつちった感があります。
かなりグダグダですが、どうぞ。

第1章・4話 夢

・・・人は何を望み、何を願う？

・・・人は力を手に入れ何を？

・・・何故、人は神をあがめる？

・・・何故、形の無い慈悲を望む？

・・・何故、天使や神なのだ？

・・・悪魔や邪神ではだめなのか？

・・・それらは事実をくれる、慈悲は無いが真実をくれる。

・・・心の弱き者がそれらにすぎるのは間違いなのか？

・・・答えは否、断じて否。それもまた一つの選択。

・・・選択肢は無数にある。この世界と同じ。

・・・強き者が国を治め、弱きものがそれに従う。

・・・世界は答えを知らない。それを知るのは己のみ。

・・・救おうが、見捨てようが、

・・・創ろうが、滅ぼそうが、

・・・それが己の答えなら。これもまた一つの選択。

何だ？

・・・神をも超えんとする力、やがては己が身を滅ぼす。

何を言っているんだ？

・・・答えは、選択肢は、無限に、永遠に続く。

何を言っていると聞いている！！

・・・己が答え、出たならば。

答えろ！！

それともお前がこれを解いてくれるのか？」

「いや、なんでもない。」

「なら、おとなしく座ってる。」

言われて、自分が立っていたことに気付き、直ぐに座る。

会長さんと教室の前で別れた後、直ぐに授業があり、その授業で眠ってしまったのだ。そんなに疲れていたわけではないのに。

「大丈夫ですか？」

「ああ、何でもない。気にするな。」

隣にいたハルに聞かれたが、ごまかしといた。無用な心配は掛けられない。

「これで授業を終了する。宿題はちゃんとやっておけよ。では、解散。」

本当になんだつたんだろう、そう考えているうちに授業が終わってしまったようだ。

「あんた、何で急に立ったりしたの？大丈夫？」

「何かあったのか？」

休み時間に入り同じ質問をされた。

二人にも心配をかけてしまったようだ。

「何でもないんだ。本当に。心配かけてすまなかつたな。」

「ならいいんだけど・・・」

「そう言うならこれ以上聞かないが、何かあったら相談してくれよ。」

俺にできる範囲で力になってやるから。」

「・・・ありがとな、二人とも。」

「なぐにしんみりした雰囲気出してんだよ。お前らしくも無い。」

「そうだな。」

元の世界では少なかった友人に近いものを感じて、とても嬉しかった。

もちろん、そんなことを顔には出さないが。

「それよりも、もう帰ろうぜ。」

言われて辺りを見渡すと、帰り支度をしている生徒の姿が多く見られた。

どうやら休み時間だと思っていたが、すでに今日の授業は終わっていたらしい。

「俺とハルは寮だけとお前らは？」

「私は寮よ。」

「俺も寮だ。」

なんとこのメンバーは全員、寮だったらしい。

「それよりも、何でコウジはハルの事そんなに詳しいのかな？」

「そういえばそうだな、入学式の時から一緒に仲良かったしな。」

ニヤニヤした顔で聞いてくるナナとラウ。

「「え、え〜と、そ、それはだ〜(ですな〜)・・・」」

「「ニヤニヤ。」」

答えに詰まる俺たちにニヤニヤしながら見てくるナナとラウ。

（どうする？ここで言っちゃってもいいのか？）

（多分、大丈夫なんでしょうけど、少し面倒になるかもしれません。）

（なら、一か八かで言ってみるか。

俺が”勇者”であり異世界から来たということ。）

（私が王家であることも言わなくてはなりませんね。）

（これからは二人とは長い付き合いになりそうだからなるべく隠し事はしたくないからな。）

隅に身を寄せてコシヨコシヨと話す俺たち。傍から見れば不審な行為だが、

とりあえず答えが出たので話すことにした。

「これから話すことは、あまり大げさな反応をしたり騒いだりしないでくれよ？」

知ってる奴は少ないんでな。」

「うんうん、それで？」

「ああ、実はな・・・」

俺が異世界人であり”勇者”であること、

そしてハルが王家であることを二人に話した。

「ふん、それだけ？」

「え？それだけって、驚かないんですか？」

確かに。反応薄いと僅かながらにも決心した俺たちはどうなるよ。

「だって、そんな理由でもなければコウジの強さが説明できないし、

ハルにいたっては、テミスツって名前が入ってる時点で薄々気付いてたわ。」

「俺も同じく。コウジはともかく、ハルちゃんは気付いてたさ。」

「ラウ、お前、そこまで考えることが出来たんだな……」

「フツフツ。どんなもんだ。」

「そこは威張れるところではない気がします。」

「かわいいそうな奴ね。」

「ほめられたかどうかの区別も付かないとは。」

そんな俺たちの思いなど露知らず、馬鹿^{バカ}は喜んだ。

「よし、さつさと寮に帰ろうぜ。」

「そうするか。」

「なら、私たちも一緒に行くわ。」

「一応、寮は男女でそんなに離れていないようですよ。」

「ぐふふふ、これで夜中に……ふふふ」

「またか！くたばれ変態！！」

「ぐふあつっ！」

危ない考えをしだしていたので、何時も通り、俺とナナによるコンビネーションアタック（今回は右手を俺、左手をナナが持ち、腕を曲がらない方向に曲げながら全力で投げ飛ばした。）をかまして沈めといた。

（良い子のみんなは真似しちゃだめだぞ 大惨事になるから）

テロップが出たが警告だったから無視。

「最近はどんどんヴァイオレンスな技になってきてますね。」
「ああでもしなければ変態は直せないからな(ね)。」
「コンビネーションも上がってきている気がします。」
「そんなわけないだろう(でしょう)?」

そんな息ぴつたりな二人に苦笑するハル。

「あああああ〜!!俺の腕があ!腕が〜!!」

「もう一度逝つとく?」

「すみませんでした。もうしませんからあれだけは勘弁。」

いくら馬鹿補正がかかっているにしても腕をあんなにされたらきついらしい。

今度からは気をつけるかな、と思うコウジとナナであった。

だが、次はやる時にはすっかり忘れていたらしい。(ラウ体験談)

「それよりも早く寮に行きましょう。」

「パンフレットによるとこっちな。」

ラウを葬って遊ぶのを一先ずやめて、寮まで行くことにした。

「ラウが変なことしそうなになったら止めてよね。」

「ああ、もちろんだ。友人が犯罪者になるのは心苦しい。」

「なりかけてますけどね。」

「そこを否定できない俺、悲しい。」

何か悲しんでいるラウを連れて校舎から歩くこと数分。

無駄にでかい、10階建てくらいのアパートみたいなのが2つ見え
てきた。

「こんなものまででかいんだな。」

「そうね。無駄に馬鹿でかいわね。」

「どっかの誰かさんみたいですよ。（ただの馬鹿の）」

ボソツとハルが呟いた。

最後に明らかにアパートに対する評価ではないのが聞こえてラウが悶えていた。

「お、俺ってハルちゃんにそんな風に思われていたのか・・・」

がくつとひざを突き、燃え尽きたような顔をするラウを見て流石にかわいそうに思ってたかハルが言葉をかける。

「す、すみません。つい本音が出ちゃいました。これからは気をつけます。」

「ぐはっ。」

「え、え、私また何か言いましたか？」

更にダメージを受けるラウを見て小首をかしげるハル。ストレートな言葉ほど人の心得を決るものは無い。

「ハル、お前が俺らよりも確実にラウにダメージを与えているよ。」
「そ、そうですかねえ？」

言われて更に首をかしげるハル。

どうやらハルは少し天然が入っているようだ。間違った方で（？）。

「それよりも早く寮の中に入らない？早くお風呂に入りたいし。」

「なら、さつさと行くか。パンフレットによればあの

小屋っぽい所に行って部屋の鍵をもらわなきゃならんらしい。」

「よし、早速そこに行くか。」

「お前、心身ともに復活が早いな。」

すでに復活したラウに突っ込みを入れる。

「当然だ。俺（天才）だもの。」

「そうだよな、ラウ（馬鹿）だからな。」

「・・・何か読み方違くないか？」

「気のせいだ。」

「なら、いいけど。それよりも早く行こうぜ。腹減った。」

これ以上ここでぐだぐだやっていてもしょうがないので早く行くことにした。小屋の前まで来ると意外とぼろいのが分かった。

「こんちわゝ、誰かいますか？」

中に入ってからラウが代表して尋ねる。

「・・・はいよ。」

いきなり隣から声がして暗い雰囲気のおばあさんが出てきた。

「うわっ。」

驚いたのはラウだけのようだ。

「こここの管理人か？」

ラウに任せていても進まないのが俺が聞いた。

「……そうだけど。」

「寮の部屋の鍵を借りにきました。」

「……名前。」

「コウジ キサラギだ。」

「ラウ・ロード・リベオンだ。」

「ナナ・エリス・エンプティーです。」

「ハルピユア・テミストス・ガーラントです。」

「……んっ。」

全員の名前を聞いた後、なにやら帳簿のようなものを取り出し、確認した後、俺らには８８号室の鍵を、ナナとハルには７７号室の鍵を

無愛想にだが丁寧に渡してくれた。

両ペアともぞろ目だった。なんとなく嬉しい。

どうやら俺はラウと、ハルはナナと同じ部屋ということらしい。

相部屋の相手の決め方が雑すぎやしないか？

「ありがな。ばあちゃん。」

礼を言って、全員で小屋を出る。

「ここで別れるわけだが明日はどうする？一緒に行くか？」

「ええ、私は一緒にいいです。」

「私もよ。」

当然と言わんばかりの二人の反応に苦笑しつつも寮に向かう。

「あの小屋は”ギルド”からの依頼も回してくれるみたいだったな。」

「さっすがコウジ、よく見てんな。」

「まあな、今度暇な時にみんなで何か以来でも受けてみるか。」

「いいわね。」

「賛成です。」

案外みんな乗り気だったので、本当にやるかもしれない。

「じゃっ、そろそろここで。」

「ええ、おやすみなさい。」

「おやすみなさいませ。」

「おう、ラウが暴走しないようにしとく。」

「宜しく頼んだわよ（頼みましたよ）。」

「俺ってやっぱりそういう扱い!?!」

騒ぎまくるラウをよそに歩き出す俺。

今日は結構充実した日だった。あの夢のことが気になるけど。

(後で舞にでも聞いてみるかな)

そんなことを考えながらコウジは寮に入るべく歩みを進めた。

第1章・4話 夢（後書き）

次回あたりでギルドに関する事があるはずですが。

ではまた次回お会いしましょう。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

第1章・5話 ギルド（前書き）

昨日、評価をいただけました。

感謝感激です。最近アクセス数なども伸びてきているのでとても励みになります。お気に入り登録してくださった方、ポイントをいれて下さった方、ありがとうございます。

これからもがんばるのでよろしく願います。

では、どうぞ。

第1章・5話 ギルド

「おいおい、ここは何処のホテルだよ。」

「ああ、まったくだ。学生の泊まる所かね、ここは。」

そう言いたくなるのも分かって欲しい。

なんせ、見た目は普通のアパートっぽいの中には高級ホテルさながらシャンデリアやら従業員みたいな人がいたりとか、とにかく凄かった。

やっぱり、ここの創設者は馬鹿で決定らしい。

「さて、とりあえずは部屋に行ってみますか。」

「だな。それよりも俺は少し用事が・・・」

ガシィッ

鼻息荒くも、早速馬鹿が寮を出ようとしたので首をつかんだ。

「まあ、マテや。俺はお前を犯罪者、

もしくは尊い犠牲者になって欲しくはないんだ。だから、な？」

「待て待て、今はナナもないし何時ものあれは出来ないって、だから、ちよつ、まつ・・・」

「なめるなよ。」

「如月護身流体術 秘奥 幻武無双」！

二人に分身する。

「お前なあ！秘奥なんてのは軽々しく見せるもんじゃないっ！

だから早くもとに戻れ！な？な？」

突っ込みの為だけに秘奥を使って2人に分身したコウジに向かって
ラウが

逆に全力で突っ込む。

「「気にするな、見ただけでまねなんて出来やしないし、
まだまだ全力じゃないからな。それよりも、逝つとくか。」

「字が、字が違つつて、・・・おP I いえW ヴい z ガクツ・

」

「「1人でもコンビネーションアタックは出来るのだよ。ラウ君。」

」

分身した俺により高速のラッシュをくらってダウンするラウ。

そんなラウを引きずって受付っぽいところに行ってみる。

たしかパンフレットにはここで登録みたいなのをしなければなら
ない、

つて書いてあつた気がした。

「すまない。誰がいるか？888号室の鍵を預かつたんだが。」

「はい。」

元気な声とともに黒髪ポニーテールの受付嬢らしき人物が出てきた。
ここでの従業員の服装は女性がウェイトレスっぽいやつで男性は
執事服っぽいやつで固定らしい。

「では、登録用の紙を出してください。」

「えっ、登録用の紙？」

「はい。この寮を使用する上での重要なものです。」

それが無いと部屋をご利用することが出来ません。無くしちゃいま

したか？」

「いや、そんなものは最初から貰った覚えが無くてな。」

うーん、と悩む俺を見ていた受付嬢が何か思い出したのかカウンターの中から何か書類を引っ張り出してきた。

「もしかして、あなたはコウジ キサラギさんですか？」

「ああ、そうだが。それが何か？」

「ええ、国王様より連絡があり、黒目黒髪の腰に綺麗な武器を装備している

美青年がきたら伝えておいてくれ、と。その伝言とは、この寮は自由に使

ってかまわん、というものでした。国王様からの伝言ですのでやっぱり紙は

必要ありません。ですが、そちらの方には頂かないと。」

俺に引きずられているラウを見ながら言う。

「そうだな、すまないな、ちょっと待ってくれ。今起こすから。」

美青年とは言いすぎだよ王様、と思いつつもラウの腹を軽く殴り意識を浮上させた。

「うほっ、うほっ、うっ、ここ何処だ？んっ？」

寝起きのように脳みそが働かないようだったが、受付嬢を見た瞬間、急に元気になり受付嬢に詰め寄った。

「すみません。今夜俺の部屋に来ませんか」

「もう一回逝つとくか？」

「遠慮しときますっ！」

「だよな。俺も友人にあんな事するのは忍びないからな。」

「では、そちらの方も登録用の紙をお出し下さい。」

「紙？ああ。これのことか？」

そう言つて、カバンの中からそれらしき紙を取り出す。

「ええ。それです。」

受付嬢は笑顔でそれを受け取り、なにやら書類の束に色々書き込み
その中に貰った紙もつつこんだ。

「では、888号室ですね。八階にありますので、そちらに向かっ
てください。」

「げっ、八階かよ。めんどくせえ。」

「文句言つてないでさっさと行くぞ。」

「へいへい。」

「んじゃあ、ありがとな。」

「はい。行つてらっしゃいませ。」

笑顔で見送つてくれた。

「あつ、そうだ。最後に一ついいか？」

思い出したことがあつたので行くといった手前、質問をした。

「ええ。いいですよ。」

「この鍵をくれた小屋では”ギルド”の依頼もまわしてくれるのか？
そこによつた時にそれっぽいのを見たんでな。」

「はい。あの小屋でも受けることは出来ませんが、あちらは緊急の場

合か、
学園内でのトラブルが多いです。”ギルド”の一般的な依頼ならここで受

けることが出来ます。もっとも、直接こちらに届くことは少ないので実際

の依頼より日数がたっていますが。」

「ならついでに、”ギルド”について他にも知ってることを教えてくれないか。」

「おい、さっさと行くんじゃないのか？」

「少し待っていてくれ。」

「りよ〜かい。」

先に行っていたラウから、催促があったので待ってもらったことにした。

「それで、その”ギルド”のことなんですが、まずは依頼を受けるにあたって

登録証名書などが必要になります。そして登録が終了したら、最初はHランク

からスタートします。そしてH、G、F、E、D、C、B、A、S、Lの順で

ランクが上がっていきます。ランクを上げるためには、自分と同じランクの依

頼を6回、または1つ上のランクなら5回、2つ上なら4回、と受ける依頼のランク

を上げることにランクアップに必要な回数が少なくなります。また、Bランク

以上の依頼を受けた場合は、必ず1つランクが上がります。」

「ああ、大体分かったが、最後のLランクって何だ？」

「Lランクとは、レジェンドのLです。このランクになるにはLランクの依頼を受ければいいのですが、それをクリアするにはまさに伝説級の強さが必要になります。そもそも、Lランクの依頼なんて出たことがないです。神様とかならなれるんじゃないですかね？」

笑いながらそんなことを言う受付嬢だが俺にとっては冗談じゃないかも知れない。

「あははは・・・」

乾いた笑いしか返せなかった。

「そ、それよりも、今ここで登録できるか？」

「はい、出来ますよ。」

「もうすでに登録証明書と紹介状なら持ってる。」

カバンから王様に貰った手紙と証明書をだして受付嬢に渡す。

「それなら話が早いですね。でも”ギルド”について何も知らないみたい

だったのに何でこれ持ってるんですか？」

「多分、その紹介状の中身を見れば分かると思う。」

がさごそと封筒をあさっていたが手紙を引っ張り出すことに成功したようで

中身を見ていた。

だが、何故か受付嬢はそれを見ていくうちにどんどん顔色が悪くな

つていき
ついいは

「す、すいませんでした。まさか”勇者”様とは知らず。」

丁寧に腰を折ってお辞儀してきた。

「気にするな。俺は普通に接してもらった方が嬉しい。まあ、俺は仮だけだな。」

それに多分その中に、俺が”勇者”であることはあまり言いふらすな、

的なことが書いてあるんじゃないか？

王様は知っているのは少ない部下だけって言ってたし。」

言われて最後まで読み直す受付嬢。

「確かにそう書いてありました。」

王様は私が受け付けることも考えていたんですかね？」

「何でだ？」

「ほら、ここに、ひエナよ、おぬしが呼んでおろすと予想してこの手紙を書いた。」

お主はわしの数少ない信用できる知り合いじゃからの。コウジのこととを宜しく頼む」

、と書いてあります。言い遅れましたが私の名前は、エナ・ライフ・ローズって

いいいます。以後お見知りおきを。」

王様！？あなたは予知能力持つてんのか！？

・・・そっついやハルが持つてたじゃねえか。

「ああ、よろしくな。エナ。」

「はい。よろしく、ってそれよりもこの手紙によると、
実力はすでに確認済みなのでSランクから始めて欲しいって
書いてあるんですけど、どういう感じで実力を測ったんですか？」

「ああ、王国騎士団の隊長さんと戦わせられた。その時に隊長さんを
フルボッコにしてゴーレムを三枚降ろしにしてやったがな。」

「な、凄すぎですよ。王国騎士団の隊長はかなりの実力者でゴーレ
ムは

Aランクにあたる魔獣ですよ。それに、王様が認めたら問題無し
です。」

Sランクで頼むって書いてあるのに俺Aランクのやつしか倒してな
いぞ？

細かい事は気にしないが。

「ふん、そうだったのか。だから回りの兵士が騒いでたんだな。」

「反応薄いですね。」

さして興味なさげな俺の反応に呆れるエナ。

それよりも気になる事があったのでエナに聞いてみる。

「そういえばモンスターと魔獣の差は何なんだ？」

「モンスターはいわゆる野生のもので、魔獣とは人間によって召還
されたもの、

あるいは高度な知能を持つもの。例えば有名なのでドラゴンとかで
すね。」

「そうだったんだな。俺なんて、最初の登場が派手すぎてモンス
ターに

勘違いされたからな。」

「ちなみにどんな？」

「空から落つこちてきて、地面に巨大なクレーターを作った。」

「生身で、ですか？」

「ああ、生身で、だ。」

「それは勘違いされますよ。」

「そんなもんかな？」

「そんなものです。」

二人で漫才みたいな会話をしていたら、

ラウが騒いでいるのが聞こえたので切り上げて向かうことにした。

「いろいろありがとな。じゃ、また今度。」

「ええ。行ってらっしゃいませ。」

二回目の笑顔での見送りを受けて、ラウの元まで向かう。

「お待たせ。行こうか。」

「本当、待ちくたびれて、腹が減っちゃったぜ。」

とりあえず八回にある888号室を目指して歩き出した。

「はあっ、はあっ、はあっ、あ、あの階段はマジでしゃねになら

ねえ。「」

そう。ここ八階にある888号室に来るまでの間、ナナの言っていた様に
とんでもなく迷惑なトラップがたくさん仕掛けられていたのだ。

到着しそうな所で階段の段差が消えて油が流れてきてスタート地点
までで戻される、
とか、下級のモンスターっぽいやつらが襲ってきたりとかとにかく
普通では考えられ
れないようなトラップがあった。本気でこの寮を消し飛ばそうかと
考えたほどだ。

部屋について早々、意外と綺麗で学生が住むには豪華過ぎる部屋の中
中で一つだけ
無駄に目立つ何かよく分からん張り紙を発見したから読んでみたら
そこには、

「やあ、到着おめでとう。あのトラップはもう動作しないよ。魔法
によって
1人につき一回しか発動しないようになってるから。
でも巻き込まれはするからね。それじゃっ、楽しい学園生活を。」

Y校長「

b

そんな張り紙があったのだ。絶対に校長潰す。

と思いつながら校長の代わりに紙を潰し、ゴミ箱にポイッ、しといた。

「コウジ、早く飯食いに行こうぜ。腹減った。」

「ああ、俺もそう思っていたところだ。」

よっこらせつと、年寄りみたいに立ち上がり、部屋から出た。階段を下りている途中ガゴン、と嫌な音がして二人して振り向くと俺らがされたときのように、階段の段差がなくなり滑り落ちてくる人と

油があつた。俺は跳んで逃げようとしたがラウに服をつかまれ道ずれにされた。

「いつも俺1人では行かないぜ。」

無駄に爽やかに言うラウ。そんなラウを見て本当に勘弁して欲しいと思つた。

そして、校長絶対に潰す、と固く固く誓つたのだつた。

第1章・5話 ギルド（後書き）

今回は少し無理やりかな〜、と思ったんですが
ギルドの解説がはさめたので良かったです。

ではまた次回お会いしましょう。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIB>です。ご協力お願いします。

第1章・6話 生徒会長の過去（前書き）

すみません、今回は短いです。

第1章・6話 生徒会長の過去

2回目のトラップを食らった俺たちはその後、これ以上面倒なことになる前に、そそくさと寮を離れ、寮から少し離れた所にある昼間も寄った生徒用食堂に向かった。

「よう、お前らも食堂か？」

ナナとハルのコンビを見つけたので声をかけといた。

「はい。まだ自炊する材料もありませんから。」

「あの、校長絶対潰す！」

どうやら、俺たちと同じ目にあっただらしい。

ナナが俺とおんなじ決意をしていたが、ハルはその隣で俺やナナとは比べ物にならないくらいの殺気を静かな笑顔で出していた。

177

「とりあえず、飯を食おうぜ。」

空気の読めない馬鹿^{ラウ}が催促しなかったらどうなっていたことやら考えるだけで恐ろしい。今回だけはラウに感謝だ。

「何食うかな？」

「あら、あなた達、またここで食べるの？」

俺がメニューを眺めながら、ここの食堂届けてくれるのはいいんだけど片付け

はセルフサービスなんだよな、とか考えている時に偶然近くを通

うん、きつとそうだ。てか、そう信じたい。

「み、見なかったことにしよう。うん。絶対それがいい。」

「ね、あれだけ校長を呪ってれば何があったかは想像できるでしょう。」

私が入学した時も同じようなことになってる子がいたもの。」

会長の入学した時にも同じような人がいたとはな。

恐るべし校長。それだけのろわれていながらもなお、生きながらえるとは。

もしかして校長って強かったりするのだろうか？

「ところで会長さん、あなた、

生徒会長の仕事と魔法研究部の部長を兼任してて大丈夫なのか？」

「心配してくれるのね、うれしいわ。」

「おいおい、俺は結構まじめに聞いてんだがな。」

「ええ、大丈夫よ。去年からやってるし。」

それに魔法研究部の方は、殆ど趣味でやってるし。」

「そうか？俺には部活紹介のときに言ってた、

諸事情でってところが気になったんだけどな。」

そう言っって意味深な視線を会長さんに送る。

「あなたには隠せないわね。」

「いいからさっさと話してくれ。言い辛いならかまわんがな。」

やれやれ、という調子で会長さんが話し始める。

「昔ね、私が生徒会長になる前、とっても仲の良い先輩たちがいたの。」

自分で言うのもちょっとあれだけど、私、完璧すぎるって言われてね。

同学年の友達と呼べる存在が殆どいなかったの。」

自嘲気味に笑う会長さんには少しばかりの哀愁が漂っていた。

「でもね、そんな私にも、優しく声をかけてくれた先輩たちがいたわ。

その先輩たち誘われて私は魔法研究部に入ったの。

そこでの毎日は楽しかったわ。」

どこか遠い目をする会長さん。

「毎日毎日、欠かさずに通っていたの。でも・・・」

声のトーンを少しさげて言う。

「でも、先輩たちの卒業式が近づいた頃にね、テロ組織による襲撃が各地で起こっていたの。そして、ついに起きてしまったの。」

何が、とは聞かない。まだ続けているから。

「私たちの学園で、それも魔法研究部からの侵入で。

私はそれを聞いた時、気絶するかと思ったわ。そして、

テロ組織の襲撃により、学園じゅう大パニックだったわ。

私はそんななかで必死に先輩たちの姿を探した。

でも、私が魔法研究部の部室にたどり着いた時、すでに遅かったの。

┌

苦虫を噛み潰したかのような表情で拳を握り締める会長さん。

それでもまだ続ける。

「すでに先輩たちは息を引き取っていたわ。

でも一つだけ許せないことがあったの。それはね、せめて綺麗に殺してあげて欲しかったの。でも、でもあいつらはっ！

もう死んでいる先輩たちをゴミのように扱い、

クズと言い、死体を蹴飛ばし、先輩たちを蔑んだ！

それを聞いた時私の中で何かが切れた。私が切れて、テロ組織のうちの

1人を殺そうとした時、やつらは仲間が殺されそうになったにも関わらず、

平然と言い放った。ハクズをクズといって何が悪い。あたり前だろう。〜と。」

最後はようやく聞き取れるような声で話す会長さん。

その表情からはどれほど辛かったのかが伺える。

「その頃の私はまだまだ未熟で、やつらに何も出来なかった。

それで、せめて先輩たちとの思い出の場所である魔法研究部を

残す為に、それにすぎる為に私は部長をやっているのよ。」

言い切って、疲れたようにイスに深く腰掛ける。

辺りはさつき会長さんが大きな声を出したので静まり返っている。

「情けないでしょう。」

「ああ、情けねえな。」

言われて驚く会長さん、無理もない。

普通はここで励ましの言葉をかけるべきなのだ。

だが俺はあえて逆の行動を取った。

「先輩たちにすぎる為？笑わせんな！お前がどんなつらい気持ちだったかは

分からない。分からないけど、いつまでも死んでいった先輩たちを頼り続けるな。

それだけは言える。いつまでもそんなことにすがり続け、こだわり続けている限り

お前は本当の意味で変われない。変わろうとしてないんだ！だから今も無理をし

ている。自分の気持ちを偽り、周りも欺く。そんなことをしている限り、誰も

お前に振り向いてくれない。・たまには肩の荷を降ろせ。

時には誰かに頼るのも必要なことだぞ。それからゆっくり考えてみる。

今の自分に出来ることと、するべき事。それが出来ないんなら、もう手遅れだ。」

一気にまくし立てた。

終わりは最初ほどの怒気を込めず、優しく言う

「あ、あ、うあああああ！！あ！あああ！！」

今まで我慢してきたものが溢れてきたのか声を上げて泣きじゃくる会長さん。

そんな会長さんにせめて泣かせてやるとこぐらい、と思い、泣きじゃくる会長さんを抱きとめる。

抵抗することなく俺に抱きとめられながら、

しばらくしてようやく落ち着いてきたようだ。

「あ、ありがとう、な、情けないところ見せちゃったね・・・」
まだしゃっくりがやまず、途切れ途切れにも言葉をつむぐ。

「気にするな。俺はただ単に思ったことを言ったただけだ。
困っている人がいたんだ、ほんの少し手を差し伸べる、当たり前だよ。」

「本当にありがとう。」

今まで見せていた偽りの笑顔ではなく、本物の、心からの笑顔を見てほっとする。

どうやら、己にかけた呪縛は解けたようだ。

「そろそろ、帰るね。それじゃ。」

会長さんが帰ってから少しの間、心地よい静寂が続いた。
しかしここにはその静寂を破るものがいた。

「おいおいおい、手が早いな〜コウジは。」

入学早々、生徒会長を狙うとは。」

「「なんでそうなるんだ(のよ)。いい加減空気読め、馬鹿が!」」

この空気をぶち壊す発言をしたラウに

ラッシュ〜打ち上げ〜空中コンボ〜叩きつけ〜全体重のせ膝蹴り〜
finish!!

のフルコースを俺とナナでぶちかましてやった。
その後しんみりした空気も嫌だったので、俺たち4人は生徒用食堂
を後にした。

またやつちまったな。この世界に来て二回目だ。

(やっぱり俺ってお人よしなのかな?)

そんなことを考えながら、
それなりに豪華な設備のある部屋のベッドで眠りについた。

レミネ・クレイ・ヴァイト side start

私はどうしてしまったのだろう。

何故、まだあって間もない男にあれほどの羞恥をさらしてしまった
のだろうか。

少し考えれば分かることだった。

「ああ、そうか。」

少なからず、あの男の在り方に惹かれてしまったのかも知らない。

さも当然のように、当たり前だとわんばかりに手を差し伸べ、
こんな私のことを救ってくれた彼に。

そう思いながら、久しぶりに心地よい、深い眠りについた。

レミネ・クレイ・ヴァイト side finish

第1章・6話 生徒会長の過去（後書き）

久しぶりのシリアス（？）はいかがでしたか？

近々コウジが暴れそうです。

意見、感想がありましたらお送り下さい。

遅れるかもしれませんが必ず返信させていただきます。

ではまた次回お会いしましょう。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

第1章・7話 初依頼へ（前書き）

皆さんこんばんわ。Free Flyです。

少し投稿の時間が遅れましたがお許し下さい。

ついでと言ったらおかしいですが、今日から毎日更新が出来なくなるかもしれませんが、ストックがなくなってきたのもそうですが、塾の連休が終わり、また地獄の夏期講習が始まります。いつ毎日更新が復活できるかは不明ですが出来るだけ更新するようにしますので今後ともよろしく願います。また、小説が更新できない分、活動報告を少し書き始めるかもしれないのでそちらに顔をお出したければ幸いです。

前置きが長くなりましたが、どうぞ。

第1章・7話 初依頼へ

「おい、ラウ起きろ。」

「うん、美人さんがいつぱい。ぐへへへ．．．」

「よし、朝っぱらから殺るか。」

今日は特別に3分身で私刑^{リンチ}を決行することにした。

「ラウ？覚悟しろよ？」

「ふえっ？なあに？」

「男がそんな事言っても気持ち悪いだけなんだよ！くたばれ！」

「」

「え、え、何で〜！！」

ラウが何か無駄にかわいらしく（気持ち悪く）聞き返してきやがったので

問答無用に昨日の晩飯の時にナナとやったフルコースを食らわせてやった。

「ぐふうおあつ！．．何故．．俺が．．何もしてないのに．．」

ガクツ、と燃え尽きた。

「お前の寝言が原因だよ。バカ。」

分身をとり、聞こえていないだろうが、問いに答えてやる。

ん？問い、と言えば何か忘れてるような？．．．

ま、いつか。そのうち思い出すさ。

とりあえず俺たち（片方は気絶中）は朝飯を食べるべく食堂に向かった。

今日の朝は校長の仕掛けたトラップが発動することなく、無事生徒用食堂にたどり着いた。

そこでまた昨日のようにハルたちに会った。

「おはようございます。」

「おはよう。」

今日はハルたちが先に挨拶してきてくれた。

「ああ、おはよう。」

「よし。」

俺たちもそれにあいさつを返し、食堂に向かう。

「あら、また会ったわね。おはよう。」

「「「「「おはようございます（おはよう）」」」」」

どうやら今のところ、食堂での会長さんとのエンカウント率は100%らしい。

やっぱり授業の開始と終わりは殆ど同じ時間だからかな？などと考
えながら

適当にメニューをみて料理を注文した。

例によって会長さんは俺らと一緒にである。

「昨日は本当にありがとね。コウジくん」

「何度も言わせるな。俺はただ当たり前のことをしたただけだって。」

恥ずかしいのか目もあわせずに言う鋼嗣。

そんな鋼嗣を見て何を思ったか悔しそうな顔でうらやましい、とか
ぼやくラウ。

「恥ずかしがっちゃて〜かわいいわねえ」

「別に、そんなんじゃないさ。」

鋼嗣が恥ずかしがっているのは分かっているのだから、からかい続ける
すると、しだいに鋼嗣の顔も赤くなっていき、耐え切れなくなった
のか、

下を向いて黙ってしまった。

「あらあら、からからかい過ぎたかしら。」

「こっしてると、かわいらしいですね。」

「いつもこのぐらいかわいげがあればいいのに。」

「コウジにもこんな一面があつたとはな。意外だぜ。」

「つつつ!!--」

「待て、コウジ。何故そこで俺に殴りかかる。話せば分かる・・・ぎ
やあああ」

ついに真っ赤になってしまった鋼嗣は、

とりあえずラウに八つ当たりをすることにして鬱憤を晴らすことに

したらしい。

「まだ一日しかたってないけどここでの生活はとても楽しいです。」

今度は4分身で殴られまくるラウを見ながら、ハルがポツリと呟く。

「当たったり前じゃない。今までの窮屈な生活じゃないんだから。」

「そうですね。こんな機会をくれたお父様とコウ様に感謝です。」

何となくナナのセリフに違和感を覚えつつも、話し続ける。

ひとしきりラウを殴って落ち着いてきたのか、

鋼嗣は届けられた料理を黙々と食べていた。

その後、全員が食べ終わったので、食器を片付けて生徒用食堂を後にした。

「今日の授業は実際に”ギルド”の依頼を受けるみたいよ。」

本日二回目の私刑サシにより気絶するラウを引きずりながら教室まで向かう間に今日の授業の話題になった。

「依頼ねえ、そういえばお前らはもう”ギルド”に登録をしたのか？」

「私は最初っから、持ってたしね。ちなみにBランクよ。」

なんとナナはBランクだったらしい、ここで凄いなんて言うてしま
うと

後々俺のランクがばれた時に嫌味に聞こえちまうからここでは言わ
ない。

「ふ〜ん。でハルは？」

「私は、昨日の夜にナナ様に教えていただきながら、登録しました。」

「そうか。ならいいや。こいつはどうすんだらう？ま、起きてから
聞けばいいか。」

「ですね。」

「そうですね。」

俺については聞かれなかったのでよかった。ここでSランクなんて
言ったら

また騒がれるだらうしな。

教室について早々かなり騒がしかった。

どうせ今日の授業の話題で持ちきりなのだらう。

俺たちはすでにそれについては話したのでおとなしく席に着いた。

ナナたちと俺たちでは席が離れているので途中で別れる。

「お〜し、静かにしろ〜。授業を開始するぞ。今日の授業については
すでに何人かの生徒は知っていると思うが今日は実際に”ギルド”の

依頼を受けてもらう。今日受ける依頼は初心者でもできる簡単なものだ。

といえずは4人以下のグループに分かれてから俺に報告しろ。全員の報告が済み次第、各々の依頼を開始する。

では、グループに別れてくれ。

今回は”ギルド”に登録してない奴でも受けることができるぞ。」

レイトの指示と同時にいったん静まっていたクラス中がまた騒がしくなる。

言うまでもなく俺らはいつもの4人でグループを組んでレイトに報告した。

依頼は数十種類の中からランダムに決められるらしい。

意外とこのクラスの人数は多いのでここにある依頼はかなり多い。俺らに振り分けられた依頼は以下のようなものだった。

「森に出た下級のモンスターを倒して下さい。」

報酬・・・倒したモンスターからいくらかでも剥ぎ取っていいです

注意事項・・・魔法が使えない人はやめておいた方がよさそうで

す。結構な量がありますのでお気をつけ下さい。

依頼主からのメッセージ

モンスターを討伐してくれたら家でご飯をご馳走

しま

す。お金がないのでこの程度のことしかできません

んが

受けてくだされば幸いです。」

何か凄くかわいそうな感じの依頼内容だった。

そのことをレイトに聞いてみたら、

「今回受けてもらう依頼は報酬がこんな感じのばっかりだ。今回は慣れるためにやるようなもんだ。だから、せめて貧しい人たちの役にたつてきてやれ。もしまともな報酬が欲しいなら寮の方で受けるんだな。」

こういう依頼は大抵一年の授業にまわされるか、親切な奴が受けるんだ。

よろしく頼むぞ。」

そう言われてしまった。まあ、俺たちが受けさせてもらうようなもんだから

役に立て、ということらしい。

「よし、全員グループを組み終わって、依頼を受け取ったな。

それでは、校門に待たせてある馬車に乗って行ってくれ。

もし近すぎたり、自分で移動したいっていう奴は勝手にしてくれてかまわんぞ。

ただし、どんなに遅くなっても今日の六時までだ。

連絡用の魔道具を持たせるから無くすなよ。では、解散。」

レイトの話が終わってからクラス中の生徒たちが騒ぎ出す。

「とりあえず俺たちはどうする？」

「ああ、それなら俺に任せてくれ。いい案がある。」

「ってことは、馬車には乗っていかないの？」

「そういうことになる。でもまあ安心しろや。」

多分、馬車よりもずっと安全で早く着くはずだ。」

「なら行きましようか。」

ハルに言われて、俺たち全員で校門に向かうべく歩き出す。

「で、校門にきたはいいがどうするんだ？」

「まあまあ、慌てなさんな。」

言って俺は久しぶりに「創造」の力を使い某22世紀のネコ型ロボットの

使っていた何処にでもいけるあのピンク色のドアを創りだす。

「創造」の力は想像した物を何でも創れる能力のほかにも想像した技を使うなんて

こともできたりする。ちなみに法則なんかもいじくりまわせるが念のため、

と思ひ舞に聞いてみたところやっぱり法則をいじくりまわすと俺が更に神に近づくらしい。

はあ。なんと迷惑な。

「ちょっと待て、お前そのドアをどっから出した？」

「気にするな。世の中気にしたら負けな事が多いんだよ。」

「コウ様、もしかしてまた創造の魔法なんてものを使っただんですか？」

「おお、さすがハル。少し違うがそんなもんだ。」

「「ええ〜！！創造の魔法！？あんた（お前）そんなの使えるのか（！）？」」

「ああ、待て待て。もう少し声落とせ。」

二人して騒いでいるのでとりあえず黙らせた。

これ以上まわりから注目されんのはごめんだ。

「確かにこいつは創造だが魔法じゃねえ。俺が元の世界にいた時に偶然発現しちまった特異能力だよ。だから使えてるんだ。」

「「そうだったのか（か）。」」

「だから、周りにあんまり知られたくないから黙っててくれよ。」

「「りよ〜かい。」」

とりあえずごまかしに成功。

ハルだけはなんだか腑に落ちない顔をしていたが何とか納得してくれたらしい。

「じゃあ、これから起こることで騒いだりするなよ。」

このドアを開けて中に入ってくれ。」

「はあ？馬鹿かお前。こんなドアに何があるってんだよ。」

「いいから入ってみろって。それと、お前に馬鹿とは言われたかない。」

3人とも了承して、入ってくれた。
行く場所は先生から聞いておいたので問題ない。

「うわっ、なんだこれ。」

「すごい。」

「すごいです。」

3人とも三者三様の反応を見せてくれた。

「創造に続けて机上の空論だった転移魔法まで使っちゃうなんてさすがだねえ、コウジ。」

「こいつも俺の特異能力だよ。気にするな。」

「はあ、なんかコウジなら何でも有りって感じがしてきたわ。」

「俺もだ、いちいちこいつに突っ込んでいたらきりがない気がする。」

どうやら二人とも俺的には納得いかないが納得してくれたらしい。

「それじゃあ、依頼主さんのところに行きますかね。」

「そうすつか。」

「ええ。」

「はい。そうしましょう。」

何があるかは分からないが俺がいれば大丈夫だろうと考え
どこもドアを使って出てきた、草原っぽいところから見える
依頼主さんの家らしきところへと向かった。

「これから何があるかも知らずにのんきだねえ、君は（笑）by作
者」

おいおいおい、またこれかよ、
俺は無視するって決めたんだ。もう絶対に突っ込まないぞ。

よし、行こう行こう。

第1章・7話 初依頼へ（後書き）

いかがでしたか？

次回は、ほんの少しのハプニングありの初依頼です。
お楽しみに。

ではまた次回お会いしましょう。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIB>です。ご協力お願いします。

第1章・8話 初依頼完遂？（前書き）

皆さん、お久しぶりです。

お忘れの方もいるかもしれませんが作者のFree Flyです。
更新遅れてしまつてすいません。

今回のストックを使い果たしてしまつたので次の更新は不明です。

もう一つお知らせがあります。

更新が滞っていたので、報告できませんでした。何と！

この小説のPVが30000オーバーしました！

読者の皆様、本当にありがとうございます。

何だか最近は何だか謝ったり、感謝したりしてばかりですね。

では本編をどうぞ。

第1章・8話 初依頼完遂？

「こんにちは。誰かいるか？」

草原から移動して、そこから見えた依頼主さんの家つばい所を訪ねた。

「はい、どちら様ですか？」

中から優しそうな雰囲気の女性が出てきた。

ラウがまた変な行動を起こさないか心配だったが今回は大丈夫らしい。

家の造りは簡素なもので、依頼にあつたとおりあまりお金が有り余っているわけではないらしい。

「俺たちは、依頼を受けてきた者だが。」

あんたが森のモンスター討伐の依頼主であつてるか？」

「はい、そうです。依頼を受けてくださっただけですね！」

ありがとうございます。まともに払える報酬がないもので、受けてくださるか心配だったんですが、ずいぶんお若いんですね。」

とても嬉しそうにする依頼主さん。

「受けたといつても学園の授業で、だけどな。

でもまあ安心してくれや。それでも依頼はきつちりこなすさ。」

「はい、早速ですが家の裏にある森からモンスターが出没していて困っていたんです。」

そのモンスターとはポルターソウルと呼ばれる下級のモンスターです。物体にとりつ憑いてそれを操作して襲ってくるのですが実態はあり、攻撃は当たります。

今回は何処にあったかは分かりませんが鎧にとり憑いているみたいです。

かなりの数がいまますのでお気をつけて。」

親切にモンスターの解説までしてくれた依頼主さんに御礼を言つてそのポルターソウルなるモンスターを討伐しに行くために家を出る。

それにしても依頼主さんの説明がゲームの解説に似ていたのは気にしない。

家を出て裏にまわつてみると結構深い森があつた。

「うへえ、かなりでかい森だな。何か薄気味わりいや。」

「そうね、なんかでそうだわ。」

「あ、あんまり入りたくない感じですよ。」

この世界でも幽霊みたいな概念があるんだなあ、と思いつつも森に入って辺りを探索する。

そういえばこの世界には実態を持たない幽霊みたいなモンスターもいるらしく、

さっきの依頼主さんが言っていたのは今回ののは大丈夫ということらしい。

「あつ、ねえみんな。あれ見て。」

森に入ってから20分程たった頃ナナが何か見つけたようでみんなに呼びかける。
言われてナナが指差した方を見ると中世ヨーロッパ風の鎧が列を作っていた。

その姿はさながらハロウィンでの仮装パーティーを思わせる。

しかしその数はとんでもなくここから見えるだけで軽く100体前後いた。

「さてと、あの数をどうすつかねえ。」

「ってか、あの戦闘狂の馬鹿教師、なぐにが初心者でもできる簡単な依頼だ。」

これじゃ明らかに難易度と報酬が釣り合わないじゃねえか。」

「まったくね。この数をどうしろってのよ。まあ私は問題ないけど。」

「文句を言う前にとりあえず何か行動を起こしましょう。」

じっとしているよりはましですから。」

「ハル、中々いいこと言うじゃねえか。」

「いええ、それ程でもお。」

鋼嗣に褒められて照れまくっているハルをとりあえずほっといてまずはこの数をどうするか考える。

俺1人ならここで無双すればいいのだが、他の三人がどうするか。

「じゃあ、ここは無難に遠距離から魔法で狩るしかないわね。」

あの数に突っ込んだらかなりまずいわよ。」

「俺だけなら簡単につぶせるんだがな。」

「ま、まあ辺りに被害が出ないくらいにして下さいね。」

「おしつ、突っ込むか。」

「なっ、あんた馬鹿？馬鹿ってのは分かってたけどここまでなんて」

半ば呆れられていたがそれでもラウにはそれなりの考えがあった。
・・・単純だが。

「俺はこれでもSクラスだぜ。まあ見てろって。」

そう言って、鎧の群れに突っ込んでいく。

「ああ、待ってって言うてるのに。」
「はあ、ったくあの馬鹿は。」

だがラウは近づくなり、全身に岩のようなものを纏い、炎の剣を作り出し、中心部で辺りの鎧たちとほぼ互角に戦いあっていた。

「俺の真価は魔力操作にあり、ってね。」

魔力総量は低いが、精密さなら負ける気がしねえぜ。」

「あいつ、意外とやるのね、馬鹿だけ。」

「ああ、あいつの評価が少しだけ上方修正されたな、馬鹿だけ。」

「はい、少しだけ見直しました、馬鹿ですけど。」

ラウが戦っているのを眺めながら馬鹿馬鹿連呼する俺たち。

「お前らも人のこと馬鹿にしてないでさっさと戦え！これでも少
きついで！」

「分かったわよ。」

永遠の静寂よ、全てを無に帰さん、
「ヴァニティ・コール」。

ナナが詠唱をしたとたん一部の鎧たちが崩れだし、動かなくなった。こいつのも軽くチートだな、でも何か詠唱が少し違うような？ そう思いながらも俺も動き出す。

「おゝい、大丈夫か？ ラウ。」

「そう見えるんなら、お前の頭はどうかしてるよっ！ さっさと手伝え！」

「ほゝい、ほいっと。」

近くにいた鎧に何度も切りつけられるがそれを無視して進む。人間にあるまじき音が体から聞こえた気がするが気にしない。

「歯ごたえがねえなあ。」

言って、周囲の鎧およそ30体ぐらいを一瞬で消し飛ばす。

「あんた強すぎでしょっ！」

跡形もなく消し飛び破滅せよっ、
「ピンポイントエクスプロージョン」！

物騒な詠唱とともに鎧たちの体の一部が次々と消し飛んでゆく。

「準備完了です。あたらないで下さいね。」

「ソーラーレイ」！

今までぶつぶつと長い呪文を詠唱していたハルが空から光の光線を降り注がせる。

「だいぶ減ったな。そろそろかたつけっか。」

森は軽く焼け野原のなつたとき。・・・ちゃんちゃん、とはいかず、
どうすつかな、これ。と悩んでいたところにハルたちから声がかかる。

「何じゃこりゃあ!」

「心配した私たちが馬鹿だったわ。」

「また、無茶しましたね。」

あの技使うの意外と楽しくてこいつらのこと忘れてた。

「これ、怒られっかな?」

「「「当然だ(です)(よ)!!」「」」

三人に揃って突っ込まれる。

「キニスナ。マズハイライヌシサンノトコヘイコウ。」

「何故、片言になるんだ?」

「マア、キニセスニイコウ。」

「絶対に後で怒られますね。」

「しゝらないつと。あんたが自分で何とかしなさいよ。」

俺の言ったようにとりあえずは依頼主さんのところに行った。

その時の依頼主さんはとても嬉しそうだった。

もちろん、報酬であるご飯をご馳走になり、ゆっくりどうぞ、と言っ
依頼主さんをふりきりいきの様にどこで〇ドアを使い学園に帰った。

「先生、依頼は完了したぞ。」

「おう、中々上出来じゃないか。」

「でも先生、あんなに凄い数がでるなんて聞いてないですよ！あれじゃあどう考えても報酬と釣り合わないじゃないですか！」

ついで早々の報告の直後にナナがさっきの事態について文句を言う。

「何があつたんだ？」

「何があつた、じゃありませんよ、まったく。」

ポルターソウルが全部で4〜500体出てきました。

死ぬかと思いましたが。でも、こいつのおかげで助かりましたけどね。」

ナナに続いてラウが答え、俺のことを小突く。

「よくやったな。まあお前なら何でもありだろうがな。」

「あの〜非常に言いにくいんですが、」

普段使わない敬語を使って、手を上げる鋼嗣。

「ん？どうした珍しく敬語なんか使って。」

しばらく言うかどうか悩んだが結局は

「えと、森、焼け野原にしちゃったてへっ。」

逝っちまった。(誤字にあらず。)

「な、な、何してんだあ〜!!お前らあ〜!!!!」

「『ごめんなさいい〜!!』」

「待てゴルアア!!!!!!」

結局怒られて鬼の形相で追いかけるレイトから逃げ惑っていたそう
な。

ちゃんちゃん。

第1章・8話 初依頼完遂？（後書き）

急いで書いたせいで少しグダグダ感がありますね。（いつもの事です
が）

今回は少し古いXのネタを使いました。分かる人はいますかね？

まあ、それはともかく、気が早いですが、読者様に感謝をこめて、
番外編をしようと思ってます。

ではまた次回お会いしましょう。

前書きor後書きにキャラクターを参戦させたいなあ。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

第1章・9話 半神（前書き）

やっと更新出来ました。

今回は魔法などについて補足的なものがあります。

タイトルは気にしないでくださいね。

ではごっげ。

第1章・9話 半神

「あなた達そろそろ武芸大会があるのは知ってる？」

「……武芸大会？」

「魔法研究部に入部したときに言ってたやつよ。」

俺たち既に恒例化している何時ものメンバー+会長さんで朝食をとっていた。

そしてその時に武芸大会が間近に迫っていることを知らされた。

「もうそんなものが始まるのか。早いもんだな。」

「そうかしら。まだ入学式から2週間しかたっていないわよ？」

「楽しい時間が過ぎるのは早いんですよっ。」

髪の毛をさっ、とはじきながらラウが言った。

みんなこいつの扱いにも慣れ始めてきたのでそれについては突っ込まない。

「そうですねえ。私もとても早く感じますよ。」

「私もかな。家にいたときほど窮屈じゃないしね。」

「家柄のせいかな？」

「ま、そんなところ。」

俺の質問を少しはぐらかすように答えたナナ。

本人も色々と事情があるようなので言及はしない。

「で、その武芸大会、別名戦祭りいくさとも言っただけ、こないだ言った通り魔法の使用も許可されているからかなり危険なの。」

入学して直ぐの時にポルターソウルを500体狩ったあなたたちならあまり心配要らないでしょうけど、私があなたたちの実力をしりたいのもあるから
今日の放課後に魔法研究部の部室で模擬戦するからそこに来てちょうだい。」

俺はそこで会長さんの発言に疑問を持ったので聞いてみることにした。

「ちょっと待ってくれ。」

確かにあの部室はかなり広いがどう考えても模擬戦ができる広さじゃないだろ?」

「それなら心配要らないわ。」

「どういふことですか?」

最近若干空気化してきているナナが聞いた。

「まあ、来てからのお楽しみよ。」

「面白いもんすかね?それ。」

「多分、ね。」

行けば分かると言つので俺たちは食堂を後にしてから教室に向かった。

「では、教科書の16ページを開いてくれ。」

教室について直ぐに授業が始まった。今は魔法の授業だ。

会長さんと朝話すのは楽しいのだが、つい時間忘れてしまい、気付いたら授業ぎりぎりになる事が多い。

そういえば会長さんはあの時の食堂での件以来、何故か俺にべつた
りで、

会長さんと会話をするたびに、ミレイ会長ファンクラブなる人たち
から

睨まれるは、狙われるは大変な目にあつた。

特にあの時の女子生徒の目はやばかつた。完全に目が逝っていた。
あれは絶対にトラウマになること間違いなしだ。

DMの人はやってみよう！

・・・俺は誰に語っているのだろうか？

「では、何か質問がある奴はいるか？あつたら何でも聞いてくれ。」

俺がそんなことを考えていたら質問をする機会が来たので今までも
つと

気になっていたことを聞いてみる。

「じゃあ、俺がしていいか。」

「おう。何でも来い。」

俺がレイトに質問した時にくクラス中の視線が集まってきた。入学当初は奇異の目で見られてきたが俺たちが事故のあった依頼をクリアして以来クラス中から尊敬や嫉妬、憧れなど様々なものが向けられるようになった。

そして時々妙に熱っぽい視線を感じる。何故か男からも。そのことに関しては気のせいだと割り切っているので気にしていない。

だってそれを気かけたら、隙をみてその視線を向けてくる奴らが変な行動に出るんだもん！

最近は慣れてきたので無視まではできるようになったが。

それはさておき俺は質問を続けた。

「魔法の詠唱についてなんだがあれは普通使う時に・・・例えばファイヤーボールを使う時は

火よ、我に宿りて、その力を示せ、
フファイヤーボール」。

だよな？」

言葉だけで魔力は使っていないので火の弾は出てこない。

「もちろんその通りだが。」

「でも最近俺はそれ以外の詠唱も聞くんだがどうしてだ？

こないだナナが使ってた奴なんてもはや詠唱とは思えなかったしハルは

くそ長い詠唱の奴を使ってた、それにラウは炎の剣や岩の鎧を作ってた。」

「では逆に俺から質問をしよう。お前は魔力をどんな感じに操っている？」

そしてそれをどのようにイメージしている？」

しばしの間考えてそれをまとめてから答えた。

「魔力に関しては何と言うか血が流れるように、息を吸うように特に気にせず

に使える。しいて言うなら”気”の流れに似ている。通じているかは分からないが。」

「まあ、大まかにはそんなところだろう。ではイメージについてはどうだ？」

「そうだな、そのまんま使おうとする魔法名にそってイメージする。」
「普通はそうだろうな。だが俺のように無詠唱で発動できる奴もいる。」

元々詠唱とは魔法を発動する時にその魔法をイメージしやすくさせるためにある。

だから、そうだな、お前がさっき言ったファイヤーボール、あれをもっと簡単に、

強力に変えることもできる。実際に使ってみるから見てろよ。」

レイトの言葉に全員が目を向ける。

「火よ、踊り狂え、フファイヤーボール。」

俺が詠唱した時よりも短い言葉でたくさんの火の弾ができた。

その数およそ10。俺が使うよりもよっぽど効果的だ。

「今のは使う者のイメージ力によるがそれによりもつと短く、複雑にすることもできる。」

「要はイメージだ。魔力が少なくてもはつきりと使うものを想像できればいるんなことが」

「できるし効率もよくなる。ラウがその見本になるだろう。魔力を物質化するのはいかな」

「りの高等技術だからな。」

「ああ、わかった。ありがとう。」

ラウって意外と凄いなだな、とか思いながらレイトに礼を言って席に座った。

「では、これで授業を終了する。」

いつの間にか授業が終わっていたので俺は早速授業で教わったことをためそうと

思い、人目のないところまで移動して”隔絶空間”を創りだしその中に入った。

ちなみにこれは”世界”を対象としているために使えないはずなのだが

つい先日にも舞から連絡があり、

《あゝ、そうそう、君は僕の使いになつたせいで寿命は更に伸びて、君の能力の制限が”神”以外は全て対象に出来るようになったよ。

あつはつは、これで君は冗談では無く半神半人だね。じゃ、僕はこれで。》

とか都合の良い事言って念話を切りやがった。
そして俺はついに半神半人になっちまったらしい。
ついでに魔力や神力が桁違いに跳ね上がり、
ほぼ神と同じことができるようになった。

そのおかげで俺は新たに「時空間操作」と「情報改変」の能力を創ることができた。

「時空間操作」は文字通り時間と空間を自在に操ることができ「情報改変」はあらゆる存在の情報を改変することができる。だがまあ例え「時空間操作」を使っても

俺は本当の神ではないので歴史に干渉したりそれを改変したりすることはできない。
できてもしせいぜい数秒後の未来予知程度だった。

「情報改変」も同じようにある程度の規制がかかっており、基本的には生命の情報を改変することはできないらしい。

ともかくそれにより俺は”隔絶空間”というこの世界から完全に隔絶された空間を創りだした。その中は時間がたたずあらゆる環境を再現することができる。

そして今俺は其中で学校の闘技場を模した場所で魔法の練習をしている。

「破滅の翼」――

自身の背中に月○蝶よろしく触れたものを崩壊させる一対の悪魔翼を展開した。
悪魔翼といっても純白に輝きながら羽を散らす姿はさながら天使にも見える。
もつともその舞散る羽が触れたものを崩壊させていなければの話だが。

「ハ永久氷河」！！」

目の前に創りだした仮想の敵を一瞬で氷塊に変える。

「よし！次！ハ裁きの雷」！！」

新たに創りだした敵に無数の極太の雷を落とす。
雷の落ちたところは巨大なクレーターになっていた。

「次！ハ灼熱の炎」！！」

今度は敵を消し炭に変える。

「まだまだあ！ハグランドクロス」！！」

唱えた瞬間目を閉じていても伝わる光が収束した後、

ガガガアアアアアアン！！！！！！！！

爆音とともに擬似闘技場を消し飛ばした。

え？俺？俺は月○蝶・・・じゃなくて破滅の翼を展開してたから無傷。

『やあ、コウ。随分活用してるじゃないか。』
「何でお前がここにいるんだ？」

いきなり後から聞きなれた声に話しかけられたので呆れた声で返答する。

『本来”神”は”せ世界”に干渉しちゃいけないんだけどねえ、君のここはそういうの全く関係ないでしょ？だからさ。』
「なるほど。で？」

『ん。まあちよつとしたことさ。僕、明日ぐらいからそこに転入するから。』

「ふ〜ん。なんだそんなことか。・・・っておいしいiiiiiiii!!!」

あまりの驚きにノリ突っ込み。
いや〜、自分でも惚れ惚れするほど鋭い突込みだぜ。

『何か問題ある？』
「有り過ぎだボケエエエ!!!!」
お前さつき神は干渉できないって自分で言ってたじゃねえか!!!」
『それは僕が”神”だったらだろう？僕が人間なみになれば問題ない。』

さらつとんでもないこと言いやがった。

「でもお前には仕事とか役目とかねえのかよ？」
『大丈夫大丈夫、優秀な部下に任せてきたから。』
「.....」
『なんだい？その目は？』

面白がっている声で舞がたずねる。

こいつ、絶対、反省していない。部下がかわいそうだ。同情するぞ、見知らぬ舞の部下さんよ。

「お前そんな適当だったっけ？」

「たまには神も息抜きしたいもんだよ。

それにこっちなら君と一緒に学園生活ができるからね。一応、あっちの世界では君と僕は高校一年生で死んだ事になってるしね。」

「やっぱりな。」

「僕自身がやったことは言え、ね。ちょっと気にしてたんだよ。」

「そうか、んでお前はどうすんだ？」

「どうするって？」

「あそこで普通の人間レベルでいたら危なくなかった事。」

「嬉しいねえ君が心配してくれるとは。」

「なんとなくそう思ったただだよ。」

少し恥ずかしかつたのでそっぽを向いたまま言ってしまった。

「じゃあコウ、改めて宜しくね。」

今まで君には秘密にしていたけど僕は最高神ジュピター。ゼウスと言った方が分かり易いかな？ ついでに言っと僕は女神だよ。」

・・・What's?

「よく聞こえなかった。もう一度頼む。もしかしたら聞き間違えた。」

「だから、僕は最高神で、ついでに女神ってこと。」

「！！！！お前、女だったのか！？それに最高神ってどんだけだよ。」

「!

ビックリし過ぎて今日は突っ込みが多いな。

『そうそう、GODじゃなくてGODESの方ね。僕は動きやすいから』

男の体を使って活動してたけど、こちらじゃ元通りだ。

それよりも僕と君の仲じゃないか、そんなの些細な事だろう。』

まあ、たしかに今更舞が最高神だと知っても対応は何も変わらない。複雑な心境ではあるが。

『転入の時には色々頼むよ。』

僕が神だというのは君が異世界人だと知っている人にだけしか教えてはいけないよ。でないと知った人間がどうなるか分からない。

『
「ああ、分かった。」』

表向きは平静を装っていたが内心ではかなり嬉しかった。

諦めかけていた親友との学園生活を楽しむことができるのだから。

『それじゃあ僕は準備があるからそろそろ行くよ。』

「おう。それじゃあな。また明日。」

『うん。ばいばい。』

舞は空に飛んで行き途中で消えた。

そしてその時に舞が

『ごめんね、コウ。巻き込んでしまった。
君はこれを知ったらきつと怒るよね。本当にごめんね。』
そう呟いていたのをしらない。

「さてさて、俺も行くとするかな。こんなとこにずっといたら時間
感覚が

狂っちまいそうだ。会長さんたちも待ってるだろうしな。」

誰に言うでもなく呟いて”隔絶空間”を出た。

そう、当然鋼嗣は自分の運命さだめを知る芳もなかった。

まだ物語（終わり）は始まったばかりだ。

さあ、楽しもう、壮絶で、悲惨で、爽快な神話おどろばなしを。

第1章・9話 半神（後書き）

コウ「更新速度が遅くなってきたな。」

作「すまん。パソコンがしばらく使えなくてな。」

舞「言い訳だね。」

作「言うな。むなしいだけだ。」

コウ「まあ、それはともかくやっと俺たちが出てこれるようになってきたな。」

作「今回は時間に余裕があったからな。」

時間が有るときにだけお前らが出てこれる。いつもとは限らん。」

舞「ここには影の薄い人たちを呼んでみようよ。」

作「もともとそんな何が目的だからな。」

コウ「んじゃ早速、じゃじゃ〜ん。王様と隊長さんです。」

王・隊長「「ここは・・・?」「」

作「こいつら扱いずらくて困ってんだよな。本当は名前さえなかったし。」

王・隊長「「何い〜!!!わし（俺）は名前すらなかったのか・・・」

コウ「今はあるからいいじゃねえか。」

作「この先登場するかは不明だけど。」

王・隊長「……………」

舞「君たちがいてもつまんない。じゃ、ばいばい」

王・隊長「わし（俺）立は何の為にここまで来たんだああ……」

作「落っこちちゃったな。」

コウ「だな。」

作「後書きにキャラが出てくるときは時は時はこんな感じにつまらないときが多いので覗いていただかなくても結構です。気が向いたときだけ御覧下さい。」

コウ・舞「それではまた次回お会いしましょう。」

作「…………セリフ盗られた。」

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

世界観や学園などについて

今更ですが世界観についてです。

まず、鋼嗣たちがいる世界は無数の大陸と島国で成り立っており、魔法が一般的に使えます。そして年の数え方や時間などこの世界にないもの以外はほぼ全てが同じです。また、概念もほぼ同じです。魔法を習うには基本的には鋼嗣たちのように学園に入学するか、優秀な魔法士を師匠にするかです。ちなみに学園は基本的には15〜16才までを一年生としてとります。稀に優秀すぎる人材はどんなに幼くても入学の許可を出します。

学園は6年生まであります。生徒会の仕組みが少し特殊で、生徒会などの役員は4年生までしか行えず特別な事情がない限り5年生になった時点で生徒会が新しくなります。と言っても会長ぐらいですが。

そして寮制と自宅通学制の二つがあり鋼嗣たちは全員寮に住んでいます。

学園の総生徒数はおよそ5000〜6000なので膨大な敷地面積と数々の施設や寮があります。ギルドの出張窓口のようなものもありそこで依頼を受ける事も可能です。ただしここに来る依頼は実際に発注されてから少し経っており行ってみたら既にその依頼は終わっていた、なんてこともたまにあります。また、緊急の依頼や学園内でのトラブル、ほぼ無報酬の依頼などがまわってくる事もあります。

あと、鋼嗣の場合は「翻訳」のお陰で外国語や横文字も通じます。

魔法についてはその大体が本編で出てきているので詳しくは書きません。

それと、少し前に言っていた番外編ですがあれはもう少し後になり
そうです。

何か分からない事があつたらなんでも聞いてください。作者の稚拙
な文では伝えきれていないと思うのでこのような説明が多く入って
しまいます。

こんな作者でも宜しければこれからもご愛読願います。

ありがとうございました。

世界観や学園などについて（後書き）

コウ「至極まじめな文だな。」

作「自分でもびっくりだ。シリアスやまじめな文は苦手だからな。」

舞「それはさくしゃとしてどうかとおもっよ。」

作「精進いたしますです、はい。」

コウ「本当かよ。」

舞「こんなだめさくしゃですがよろしくおねがいます。」

コウ・舞「ではm・・」

作「ではまた次回お会いしましょう!!」

コウ「ちっ。」

舞「うばいかえされたか。」

作「私もそう簡単にとらせはせんよ。」

コウ・舞「では今度こそさようなら。」

作「ああ〜!!また盗られた〜!!」

追記

世界観などについては時々更新されるはずですが、
そして感想を下さったシロウ様、ありがとうございます。
なお、返事は作者が確認しだいにしているので遅れるこ
ともあるかもしれません。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

第1章・10話 模擬戦（前書き）

なんとか一週間ギリギリに投稿できました。

これからは土日どちらかまたは両方での更新になりそうです。
更新日を何回も変えてしまいすいません。

では、どうぞ。

第1章・10話 模擬戦

（放課後）

「さて、始めましょうか。」

俺たちは今、朝に会長さんに言われた通り、魔法研究部の部室であるこの部屋に来ている。

そして入ってきて直ぐにかけられた言葉がそれだ。

「んで、模擬戦を何処でやるんだ？」

「まあまあ、そう慌てずにい」

上機嫌で部屋の奥から、何やらインチキ占い師が使いそうな水晶を持って来た。

「何ですか？それ。」

みんなの疑問をナナが聞く。

「なんとこれはね、今回の模擬戦場なのだ！」

なのだ！と言われても俺たちには何か分からない。

「具体的にどうするんですか？」

「これに触ってもらえば分かるわよ。」

会長さんはハルの問いに答え、俺たちに水晶に触るように促がす。

「これでいいんすか？」

言われた通りにみんなが水晶に触る。

「ええ、それじゃいくわよ。」

会長さんが言ったとたんに世界が反転した。

いや、正確には小さくなって水晶に吸い込まれた感じだ。

しばらくすると、とても広い草原にいた。

「ここは何処だ？」

「ここは水晶の中、

と言つよりも擬似戦闘空間とでも言ったほうがいいかしら。」

「擬似戦闘空間？」

「そう、魔法によって作られた擬似的な世界よ。もともと、最初に登録されたものしか再現できず、値段も張る上に管理も難しい。ただ、

こんな時には重宝するわ。ここならいくら暴れても問題ないしね。

あと大怪我をしそうになったり、瀕死になる前にはここから強制射
出されるわ。

だから安心して戦ってね。」

どうやらここは俺の”隔絶空間”の劣化版らしい。

でもここならそれなりに暴れまわっても問題なさそうだ。
怪我の心配もないからな。

「それじゃあ、まずは変態くんからかかってきて頂戴。」

「変態君というのは気になりますが、いかせてもらいますよ。」

会長さんの言葉にいきなり戦闘が開始されるようだ。

「あまりなめないで下さいね、・・・っと。」

ラウが前回の依頼で見た岩の鎧に炎の剣を作り出し会長さんに向かっていた。

だが・・・

「魔力の物質化とは、あなた中々やるわね。でも甘いわよ!」

直後、会長さんの周りに色とりどりの球体、下位、中位の全属性が展開された。

なかなか綺麗だ。

「おいおい、コウジでもないのにこりゃ何の冗談だ?」

「それじゃ、お・や・す・み」

次の瞬間、全ての魔法がラウに殺到した。

しかし、球体が直撃する前にラウが消えた。

どうやら強制射出されたようだ。

「ずいぶんあっさりだったわね。」

「そうですね。会長があんなに強いなんて。」

「くそう、何だありゃ。絶対チートだろ。」

文句をタレながらラウが帰ってきた。

いきなり瞬間移動のように来たからびっくりした。

強制射出されてもすぐに戻ってこれるのだろうか？

「次は、ハルちゃんとナナちゃんですら同時にかかってきて。

そのほうが手間も省けるし、あなたたちにも有利よ？どうする？」

ハルとナナはお互いに見合い、頷いた。

「そんなに言われて黙ってられませんよ。」

「全力でいかせて頂きます。」

「よし、それじゃ始めましょう。」

それからの戦いは凄かった。

とにかく魔法の応酬が。謀シューティングゲームさながらの弾幕だった。

ナナとハルが次々に魔法を発動させ、それを的確に落としていく會長さん。

時にはナナが、ハルが、どちらか一方が隙のある魔法を使う時はお互いに

サポートしあって見事に戦い抜いていた。

だが、會長さんも負けていないらしく、隙を突いて、ナナを撃墜。

それからは一方的で、直ぐに決着が着いてしまった。

それよりもあの二人はいつの間にあんな息のあつた戦闘が出来るように
なったのだろうか。そんなことを考えながらも強制射出されたナナ
とハル
が帰ってきて、ついに俺の番になった。

「さて、最後にあなたを拝見しようかしら。
手加減は抜きで全力でいくわよ。」

「俺はそれなりにいくさ。ここ壊さない程度にな。」

「その言葉、後悔させてあげるわ。」

「ああ、来い！」

とりあえずは様子見に火球をいくつか飛ばす。

「ふうん。まずは様子見って事ね。でもそんなんじゃ私は倒せない
わよ？」

会長さんに着弾する前に同じ火球を出されて相殺され、辺りは爆炎
に包まれる。

「次は私の番よ。」

煙の中で声の聞こえた方とは反対の方から一筋の雷光が煌く。
かわす必要もないと思い、それを受ける。

案の定、俺に傷をつけることもなく雷光は消滅した。

このままでは煙のせいで周りがよく見えず、あらぬ方向から奇襲さ
れてしまう。

「しょうがない。」

「分解」を使いあたり一体の煙を消し飛ばす。

「魔法が直撃したのに無傷って、一体どんな体してるのよ!？」

「俺を倒すんだろ? あんなの温い温い、殺すつもりで来いよ。」

「分かったわ。飛ばしてくわよ!」

ラウの時のように下位く中位の全属性が無数に展開された。

ただ、今回はラウの時とは違いその量が桁違いだった。

空を埋め尽くさんばかりに展開された魔法弾は、

まるで流星群が留まっているかのようにだった。

「おお、おお、中々凄いな。」

「余裕かましてられるのも今の内だけよ。くらいなさい!」

会長さんの言葉とともに全ての魔法弾が俺に向かって飛んで来た。

だが俺は慌てずにゆっくりとしかし正確に魔法を発動させた。

「{破滅の翼}」

俺の背中に悪魔翼とも天使翼ともとれる巨大な翼が展開される。

そのせいで、俺の体に触れる前にとんでもない数の魔法弾が消滅していく。

「なっ!」

びっくりしてる会長さんの目の前に「加速」を使い一瞬で近づく。もっとも破滅の翼の範囲外のところ、だが。

「!!!!!!」

「これで、チェックメイトだ。」

破滅の翼から舞散る純白の羽が突如としてその向きを変えて一斉に会長さんに先端が向く。やり方は簡単。

「情報改変」を使い羽の情報を変更し小型の魔力を搭載した、意思反映能なオート魔撃砲台、・・よーするに魔力版のファンロールを創り出した。その数およそ数百〜数千、流石に会長さんも打つ手なしなのか両手を挙げて降参の意思を示した。

・・と思いきやこちらに向けていくつかの魔力弾を飛ばしてきた。

「まだ諦めた訳じゃないのよ!!」

次々と接近してくる魔力弾。

俺にとっては脅威でもなんでもないが。

「行つけえ〜!!!!!!」

「でも残念。終わりだ。」

俺にたどり着く前に破滅の翼の効果範囲内に入り消滅した。

「そんな・・、忘れてた・・。」

ガクツとうな垂れて起き上がってこない。今度こそ終わったようだ。あんだだけ連戦したんだ、多分魔力切れでも起こしたんだろう。

そう思って会長さんを連れてハルたちのところへ戻る。

でもこれじゃまるで俺が悪者みたいじゃないかな。そう考えつつもみんなに賞賛の言葉をかけられ、それに答える。

「よく先輩に勝ったな。流石コウジだぜ。」

それに前言撤回だな。明らかにお前の方がチートだ。」

「戦い方が非常識です。」

「とんでもないわね、さっきの。でも、少しだけ憧れるわ。」

三者三様の反応だった。よく聞くと賞賛と言えるかどうか微妙だがとりあえず褒め言葉として受け取っておく。

「はっはっは。それなりに苦戦はした。・・・と思う。」

「なんですか？最後のは？」

全然消耗してるようには見えないのですが。」

「まったく、無駄して死人が出なくて良かったけど。」

「まあ、この水晶の機能のおかげで死人は出したくても出せないがな。」

「いいことじゃねえか。けが人も出なかったんだし。」

ハルの突っ込みを流しつつ、ナナとラウの対応をしていた。

その時会長さんが動いた。

「おはよう会長さん。よく眠れたかい？」

こんな短時間では眠るには入らない。

そもそも眠っていたのではなく気絶していたのだが。

「ん〜〜?」

寝ぼけたような声で辺りを見渡す会長さん。
そして何か思い出したように急にハツとして俺に駆け寄ってきた。
そりゃあもう凄い勢いで。

「ちょっとコウジくん！」

何か文句言われんのかなあ、と思いつつも聞き返す。

「あなたやつぱり生徒会に入らない？いや、入りなさい！」

どうやら違ったようだ。

「いんや、遠慮しとくよ。この間も断つただろ？それにどうしたんだ急に。」

「それがねえ、困ったことに今年は5年生が抜けたせいで今の生徒会は

人数がかなり少なくてね。それで戦祭りの生徒会が担当する役員の数が

不足してるのよ。それで、ね？」

「ね？と言われてもなあ。めんどくさいしな！」

「そこをなんとか！お願い！なんなら戦祭りの期間中だけでいいから。ね？ね？」

うーん、と唸りながら考える仕草をする俺。

流石にここまで頼まれたらやってみますか。期間限定みたいだし。

「そこまで言うなら。いいぞ。あくまで期間限定だけだな。」

「ありがとう」 コウジくん

「何で気が付いたんだ？」

隠してもしょうがないことだし、いずればれるので肯定の意を示した質問を返す。

「あら、あつさり認めるのね。」

「隠してもしょうがないからな。それで？」

続きを促がす。

「そんなの簡単よ。あなたのその異常なまでの魔力と腰にさしてるその武器。

それはテミストス王国の王家に管理されていた国宝級レベルのものでしよう。

しかも初代勇者が使っていたと言われる伝説の武器。その他諸々の特徴であな

たが”勇者”だったのは分かるわよ。それに異世界人つてのもね。」

どうやら俺はこの人を侮っていたようだ。

元の世界でいうなら間違いなく天才レベルの洞察力や観察力、推察力だろう。

仲間にいればとても心強いが絶対に敵に回したくないタイプだ。

「俺が異世界人って事まで分かるなんてやっぱりやるな、会長さん。」

「私を誰だと思ってるのよ。生徒会長様よ？」

「ははっ、こりゃ参ったな。だが今のはなるべく他言無用で頼む。この事はあまり知られたくないんでな。」

「分かってるわよ。それじゃ、そろそろ寮に戻りましょうか。」

「腹も減ってきましたし。」

「私もです。」
「私も。」

みんな先ほどの戦闘で腹が減ったのか、早く戻りたがっている。俺も腹が減ってきたのでその意見に賛成し戻ることにした。

「ところで戻るにはどうすればいいんでしょうか？」

「今度は私に触ってくればいいのよ。」

「会長に触るんですか？」

「マジツすか！！」

「お前は攻撃加えて戻してもいいんだが？」

「すいませんすいませんすいませんすいません……」

「分かればいい。」

「じゃ、しつかり？まっつてね？」

会長さんの言った瞬間またあの体が反転するような、浮かぶような、奇妙な感覚とともに魔法研究部の部室まで戻ってきていた。

「はい。これで終了。もう離れていいわよ。」

ラウが不服そうな顔をしていたので、ナナと一緒に何時ものごとくコンビネーションアタックを繰り返して沈めといた。

「何かこれがないとしまらないですね。」

ハルがそう言うようにやっぱりこれは、

俺たちの日常と化してしまっているらしい。

「だな。」

「私もこれやんないと何かすつきりしなくて。」

「俺はお前たちのサンドバックじゃない!!!!!!」

「やっぱり復活が早いのねえ〜 私も混ざろうかしら?」

「いえ、お願いですからやめてください。」

「そこまで言うんだったらやめてあげるわ」

ラウ葬りを終えて会長さんに挨拶をして部屋を出ようとしたが、呼び止められた。

「ああ、ちよつと待って。」

部屋の中央にある大きめの机の引き出しを、あれでもない〜これでもない〜、と言いながらやがて、あった、という言葉とともにこちらに戻ってきた。

「はい、これ。」

渡されたのは俺の顔写真が入った、

臨時生徒会証明証と書かれたカードを渡された。

「これは?」

「見たまんま生徒会の臨時証明証よ。」

これがないと生徒会室に入れないわよ。」

「いつの間に俺の顔写真を撮ったんだ?」

「魔法でね。写真つてのは分からないけど不用意にあなたの世界の言葉を

使わない方がいいわよ?怪しまれるから。」

「ああ、気を付ける。いざとなったら何とかして誤魔化すぞ。」

「それじゃ、みんなまたね〜」

「ああ、またな。」

「また明日お会いしましょう。」

「さようなら。」

「ではまた明日。」

全員で会長さんに挨拶をして帰路に着いた。

そして寮の前でいったん別れ、食事をする為に集まり、もう一度解散した。

今日は疲れたので、パツパと風呂に入り、寝た。

疲れのせいか、直ぐに眠気が襲ってきてそこで意識が途絶えた。

第1章・10話 模擬戦（後書き）

会長「私も強いはずなのに・・・」

作「まあ、あのチート野朗と比べちゃだめだな。」

コウ「だけれが、チート野朗だ？

それにお前のせいでこんなことになったんだろっが！！」

作「では時間がないのでまた次回お会いしましょう。」

コウ「待てごるあ！！！」

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIB>です。ご協力お願いします。

第1章・11話 神転入（前書き）

最近、評価やアクセス数がうなぎのぼりで一人画面を見てニヤニヤしている作者のFree Flyです。

それよりも本編をどうぞ。

第1章・11話 神転入

「今日はお前らに良い知らせがあるぞ。なんとだな・・・」

少しためてレイトが言う。

「今日は転校生がいる！！そして喜ぶ男子ども、転校生は女子だ。」

レイトが言ったとたんクラスが騒がしくなる。

朝っぱらからざわついてたのはこれのせいだったんだな。

俺たちもいつも通りにみんなで食事を取り、教室に向かう途中で噂話を聞いた。だがまあ俺はその転校生とやらを知ってるんだがな。

「よし、入ってきていいぞ。」

ガラスとドアを開けてきたのはとても舞には見えなかった。

背と顔つきはあまり変わっていないが驚いたのは濃い目で、

少し長いセミロングの蒼い髪、それと同じく片方だけが

髪と同じく濃い蒼でもう片方が薄いスカイブルーだったことだ。

元の世界では黒髪に黒目だったので違和感がある。

そしてやはり女性らしい特徴も出ていた。何が、とは言わないが。

「キズチ・マイです。マイが名前ですのでそうお呼び下さい。

これから宜しく願いますね。」

可愛らしくぺこりとお辞儀する舞。その瞬間に騒ぐ男子ども。

男の姿の時ですらそれなりの人気があったので女になった今では余計に人気が出るのだらう。親友が男から女に代わるというのは

ずいぶん複雑な感じだ。

友達が急にニューハーフに変わった時もこんな気持ちなのだろうか。そう考えつつも思考の海に沈む前に意識をすくい上げ前に向ける。

「では席は・・・めんどくさい何処でもいいから好きなところ座れ。」

おいおい教師がいいのかそれで。

みんなが思っているであろう事を思いながらも舞の動きを追った。なんとあいつはこちらに向かって来たではないか。

嬉しいのだが明らかに面倒なことになりそうなので、なるべく俺の隣の席には来て欲しくない。

「じゃあここにしまゝす。」

奴は俺の期待を裏切り空いている方の席へ座りやがった。何だかんだいっても嬉しいんだけどな。

「やあコウ。お久しぶり。」

「ああ、一日ぶりだな。」

「そういう時は会いたかったぜの一言ぐらい言って欲しいな。せつかくの親友との再会なんだから。」

俺たちのこの会話を聞いて再びざわざわする教室。予想通りに面倒なことになった。

授業終わったら逃げるか・・・

「ではそろそろ時間なので授業を開始する。」

レイトの授業が始まった。

……終わってからの勝負だな。これは。

「ではこれで授業を終了する。復習を忘れるなよ。」

レイトが終わりを宣言したと同時に生徒たちが集まってきた。

「おいコウジ、お前あの子とどんな関係なんだ？」

「もしかして付き合ってるの？」

「かわいいね！」

「やるな〜。」

「ぼくとお付き合いしませんか？」

「実験台になってください。」

何か時々質問じゃない言葉が聞こえたがそれらを全て無視して何時ものメンバーと舞を連れて教室を脱出する。

「コウ様、この子は誰ですか？知り合いみたいですが。」

「俺も気になるな。」

「もしかしてあなたの彼女とか？でもそれはないわよねえ。」

あんたにはいろいろと事情があるし。」

ここでも質問攻めにあつたのでとりあえず抑える。

「まあ待て、舞については会長さんも含めて色々話す。」

そこから、いるか分からなかったが会長さんの居る確率が高い、魔法研究部の部室に向かう。

「ここにいと良いんだが・・・」

そう言いつつ部屋を開けて中に入る。

「あら、どうしたのこんなに朝早くから。それにその子は？」

「今話す。結構重要なことだ。」

会長さんがいたことに安堵しながらも話をすることにした。

「こいつは創薙 舞。俺の親友だ。そして・・・」

「神様です。」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

そりゃいきなり神様とか言われたらこいつ頭大丈夫か？

って目で見られるわな。

少なくとも俺だったら精神科へ行く事をおススメする。

「本当だぞ？。今は力を抑えているだけで本来の姿は最高神。ゼウスやジュピターなどと呼ばれている。」

「マジか？」

「ああ。マジだ。」

「本当の本当？」

「本当だってば。俺のことを知ってる時点で少しは怪しめ。それにさっき教室での会話で一日ぶりだなんて言ってただろうが。こいつが異常な何かでなきゃ、昨日転校生と会話できるわけないだろう。」

しかもその姿を誰も見てないんだからな。」

「信じられないなら何か証拠を見せてあげようか？」

髪をいじりながら舞が言った。

「……証拠？」

「そう。誰か1人の心を読んであげるよ。これなら信用できる？」

「ええ、大丈夫だけど誰の心を読むの？」

「一番影響が出なさそうな君にするよ。」

指差されたのは会長さん。

「え？私？」

「ちよつと失礼。」

そう言つて舞が背伸びをして会長さんの頭に触る。

そして手が淡く光り輝いた。俺が何か能力を貰う時と同じ光だ。力を抑えているといつてもこの程度はできるらしい。

「ほう……これはまた。」

「あ……う……」

「これで終了。」

作業が終わったのか今度は確認作業のためか、
会長さんにばそぼそと耳打ちしている。

「今言っただのであつてたかな？」

聞かれた会長さんは頬を真っ赤にしながら青い顔する、
という妙技をしていた。

・・・どうすれば出来るのだろうか？

「ええ、まあ。」

よっぽど思い出したくないことを言われたんだろうな、
と思いつつ舞に話しかける。

「何したんだ？」

「ちよつと心を覗かせてもらったただだよ。」

「ふ〜ん。で今で分かったと思うがこいつは本物の神だ。

俺が異世界人と知っている人にしか正体をばらしてはいけな
らしいから俺のこと同様なるべく他言無用で頼む。」

「そういうこと。改めて宜しくね。あと変に接しなくて良いから。
今の僕は一般人程度の力しか使えないからね。」

固まってしまったみんなの緊張をほぐす様に気さくに話しかける。
真っ先に硬直が解けたのはナナだった。

「私はナナ・エリス・エンプティー、宜しくね。」

「うん分かった。ナナだね。ありがとう。」

舞は嬉しそうだった。

やっぱり神というのは孤独なものなのだろうか？
そう思いつつも舞を見守る。

その後はみんなも打ち解けて自己紹介をして楽しく談笑した。

「あつ、そうだコウジくん。」

「ん？なんだ？」

「今日の昼休み頃、生徒会室に来て頂戴。お昼ご飯も兼ねて他の生徒会メンバーに紹介するわ。それと仕事の説明もね。」

「りょくかい。昼飯前に行きゃいいんだな？」

「ええ、昨日あげたカードも忘れずにね。」

生徒会室は闘技場近くの別館にあるから。」

そろそろ授業が始まってしまつので大急ぎで教室に向かう。

「舞。ありがとな。」

「どうしたんだい？急に。」

「いやあ、その、な。」

この世界でも中々楽しくやれてっからな。

それにお前もいるし。本当にありがとう。」

さらっと言ったが中々恥ずかしいセリフだ。

「礼を言うのはこちらもだよ。僕の都合に付きあってくれて。」

「お互い様だな。」

「だね。」

そう言いながらも急いで教室に向かう。

急いでいせいか舞の眩きを聞き逃してしてしまった。

舞が「本当に感謝しているよ。コウ。」と恥ずかしそうに言ったのを。

「昼休み」

「ようやく授業が終わった。」

伸びをしながら席を立つ。

「そういえばコウジは生徒会の方に招待されてたから一緒に食べれないんだっけ。」

「ああ、そんなに長引かないはずだから直ぐ戻ってくるって。」

「そういえば舞とハル以外は俺のことをコウジって呼んでるよな？それじゃ固つくるしいから好きな風に呼んでくれていいぞ？」

「じゃ、私はコウジちゃんって呼ばせてもらおうかしら。」

「何かお前がその呼び方だと何か違和感があるな。でもまあいいか。」

ナナに怒られそうだったのでその呼び方を許しといた。

この時はその呼び方に関して違和感を感じなかったが後ほど思い出す事になる。

「俺はコウジなんで・・・いや、やっぱりコウジのままでもいいや。」

その呼び方はあんまりだったので一睨みして黙らせといた。

「んじゃ、そろそろいつてくるわ。」

「行つてらっしや〜い。」

舞に声をかけられ教室を出る。

(そついや闘技場の近くつて言つてたな。)

会長さんの行つていたことを思い出しそれらしき建物を探す。生徒会の建物と思しきものは直ぐに見つかった。

軽いビルみたいなものだったからとても目立った。

それ以外の建物は見られないのでおそらくこれだろう。

「こんにちは、臨時生徒会の者だが誰かいなか〜。」

窓口があつたのでそこに尋ねた。すると奥からニュツと寮の前の小屋の管理人と同じ人が出てきて、

「・・・カード。」

と言つてきたのでとりあえず会長さんに貰つたカードを差し出す。

「・・・はいよ。」

そつ言いながら顎で扉をさす。入れということなのだろう。

さつき返してもらつたカードにはOKと大きいはんこが押されていた。

ばあちゃんに礼を言つて馬鹿でかい扉を押し開けて中に入る。

すると中からパーンという音と共にたくさんの紙が飛んで来た。
どうやらクラッカーを鳴らしたようだ。

「「「ようこそー！！生徒会へー！！」」」

会長さんと見たことない人×2がいた。

「この人たちの紹介はもう直ぐするから、とりあえず部屋に入って
」

入って直ぐのここは寮の一階よりも少し小さめだがかなりの広さを
誇り、

数々の装飾品と高そうなものが置かれていた。

ここで立ち話もなんだから、ということなのだろう。

おとなしく着いて行くことにした。

何故だろう。厄介ごとの臭いしかない。

第1章・11話 神転入（後書き）

作「今日は体育祭ですよ。体育祭。」

コウ「お前、運動得意なのか？」

作者「普通ぐらい。でもこれは予約投稿だから今ごろヒィヒィ言いながらやっていますよ。多分。」

舞「今は時間が無いので、また次回お会いしましょう。」

作・コウ「さようなら〜。」

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

キャラクター紹介 その三（前書き）

シロウ様に続いて琳様にも感想を頂けました。
ありがとうございます。

今回はこんな話ですが来週は二話とも本編です。
いつも通りネタバレ注意で、どうぞ。

キャラクター紹介 その三

ゴルド・オムスタ・ヤーカック

身長164cm、体重53kg。男。濃いグレーの髪に黒目。生徒
会副会長。

学園4年生。

しつかり者の性格で何時も廻りに振り回されている苦勞性の人。
レイトが暴走した時の後始末や校長の思いつきの計画につき合
わせられたりしている。おそらく唯一の常識人。
ただし戦闘時にたまに性格が豹変することがある。

リアナ・ノルウェス・スカラ

身長160cm、体重45kg。女。薄い黄色みがかった髪に薄い
ブルーの目。

生徒会会計。学園3年生。

ほんわかした感じのお姉さん系の人。実はゴルドに好意を寄せてい
るが

中々気付いてもらえず困っている。現在振り向いてもらおうと奮闘
中。

見た目によらず強い。

エナ・ライフ・ローズ

身長167cm、体重48kg。女。黒目黒髪のポニーテール。
ギルド出張窓口の受付嬢。

20才前後。

お客に対して元気よく営業スマイルではなく心からの笑顔を向ける為、
男子からの人気が高い。生徒用食堂では時々料理を作ったりしている。

また、魔法は使えないが戦闘能力が非常に高い為、学園内の治安維持にも貢献している。

校長（本名不明、今のところ無し）

身長170cm、体重58kg。男。ショートカットの黒髪に灰色の目。

パット見40才前後に見えるが詳しくは不明。

思いつきで面倒な行事を起こしたり、生徒に迷惑をかけたたりする
ある意味だめな人。しかし凄腕の魔撃スナイパーという噂もあり
作中最も謎だらけの人。雰囲気だけはとても優しそうな人。

キズチ マイ

身長162cm、体重44kg。女。最高神。

濃い蒼の髪に片方だけ髪と同じでもう片方がスカイブルーの瞳。

今までは最高神であることと女であることを隠してきたが学園転入前に

鋼嗣にそれを話、受け入れてもらったので本来の性別である女性の姿で

活動している。世界に干渉する為に、通常レベルの人間程度までに力を

抑えており、戦闘能力は現段階ではそれ程高くない。しかし、押さえ込

んでいる力を開放すれば同じ神であっても到底かなわないほどの凄まじ

い力を誇る。

また、この形態時のみ、言葉が普通になる。神の力を使う時、または神の時に喋る時は『念話と思うときは』になる。

そして鋼嗣に何か隠し事をしているようだがそれは……

キャラクター紹介 その三（後書き）

コウ「校長っていったい何者なんだ？」

作「今後、意外と重要な役割を持つてるかも？」

コウ「でも、これ以上はちょっとまずいので、」

舞「また次回お会いしましょう。」

作・コウ「さようなら」

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

第1章・12話 生徒会長の策略？（前書き）

タイトル通りに捉えれば何か有ります？
疑問系なのは気にせず、どうぞ。

追記

プロローグのプロローグを追加し、プロローグを大幅修正いた
しま

た。機会があれば覗いてみて下さい。

第1章・12話 生徒会長の策略？

「さて、まずは自己紹介だ。僕はゴルド・オムスタ・ヤーカック。生徒会副会長を務めている。会長と同じ4年生さ。」

クラッカーでの歓迎の後、連れてこられた部屋で自己紹介を受けた。多分この人はこの世界に来て出会った中でかなりまとまな部類の人だと思う。

「私はリアナ・ノルウェス・スカラよ。よろしく。」

3年生で、生徒会会計を務めてるわ。」

なんかマイペースなお姉さん系の人は会長と同じく関わったらたらめんどくさそうな雰囲気が出ている。

「俺はコウジ キサラギだ。宜しく頼む。」

二人とも俺の言葉使いについては特に突っ込むことはないらしい。

「って、事で自己紹介はそこまで。あなたたちは分かっているとと思うけど」

これから戦祭りでの生徒会の役目を説明するわね。」

会長さんが自己紹介を終了させ、役目についての説明に入る。

「一つ目はトラブルなどの問題解決と軽めの警備。二つ目は副審判のような役割。」

と言っても観客席から見てて何かあったら連絡する程度でいいわ。

三つ目は入賞

者への表彰を校長と一緒にすること。最後に不正や事件を発見したら私か先生に

報告すること。以上四つが生徒会のすることよ。」

「意外と大変なことは少ないんだな。」

「そんなことないぞ。コウジ君。この戦祭りには学年対抗戦、部活動対抗戦、

一般の部、制限なしチーム戦の四つがある。しかし、その内の一般の部と制限なしチーム戦のふたつが問題なんだ。」

俺の言葉をゴールドが訂正した。

「どんな風に？」

「ああ、一般の部では、毎年のようにトラブルが起こるし、制限なしチーム戦

も同じだ。その度に生徒会がかり出され、鎮圧に当たるんだ。」

「でも今年はある限り心配は要らないらなそうよ。何せ彼は私に勝つたしね。」

それを聞き驚くゴールドとリアナ。そこまで驚くことだろうか？

「それなら心配いらないわねえ。」

「そこまでか？」

「ええ。会長は一応この学園最強だしねえ。それを負かしたんだから。」

かなり凄いことなのよ？」

俺自身あまり実感がなかったのでそういわれてもよく分からない。

「まあ、それはともかく。今言った事、忘れないでね？」

「はいよ。」

会長さんに釘を刺された。どうやらこれで生徒会のことについては終わったようだ。

「ではこれから何かと長い付き合いになりそうだから頼むよ。」
「私もねえ〜。」

二人に握手を求められたので片方ずつ対応する。
ん？ちよつと待てよ。今聞き捨てならないことがあったような。

「え？今なんて？」

「だから、これから長い付き合いになるからよろしくって。」

「ちよつと待て俺は臨時生徒会役員だぞ。」

「え？僕たちは正規役員が来るって聞いたんだけど。」

「いやいや、これを見る。」

会長さんに貰った、カードを見せた。・・・が、むなしくもポトリという音と共に

「臨時生徒会」と書かれた「臨時」の部分剥がれ落ちた。

この瞬間俺は確信した。はめられた、と。

「会長さん少しお話しようか。」

逃げようとしていた会長さんの肩を掴み無理やり振り向かせる。

「え・・・、や・・・、あの・・・、その・・・きやああ！！！！」

部屋の外に連れ出して少しお話した。

「ご、ごめんらしい・・・も、もうしないから・・・」
「な、何があったかは聞かないでおくよ。」

別に変なことはしていないがな。少し反省してもらったただけだ。

「最初から話していればこんな事にならずに済んだものでも、了承しちゃったんだ。最後までやってやるさ。」
「わ、ありがとう。」

リアナは白々しいせりふと共にその手に持っていた、毒々しい色をした液体の入った小瓶を素早く隠した。そのことについてはあまり深く追求しない。知ってはならない気がしたから。

「え」と、そう言えば俺はまだ飯食っていないんだが。どうすれば？」

会長さんは使い物にならなくなっているし、リアナは怪しいので、一番まともそうなゴルドに話を振った。

「それはすまなかつたね。生徒会専用の食堂があるから、そこで食べるといい。僕たちは君が来る前に食べてしまったからね。本当は一緒に食べる予定だったんだけどすまない。」
「気にするな。食ったらすぐ帰るさ。」

言われたとおり生徒会専用食堂に行きその以外と質素なデザインが施された食堂で一人さびしく昼食をとって生徒会塔(?)を後にした。

「それで役員というのはどうでしたか？」

「ああ、それについては大丈夫なんだがこれを見る。」

偽造されたカードを見せる。もちろん偽造の証拠とセットで。

「あっはっはっ、中々面白いことをしてくれたね。でも良かったじゃないか、コウ。」

「まったくだ。いい気味だぜ。」

「そんな事を言うものじゃありませんよ（くすくす）。でも災難でしたね（ぶっ）。」

「安受けしたあんたが（くく）悪いんじゃない？あははははは！！！」

同情してくれるどころかみんなに笑われてしまった。

薄情な奴らめ。

「それはそうとして次の授業は戦祭りについてみたいだから

コウはしっかり聞いてないといけないね。」

「げええ〜、めんどくせえ〜。」

「そう言わないでちゃんと聞いてなさいよ？」

「そうですよ。大事なことも言うかもしれないですし。」

「全員席に着け。授業を始めろぞ。」

そうこうしている内に授業が始まってしまったようだ。

「今日の授業は戦祭りについてだが、まずはそのルール説明についてだ。」

今からそれについての紙を配る。紙を見ながら話を聞いてくれ。」

レイトが言って直ぐに各机に紙が魔法で届けられる。

全員に配られたことを確認したレイトが説明を始める。

「この行事の目的は生徒同士の交友を深めたり、わたかま蟠りを無くすことにある。もちろん、実力の再確認、という意味もあるがな。それで、だ。」

このような大掛かりな行事となると参加項目によっては一般人の参加もある

ので当然何らかのトラブルが起きるわけだ。そこで、生徒会の役員と先生たち

が協力して警備に当たっているわけだがそれでも起きる時は起きるので

そのことについては注意してもらいたい。」

一息ついて再び話し始める。

「ルールについてだが、魔法はもちろん、この学園への武器の持込が許可され

ているように、この大会でも武器の使用が認められている。だが、怪我の心配

などはない。戦祭り用の幻影水晶を使う。この戦祭りで使われる水晶には特別

な細工が施されており、怪我、及び命にかかわることが起きる場合、水晶から強制射出される。また、この水晶の中は使える魔力が決められており、それを超える魔力をつかうことはできない。そして、水晶の性能ゆえに、一回におよそ40〜50程度の試合をすることができる。これのおかげで毎年、戦祭りはともスムーズに進む。」

あの水晶は幻影水晶と言うのか、などと思いつつもレイトの話に耳を傾け続ける。

「誰でもどの項目にも出場することができるのでどんどん参加して欲しい。

学年対抗戦は今年は俺と俺が選んだ選りすぐりのメンバーで組まれる。

複数人が出る試合のみ、リーダーを決めてくれ。そいつが、負けたら試合は終了。

そいつが魔力を使い切っても試合終了。リーダーに関しては真剣に決めるよ?」

それと、どの項目でも、エントリーできる人数は6人まで、出場するには最低でも4人

はエントリーしなくてはならない。チーム戦はどの学年同士でも組むことができる。

高学年と組んで上位を狙うもよし、仲間との交流を増やすもよしだ。また、

エントリーできるのは6人までだが、実際に出られるのは4人までだ。ただし、

この時は別に1人でも構わない。自分の実力に自信があるのならば、

だがな。」

レイトは最後の部分で俺を見てニヤツと笑った。

「この戦祭りで最も重要なものは限られた魔力でどう戦うかだ。

いくら魔力があっても出力が定められないならそいつは役に立たないし、

それを心配するあまり、制限された魔力を使いきれなくてももったいない。

メンバー登録の時は今言ったことを参考にして組んだ方がいい。

まあ、誰と組むかは自分の好きだがな。最後に、審判も一緒に水晶の中に入るので、

もし問題があったらその時の審判にでも報告しておいてくれ。なお、副審判として

生徒会の役員が観客席から見ているからな。不正はできないと思えよ。

俺からのルールについての説明は今した通りだ。詳細が知りたい者は配った

紙を確認しておいてくれ。戦祭りは明日だからな。それまでに準備をしておけ。

では、これで授業を終了する。」

何時ものごとく、信じられない早さで授業が終わり、周りは誰とメンバー登録

するかの話題で持ちきりだ。それよりも明日っていうのは早すぎる気がする。

だが、俺にもその話題が来るわけで・・・

「俺らは何時ものメンバーで組むのか？」

「当たり前前だろ。そもそも、俺にはお前らほど親密な奴はいない

「からな。」

「おや？君はここでもにんげん付き合いがうまくいってないのかな？」

「ほっとけ！」

そこで周りにいた、ラウ、ナナ、ハルから笑いが起こる。

「そこ、笑うところか？」

「そんなことよりも、これで組むとしたら誰がリーダーになるの？」

「そんなの決まっています。コウ様ですよ。」

「いいや。俺じゃだめだ。」

そこで舞を除くみんなから何故？とでも言いたげな視線が送られる。

「俺は魔力の制御が恐ろしく下手だ。それこそ下位魔法でもその制限された

魔力とやらを一発で使い切っちゃうだろう。自分で言うのもちよつとあれだが、

俺はおそらくこの中で一番強いと自負している。だが、その分伴うリスクが大きい。

よって、俺はラウをリーダーに推薦する。こいつは馬鹿だが俺たちの中で最も

魔力操作に長けている。他の部分は俺たちが全力で援護すればいい。

「それには僕も賛成だね。彼は馬鹿だけど。」

「コウ様がそう仰るんですたら不本意ながら賛成です。」

「言ってることは最もなのよねえ。馬鹿なのが問題だけど。」

「なあ？人のことをそう馬鹿馬鹿言わないでくれるか？」

最近、その言葉であまり傷ついていない自分が怖い。そのうち快感に変わりそうだ。」

今度はラウにみんなから冷たくい視線が向けられる。
でも、流石にかわいそうに思ったので、適当に取り繕いその場を納めた。

そして、明日は早いので何時ものようにみんなで飯を食い、さっさと寝た。

↳翌日、戦祭り当日↳

「ではみなさん、祭りを たのしもう Z E」

校長の、敬語と暑苦しさが絶妙なハーモニーをかもし出す話が終わり、

次に会長さんが観客席が更に増設され、注目を浴び易くなった闘技場のステージで挨拶をする。

「え、えっと、み、みなさん！！今日は待ちに待った戦祭り当日ですっ！！」

悔いの残らないよう全力をつくしましょう！！」

校長に習ってか手短に言葉を残しかえる会長さん。

やはり大勢の前は苦手らしい。あれでよく会長を続けられる。

色々大変そうだが頑張ろう。

鋼嗣はそう思いながら、観客席に座って、手に持ったコップの中の水を飲み干した。

第1章・12話 生徒会長の策略？（後書き）

作「登場キャラ増えすぎた。」

コウ「少し・・な。」

作「なんだよその間は！」

舞「そんなことよりやっと言葉が直ったあ。」

作「・・・それは良かったな。」

舞「ひらがな口調は大変だよ。」

作「書くときにも何となくストレス溜まるしな。

それに読者の皆さんが読みづらい。」

コウ「中途半端ですが、本日はここで終了です。」

作「最近、ここでの落ちが・・・」

舞「ある意味大変な事になっているよね。」

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIB>です。ご協力お願いします。

第1章・13話 戦祭り開始！（前書き）

明日は祝日なのでなんとなくテンションが上がって投稿します。
いつも通りに10時です。

では、どうぞ。

追記

この小説は設定などがこころ変わります。そのため、いろいろと矛盾が発生するかもしれません。ご注意下さい。

第1章・13話 戦祭り開始！

「じゃあ、作戦について説明するぞ。」

開会式の直ぐ後、呼び出された俺達は最初の試合はチーム戦だと知らされ、

大急ぎで準備し、今に至る。

まったく関係ないがこの控え室はかなり豪華な出来だった。

控え室なのに何故か台所や風呂場、トイレなどが完備されていた。設備のよさに呆れるほどだった。

「おっと、話がそれたな。」

「まだ何も言っていないぞ？」

「いや、なんでもない気にしないでくれ。それでその作戦だが、ルールブック

によれば魔力が制限されているのはチームごと、つまり、俺ら個人が持っている

るわけでも、全員共通でもないの、勝手な行動一つで負ける可能性がある。」

「そこでこの馬鹿が役に立ってわけね。」

「ああ、そして、俺と舞は今回ピンチにならない限り一切魔法を使わない。」

「何でですか？」

ハルの言うことも最もだ。だが、俺にもそれなりの考えがある。

「チーム決めのときも言ったが、俺は魔力消費が極端だ。それなら使わない方がいい。

舞の場合は今の状態なら魔法を使うよりも肉弾戦の方が楽勝らしい。

それにそうすれば
俺たちが使わない分の魔力を他の奴らが見える。そうならば戦術の幅は少しは増える。」

「分かった。そろそろ時間だから行くこつぜ。」
なるほど顔で時計を見ながら言うラウ。

当初はこの世界に時計があることにはかなり驚いた。さらにスピーカーや風呂、水道などにもだ。しかしながらこれらは魔法を応用して作られており俺の知っているものとは構造から使用方法まで違う。後から舞に聞いた話だがこれらの物は先代勇者たちが伝えてきたものであり俺の世界にあつた物の殆どがある。

また、四季の変化や月日の数え方などその全てが日本のそれと酷似している。

そして俺が舞によってこちらに飛ばされたのは3月半ばだったため、丁度、高校に入る前に俺のあちら側での人生は終焉を迎えた。そしてこの学園に入学した。

「おい、何ボーッと突っ立ってんだ。早くしろよ。」

「おう、直ぐ行く。」

ラウに催促された為、そこで思考を中断する。

「野郎ども~~~~!!!!準備は良いか~~~~!!!!」

しばらく歩き扉の前に着くと外から校長の声が聞こえる。

大変面倒なことに司会者は校長らしい。

そして、扉を開けて闘技場の中に入ると大歓声を浴びた。

闘技場の中央部分、開会式のときはステージがあった場所に碁盤の目のように

規則的にこの大会で最も重要な物となる水晶が並べられていた。

見た限り40〜50程ある。

レイトの言っていたようにこれだけあれば大会もスムーズに進む。

観客席の上には本来得点板にでも使われるであろう巨大なスペースに画質は

あまりよくないが試合を行っている所だけを分割して映すモニターのような

物が設置されていた。おそらく連絡用の魔法を応用して作ったのだろう。

「早速だが選手同士で挨拶をしてくれ！対戦相手は目の前の扉から出てきた奴らだ！」

俺たちのほかにもすでに他の扉からも選手が出てきており、後は各々の対戦相手を待つだけだ。

ギイイイ、そんな音を立てながら俺たちの前の扉が一斉に開いた。

「やあ、君はあの時の。今日はそれのお礼をしてあげるよ。」

俺たちの対戦相手は入学式の時にフルボッコした名も無き貴族Aだった。

「おや？そこにいるのはマイハニーじゃないか。」

その気持ち悪い単語を向けられたのは・・・ナナだった。

「そんな風に呼ばないでくれるかしら。」

私はお父様にあなたのことは断っておいて欲しいと言っただけ
だけだ。」「

「愛があれば関係ないのさ。さあ、僕の元においで。」

両手を広げていつでもバツチ来いみたいな表情で固まっている名も
無き貴族A。

しかしその両手は依然として寒いままだ。

「・・・まあいいさ。この試合で勝って君に僕を認めさせてあげ
るよ。」

ちよっと悲しかったようだが直ぐに復活して何かほざく。

「寝言は寝て言え。名も無き貴族A。俺らは負ける気なんてさらさ
らねえよ。」

「なっ・・・僕は名も無き貴族Aじゃなくt

「それじゃ早速始めるぜ～～！！全員水晶に手をつけ～～！！」

校長の叫び声によって遮られ、ものすごい勢いで俺を睨んでくる名
も無き貴族A。

それでも審判を含めた全員で水晶に触る。

魔法研究部にあったような小さいものでなく軽く1～2mはあるの
で全員が触れる。

「戦祭り！！スタ～～ト～～！！！！！！！！！！」

校長の掛け声と共にあの奇妙な感覚が訪れる。
そして気が付いたときには岩だらけの荒れた大地にいた。

「お互いに出るメンバーを決めて下さい。」

審判らしいおっさんに言われてメンバー決定をする。

「ここは無難にコウ、ナナ、ハル、ラウで良いんじゃないかな？」

「お前はどうすんだ？」

「僕は様子見といくよ。まだ、注目されたくないしね。」

舞よ、その願いはとっくの昔に散っているのだよ。お前が転入してきた時点だな。

「分かった。じゃあリーダーとして俺が報告してくるぜ。」

審判に報告が済み、お互いに戦闘態勢に入る。

相手は名も無き貴族Aとマッチョな人たちでの4人編成。俺らでも十分いける。

「両者、構え！では・・・開始！！」

審判は合図と共に遠くに跳んで離れた。その時に何かを突き抜けたみたいに

見えたから多分、特殊な結界でも張っているのだろう。

「まずは俺が行く。」

そう言ってラウが飛び出していった。

「それじゃ俺達はあいつの援護な。」
「リーダー先に出しちゃっていいの？」
「ナナ様、こつちには非常識の塊であるコウ様がいるんですよ？」
「そうね。じゃ、ピンチの時はあんたに任せたわ。」
「ええっ！俺ってある意味切り札？！」
「そんなところです。」
「期待してるわよ。」

二人に言われたがラウだけでもいける気がする。
すでにマツチヨ集団のうちの2人を倒した。

・その間にかかなりの魔力を使ったみたいだが。

「ラウ！ストップだ！このままいったら魔力切れで負ける！」
「はいよ、っと。」

敵の攻撃を避けながらラウが俺たちのいるところまで戻ってきた。
上手く障害物である岩を使いながら避けるのが重要になりそうだ。

「そろそろ俺も出る。二人はラウを守りつつ、援護を頼む。」
「分かりました。」
「がんばってね。」
「お、俺の時にはこういのがなかったのに・・・」

何か軽く絶望しているラウをほっというて敵に近づぐ。

「ふんっ！」
「はっ、こんなもんかよ！」

マッチョな人（三人目）に殴りかかられたがその程度では俺の脚は止まらない。

そのまま近づき、陽影を抜刀する。

「んじゃ、お疲れさん

「如月護身流剣術 攻式四ノ型 徹らず通り・大・羅生門」

相手に四方八方から壁が迫る。否、壁ではない。大きく上下に揺れながら

迫る高速の斬撃が壁のように見えるのだ。

これが「徹らず通り」の由来となっている。

斬撃が当たる寸前にマッチョな人（三人目）が消える。

これで残るは名も無き貴族Aのみ。

「さあ、お前で最後だぜ。どうするよ。」

「ふふふ、あの筋肉馬鹿どもも少しは足止めに使えたな。」

「？」

「あの時は効かなかったがこれはどうだ？」

我が前に立ちはだかる敵の全てを無効化せよ 「ハイ・クリアー

ウォール」！

奴がそう唱えた時、俺たち全員が半透明の結界に閉じ込められた。

「まずいです！このままでは魔力切れで負けてしまいます！」

「何でだ？」

「この結界の中に居るだけで魔力が吸われて行きます！しかも魔法が使えません！」

魔力感知が苦手な俺にはよく分からないが徐々に魔力が失われてき

ているらしい。

「だったらぶっ壊しゃあいいじゃねえか。」

「これをやるっていうの？一体どうやって？」

「こつやっただ！」

「創造」を使い、歪な剣を作り出す。そしてそれを結界に向かってぶん投げる。

パリーン！

結界がガラスの割れるような音と共に砕け散った。

俺が投げたあの剣は「ルールブ○イカー」、魔法に関するものの全てを破壊する。

ちよつと違うが解釈としてはそんな感じの凄い剣。

「」「」「えええええ！！！！！！！！！！」「」「」「」

また、まずいことをやっちゃったらしい。

「な、ななな何だ！今のは！」

「あのままでは負けるとこだったから、結界をぶっ壊した。」

「あのお、それって結構異常な事だったりするんですが……」

「ハル、あなた自分で言ってたじゃない。こいつは非常識の塊だつて。」

「まったく持って異論が無いな。それには。」

「……めんどくさいからさっさと終わらせるぞ？」

言って、相手に急接近する。

「加速」ではなく如月護身流体術の基本運歩法である「縮地」を使

つてだ。

基本に〔縮地〕がある時点で異常だけだな。

「へ？」

「〔如月護身流体術 内崩掌〕」

手の平に気を集めそれを相手の内部に放出。相手の気を逆流させ、内蔵に

ダメージを与える内部破壊攻撃。それにより名も無き貴族Aは強制射出させられた。

「勝者！一年生チーム！なんと3年生のチームを破ったああああ！

！！！」

「「「わあああ~~~~~！！！！！！」」」

観客席から歓声を送られる。

それに手を振りながらも他の試合の様子を見てみた。

試合がこんなに速く終わったところは俺たちのところだけらしい。

・・・手を振った時に男女問わずに黄色い歓声が起こった事については触れ無いでおこう。

「初勝利おめでと〜」

しばらくは試合が無いので控え室から出て観客席に出たところで會長さんに声をかけられた。

「はい、楽勝つす。」

「こいつがやられなきゃいいだけだから比較的楽だったな。」

「コウジちゃんが頑張ってたしね。」

「そうですね。コウ様のお陰ですね。」

「僕は見ただけだけどね。」

「それよりもナナ。」

「ん？なあに？」

「そのコウジちゃんっていう呼び方何とかならんのか？」

昔その呼び方に少しトラウマが・・・」

この話は俺の黒歴史に関わることなので思い出さないことにする。

「じゃあ、コウちゃんは？」

「どうしてもちゃんは取れないんだな・・・わかった。それでいいよ。」

「やった 私、弟たちのことをこんな風に呼んでたから最近恋しくて。」

どうやら俺を弟たちの変わりにそう呼ぶらしい。それだけでいいなら問題ないが。

「あ、そうそうコウジくん。一般の部には生徒会の役員が

チームを組んで出ることになってるから宜しくう。」

「ええ、めんどくさい。」

「そういわずに、ね？」

会長さんにそう頼まれると断りづらい。

女の子にかわいらしく頼み込まれたら断れないのは男の性さがだろうか？

「今、10時ぐらいだから、次チーム戦があるのは午後1時からだ

な。」

「でも、コウジくんはその後休憩なしに2時から一般の部よ?」

「結構大変だな。」

「まあ、がんばってね、コウ。」

そう言われ、舞にウインクされた。

一瞬ドキッとしたが今更こいつにときめくことも欲情することも無く
気を取り直し、試合の観戦に移ることにした。

「あのイケメン強いな。」

「ああ、お前といい勝負じゃね?」

「なんでもあの男の人は一般の部に単独でエントリーして連戦連勝
らしいわよ。」

「ふ〜ん、チーム戦も許可されてるのに単独で・・・」

あの男に興味がわいた。別に俺は戦闘狂では無いが一介の武道家と
しては

是非とも手合わせ願いたい。

「それより、ちょっと早いけど昼ごはんを買いに行かない?」

「それもそうだな。混む前に済ませたいな。」

ナナの提案にみんな頷き、昼飯を買いに行くことになった。

あの一般人の男のことも気になるがとりあえず今は昼飯のことに
集中することにして、観客席を立った。

第1章・13話 戦祭り開始！（後書き）

作「そう言えば最近、ハルのキャラが当初の設定より傾いている気がする。」

舞「それを言ったら他にも・・・」

作「このままではグダグダに！強制終了！」

コウ「俺の出番は？」

第1章・14話 ある種の争奪戦（前書き）

今回は変人が多いです。
では、どうぞ。

追記

そう言えば、どなたかキャラクターの絵を書いて頂けませんか？
作者が書くと大変な事になってしまいますので。特に書いて頂
きたいも のは指定しませんので、好きなものをお願いします。
もし、書いて下さる方がいましたらどんな方法でもいいのでご
連絡お願い いたします。

第1章・14話 ある種の争奪戦

どうしよう。俺、今更ながらこの世界の通貨が分からない。

「なあ、舞。この世界の通貨ってどうなってるんだ？」

他の奴らから少し離れてばれないようにしながら舞に聞く。

「そういえば君はまだこの世界で買い物とかをしていなかったのか。」

「ああ、そんな基本的なことまで学園は教えてくれないからな。」

「そういうことなら僕が教えてあげるね。」

えーっと、まずは通貨の単位だけど、これにはオーネが使われている。

それで一番価値の低いのが王国魔銅貨。一枚10円ぐらいかな。

次に価値があるのは王国魔銀貨。これは100円ぐらい。

一般的に出回っている中で一番価値があるのは王国魔金貨。一枚1000円ぐらい。

で、最後に国同士の貿易などで使われることの多い白魔王国貨。

一枚で100000円ぐらい。

一般的には滅多に出回らないからもし手に入れたら大事にね。」

舞の説明を聞いてふと思う。

「何で通貨の前に魔が付くんだ？」

「複製防止のために金貨自体に魔法で刻印が施されているんだ。」

これによって複製が作られることはほぼ無いんだよ。

あんまりないけどたまに刻印ごと真似しちゃう人もいるけどね。」

「そうか。教えてくれてありがとな。」

「別にいいよ。それよりも君はお金持ってるの?」

「……忘れてた。どうしよう。」

「君の場合は能力でも何でも使って作っちゃえばいいんじゃない?」

「おお!その手があったか!早速やってみる。」

舞に言われたとおり、「創造」を使い作るうとした。

が、俺は金の見かけを知らない。

不安になりつつもこの世界で使われている通貨、

という抽象的過ぎるイメージでやってみた。

「……………」

目の前にあるのは色鮮やかな通貨の群れだった。

俺の能力の万能性は証明されたがいい加減使い方に注意しないと危なっかしい。

とりあえず目の前の大量にある金を”隔絶空間”に押し込み、みんなを追いかける。

「さっきのお金があれば全員分奢れるかな?」

「余裕だろうね、あれだけあれば。でもあまりおおっぴらに出すとまずいから自分の分だけにしといた方がいいよ。」

「それもそうだな。」

ようやくみんなに追いついたので会話を終わらせ、合流する。

「な〜にやってたんだ?」

「特に何も。気になるものがあつたからちよっくら覗いてただけだ。」

「

「ふうん。」

何やら意味深な視線を送られるが、
こいつの期待するようなことなど起こっちゃいない。

「これなんてどうでしょう?」

そう言っただけでハルが手に取ったのはパッケージから触手のはみ出たダークマターだった。

しかもまだ動いている。傘の会社の人たちが生物兵器として開発しそうな見た目だ。

とても食えたモンじゃない。

「ハル、それはやめなさい。凄く危険な香りがするから。」

「ええ〜? そうですか? とってもおいしそうなんです。」

ハルよ、そこまで言っただけで天然でなく変態の称号を手に入れてしま
うぞ。

「残念ですねえ。」

そう言っただけでダークマターをたくさん食品が置かれている棚へと戻
した。

その瞬間、パッケージからソイツがはみ出て床に落ちた。

「「あつ。」

落ちただけならいいのだが、
ソイツは遅いながらも自走して人ごみに消えていった。

「い、今は見なかったことにしような。」
「は、はい。」

「放って置いていいのかなあー、あれ。 by 作者」

久しぶりにあのテロップが聞こえたが無視する。
いちいちあれに突っ込んでいたら何があるか分からない。

「みんな、お弁当買ったからこっちに来て。」

俺とハルが正体不明の弁当(?)と格闘している間に会長さんが弁当を買ってしまったらしく集合がかかる。

「おお、うまそうすね。」

確かに会長さんのセンスは抜群だ。
少々値段は張るものの、とてもうまそうな弁当が人数分手提げの中に納められていた。
この世界ではビニール袋が無い為かマイバックの持参を余儀なくされるようだ。

「会長さん、これの代金は？」

「いらないわよ。これ、私の奢りだから。」

「本当にいいんですか？」

バシッとラウを引っ叩きながらナナが聞く。

奢り、と言った瞬間にラウの目が輝いていたのでそのせいで殴られたのだろう。

「気にしないで。あなたたちの初勝利のお祝いって事で。」

「そこまで言うなら・・・」

「じゃ、この事についてはこれでお終い。」

初勝利でこれなら優勝とかしたらどうなるのだろうか？

と思いつつも会長さんに感謝しておく。

「これ食べたなら、すぐに試合だからがんばってね。もし余裕があったら私の試合の

観戦もよろしくね。」

「「「「はい」「」「」「」

五人で声を合わせ、会長さんに答える。

その後、観客席まで戻り、観戦しながら昼飯をみんなで食べた。時間はあっという間に過ぎ、チーム戦の第二試合開始が迫る。

「んじゃ、行って来るわ。」

「はいはい、がんばってね。」

会長さんに見送られ、観客席を離れ、闘技場の門の前まで移動する。

「第二回戦！！スタ~~~~ト~~~~！！！！！！」

校長の掛け声と共に扉が開け放たれ、対戦相手も現れる。

今回の俺たちの対戦相手は全員が普通すぎて名乗りあったのに名前すらも覚えていない。

その戦闘スタイルも全員がいきびつたり動く以外は特出した点も無く、弱かった。

ラウ１人しか戦っていないのにものの１０分程度で全滅した。

「勝者！！一年生チーム！！またしても高学年を破った！！！！」

あれで高学年かよ！弱すぎだろ！実質たった４行で負けるとか無いわ。

・おっほん、ちょっとメタ入ったが気にするな。よくあるけど。

「拍子抜けする弱さだったわね。」

「だな。あんだけ弱いと逆にかわいそうになってくる。」

ナナとそんな会話をしたながら観客席へと戻る。

「二連勝おめでと〜。」

「あれじゃあ、な。」

「そうね、あれじゃあ、ね。」

さりげなくさっきの人たちを馬鹿にしながら会話をする。

「そんなことよりいかなくていいのか？試合。もう始まっちゃまうぞ。」

「何言ってるんだ？一般の部での俺らが参加するにはまだ４０分以上あるぞ。」

「さっきそこで校長がいったじゃねえかよ。シードで入る奴らは試合を繰り上げてやるからもう直ぐ始まるって。」

「って、俺らはシード枠だったのか？」

「ええ、言い忘れてたけど。そうじゃなきゃあなたが出られないじゃない？」

「わかった。さっさと行こうぜ。」

「もう他の生徒会は控え室にいるはずよ。」

会長さんと大急ぎで控え室へと向かう。

でもこのままでは軽く遅刻してしまう。俺1人なら楽なのだが。しようがない。

「会長さん、ちよいと失礼。」

「え？ちよっと・・・」

まあ、あれだ。俗に言うお姫様抱つことやらで会長さんを担ぎ上げ、
〔縮地〕を使って控え室まで一気にたどり着いた。

「あ、ありふぁとお。」

顔を真っ赤に蒸気させ、言語機能の壊れた口でお礼を言う。
いきなり男に抱上げられたりしたらそうなるわな。

会長さんに悪く思いつつもゴールドに作戦を聞いた。

「俺たちの中でリーダーに向いているのはおそらくリアナだから
リアナにリーダーをやってもらうことにした。そして俺達は魔力
消費を極限まで抑えたリアナの十八番である幻影魔法発動までの
時間を稼ぐ。幻影魔法さえ発動できれば俺たちの勝利は確実だ。」

リアナの幻影魔法によっぽど信頼を寄せているのかゴールドはそう言
い切った。

「別に発動前に潰しちまってもいいんだよな？」

俺の発言に驚いた顔をしたゴールドだったが直ぐに元に戻して

不敵な笑みを浮かべて言った。

「出来るなら、な。」

そんなゴールドに向かってニヤリと笑いかけてこう返してやった。

「当たり前だろ。」

と。

「それじゃあみんな締まっていこ。」

締めりの無い声でリアナが呼びかけた。

「あなたの締めが無いわよ。」

「一般の部！シード参戦で、再スタートッ！！！」

会長さんがリアナに突っ込んだところで丁度よく校長からアナウンスが入り、

試合開始が告げられる。

扉を開けたその先には、ずらりと屈強そうな人たちが並んでいた。だが、その程度で俺たちは恐れることなく、試合に突入した。

「以下音声だけでお楽しみ下さい」

「や・ら・な・い・か」

「だ〜か〜ら〜、変態は）ry

ぐちよっ！……！……！……！

「お付き合いありがとうございました」

「はあっ・・・はあっ・・・この連戦はきつい。特に精神面が・・・」

「そうね、何だったのかしらあの変態軍は。」

「気にしないことにしよう。」

「そう言えば途中でゴールドがおかしくなってたような・・・」

「コウジ君、ちょっとちよっと。」

ゴールドに手招きされて控え室の隅へ。

（10分後）

「というところでさっきのはなんでもないんだ。」

「さっきのは何でもない、さっきのは何でもない、さっきのは何でもない。」

帰ってきた鋼嗣の焦点は合っておらず、虚ろな目をして空を見なが

ら言葉を連呼していた。

「わわわ、ちょ、ちょっとゴールド！なにしたのよ！」

「少しだけOHANASHIしてきただけだ。特に何もしていない。

」

「あなたがあなるのは仕方ないとしてさっさとコウジくんを元に戻してよ！」

「ではちよつとばかり刺激を。」

また部屋の隅まで連れて行き、なにやら呟いた。

「ハッ、俺は一体何を・・・」

「少し疲れたんだろ。直ぐによくなるさ。」

生徒会役員としてなんとなく見えはいけないものを見た気がするレミネだった。

〈先ほどの変態との連戦の為、一般の部は決勝へ〉

「やっと、決勝戦ね。」

「決勝つて事は、あの馬鹿みたいに強い奴と当たるのかしら。」

会長さんとリアナが心配そうに会話をしているが、俺的には早くそいつと戦ってみたくてしょうがない。

前にも言ったが俺は決して戦闘狂ではない。一介の武道家として、だ。

あくまで、武道家として、だぞ。

「数々の名（迷？）バトルがあつたこの戦祭り一般の部もすでに決勝戦！」

最後の戦いでは一体どんな戦いを見せてくれるのだろうか……！！！！！！

「じゃ、ラストだしがんばりますかね。」

「そうね、折角だし優勝したわね。」

会長さんと話しつつも扉を潜り抜け、相手に向き合う。

「我が名はペテル・リジェリア・ベルリード・ラ・ルバアルアリア。魔王だ。」

えええ……！！！！！！！！！！

この瞬間、俺の”勇者”イベントの発生が確定した。

第1章・14話 ある種の争奪戦（後書き）

時間が無いのでいつものものは無しで、また次回お会いしましょう。

追記

今回は日曜日の10時に更新です。

土曜日は今回の分ってことで目をつぶってください。
スイマセン。

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

第1章・15話 無気力魔王と雇われ勇者（前書き）

魔王登場です。

タイトルにある無気力はもうしばらく先ですね。

そして、超展開的なものは無視してくださいね。

では、どうぞ。

うーん、でも何か違う気が・・・

追記

作者の都合ですが、今日投稿してしまいました。すいません。

少し前にも聴いたことがあるような、
校長の暑苦しいアナウンスと共に試合が開始された。

またしてもあの奇妙な感覚が訪れ擬似空間の中へと入る。

「お前は中々強いようだな。我を楽しませてくれよ。
その前に我が勝ってしまうかもしれんがな。」

俺を見ながらそんなことを言う。

ちっ、こいつも戦闘狂か！俺の周りにはこんな奴が多い気がする。

「では、両者構え！・・・始めっ！！」

審判の号令と共に魔王はゴールドへと急接近した。
そして一撃。そのたった一撃でゴールドを沈めた。

ゴールドも決して弱く無いのに。

反撃を諸共せず魔王は次の獲物に飛び掛るべく跳躍した。
それに対し会長さんが十八番である中位以下の全属性弾をそれなり
の数放つ。

「この程度では我に傷一つ付けられぬぞ？」

だが、それすらも弾きながら会長さんに一撃。

これで二人もやられてしまった。

俺は魔王の動きに魅せられてその場から動けなかった。
こんな事はこの世界に来て初めてだ。

だが、このままではリーダーがやられて敗北。
その事実が迫り、強引に体を動かす。

「俺を忘れないでくれよ！」

「っ！！！！！！」

最後と言わんばかりの勢いでリアナに迫っていた魔王を叩き落とす。
俺の一撃で沈まないことや一度も攻撃魔法を使わないことなどを見ると

どうやらこいつは魔力のほぼ全てを身体能力の強化にあてているらしい。

しかも、身体強化に関してはかなりの熟練者のようだ。
例え制限された魔力を全て身体強化にあてたとしても、
俺の一撃が防げるはずがない。

面白いねえ。ここにきてようやく俺についてこれる奴がいるなんて
な。

久しぶりの対等な戦いに燃える。

今更能力を使ってこの試合を台無しにはしない。
俺の持ちうる技術と身体能力だけを使って勝つ。

「ははははっ！！おもしろい！おもしろいぞ！！！！！」

「俺もだ！こんなに楽しいのは久しぶりだ！」

笑いながら殴りあうのは傍から見れば異常者以外の何者でもないだ

ろう。

しかしながら殴られても殴ってもお互い強制射出されていないことから

致命傷に至っていないことが分かる。

「ふんっ!!」

放たれた魔王の拳を左手で軽くいなし、
体制が崩れた相手の腹部を右拳で狙う。

簡単だがもつとも効率のいい反撃方法だ。

「ちいい!!」

反撃を食らった魔王は拳を放ったまま無理やり体を捻り、
俺の突きを回避する。そしてその捻った勢いのまま更に回転。
左足からの強烈な背面回し蹴りを繰り出す。

今度は俺が舌打ちをする番だ。

勢いのついた回し蹴りは回避することもいなすこともかなわない。

「・・・それなら!」

「縮地」を使っての高速移動で背後に回りこむ。

そしてそこから素早く二連撃を放つ。

「なっ!!!!」

一瞬だけ硬直した魔王だが、直ぐに立ち直り突きをわざと受けて後ろに

大きくバックステップ。威力を大きく削られ、これも致命傷には至らない。

「貴様との勝負は本当に面白いな。今までこれ程までに興奮したことがあつただろうか。」

「本当にな。でもそう長々と続けるわけには行かないんでねえ。」

チーム戦とほぼ同じルールのこの一般の部ではやはりリーダーが重要。

しかし相手は1人だけ。まだこちらに分がある。

リアナの使う幻影魔法は俺たちだけで勝ってきてしまったのでまだ見ていない。

準備にかなりの時間を要するらしいが発動できれば勝ち決定、だそうだ。

もしも、俺で決着を付けられない場合はこれに頼ることになる。

「.....」

魔王がいきなり黙り込んだ。そして深く深呼吸。

魔力探知が苦手な俺でも分かるような量の魔力が魔王に集中している。

どうやら相手は次で決めるようだ。

「それならこっちも行くか。」

どんなに弱くても、どんな状況でも全力の奴には同じ全力で返す。

それが俺の礼儀だ。

如月護身流体術の秘奥である「幻武無双」を使い、千人程まで分身

する。

そして秘奥に秘奥を重ねる。

「ハ如月護身流体術 秘奥 幻武無双・朧影ヱ」

千人もの分身が一つに重なる。動くたびに分身の一つ一つが遅れてついてくる。

そして影が濃くなったように見える。

「クククこれが俺の全力だぜ?」「クク」

「ほう。これは・・負けるかも知れんな。」

結果が分かっているにもかかわらず戦うのをやめようとしないう。ただ戦いを楽しむ為だ。

それがこいつの戦う理由でもあり、存在理由だ。

だから俺はくれてやる。今の俺の全力を。

「ククク覚悟しな。魔王さんよ!」「ククク」

「ク我も行くぞ!」

お互いがお互いの胸に飛び込むようにして突進する。

「クククハ如月護身流体術 禁技 神殺しヱ!!!!!!」「ククク」

単発にして威力を底上げしたハ碎九ヱを千人分の威力でねじ込む。その威力は禁技とハ神殺しヱの名の通り、俺の使う技の中でも桁外れの威力を誇る。

「はははははっ!!!!!!はははははっ!!!!!!」「ククク」

本当に楽しそうにこいつは笑う。そして俺に全力であるう渾身の
撃を放つ。

消えたのは魔王。俺の勝利だ。

「また、私の出番が無かった。」

残念そうにリアナが言うがこれでも結構ぎりぎりだった。
流石魔王を名乗るだけある。

……実際に魔王なんだろうけど。

魔王といってもあいつからは邪念のかけらも感じ取れなかった。
ただ単に強い奴と戦いたい。それしかなかった。

「勝者！！我が校の生徒会チームだあ~~~~！！！！！！！！！！」

その瞬間、歓声が爆発した。鼓膜を破らんばかりの大声援だった。
それに苦笑しつつも多くの観戦人に見送られながら水晶から出て、
自分たちの控え室に向かおうと歩き出した時だった。

「待ってくれ。」

「どうした？」

魔王が声をかけてきた。

「我と契りを結ばぬか？」

「・・・俺にそっちの気は無いんだが。」

「貴様がどのように捉えているかは知らんが我の言う契りとは契約のことだ。精霊などと結ぶようなやつだな。」

何故に精霊？つかなんでお前と契約できんの？

「魔王である我が何故契約できるか不思議なようだな。」

首を激しく縦に振る。

「魔王というのは元々悪しき存在では無く、魔力の流れそのもの。感覚的には精霊に近い。」

「？」

「つまり、巨大な魔力の流れが意思を持ち行動しているようなものだ。」

我のことは意思を持った巨大な魔力の塊と思ってくれ。そして巨大な魔力を持つが故に、生まれてきた我らの中にはその力を使い、この世界に大きく干渉しようとする。そのせいで魔王と聞くだけでその者を恐れ、殺そうとする。そして勇者などと呼ばれる人間も現れた。」

俺はその勇者とやらなんですけどね。

それよりもこいつの説明によればこの世界で言うところの魔王とは、何も世界征服やら何やらを目的としたゲームに出てくるようなラスボス

的な存在ではないらしい。

「だが、生憎と我にはそんな願望も野心も無い。唯強いものと戦いたい。」

それだけだ。今日はこの大会に参加して正解だった。貴様に出会え

たからな。」

「こちらこそ。お前にあえて嬉しいよ。今まで対等に戦える奴がいなかったからな。」

言って目を合わせ、笑う。たったそれだけだったが分かった。

「それで？我とは契約してくれるのか？」

こいつはずっと探していた。自分を認めてくれる存在を、自分に相応しい者を。

俺の答えは始めっから決まっている。

「ああ、もちろん。」

「そうか。ありがとう。」

ここで魔王は初めてやわらかい笑顔を見せた。

それだけで大抵の女子を落とせるぐらいのものを。

くそっ！イケメンなんて！イケメンなんて！！

とか1人で馬鹿なことを考えているうちに魔王が手を差し出した。

「では、改めて宜しく頼む。」

「ああ、こちらこそ。」

俺はその手をガシッと音がしそうな勢いで握り返す。

「では、契約を始めるぞ。」

手をとって立たせてやる。

「これで終わりなのか？」

「ああ、終わりだ。主殿。それと、我に用があったら呼んでくれ。直ぐに駆けつける。」

「りよゝかい。」

「あのおゝ魔王さん？」

会長さんが弱々しく話しかける。

「ん？何だ？」

「学校来ませんか？」

「はあ？」

会長さんが突拍子も無いことを言うので間抜けな声で聞き返してしまふ。

「いきなり何だ？会長さん？」

「だって彼ほどの実力者なら是非とも欲しいじゃない。」

「……それってありですかい。」

「私が許可するぞおゝゝゝ！……！……！」

叫びながら校長が降ってきた。今日って校長注意報出たっけ？

「ほらね？」

「校長が許可した時点で俺にどうこう出来る問題じゃねえよ。」

「で、魔王さんは如何する？」

しばし間を置いて魔王が答える。

「うーむ、今の世間にも多少興味があるな。主殿と同じところなら問題ない。」

「それなら、私の権限でどうとでもなる。ようこそ、」

「『『『王国立ルシフ学園へ！』『』『』』」

会長さんと校長に釣られて俺も言ってしまった。

神様の次は魔王がクラスメートに追加かよ。

何とも言えんなあー。

第1章・15話 無気力魔王と雇われ勇者（後書き）

作「おお、やはり勇者が出るからにはやはり魔王が居なくては。」

コウ「俺にとってはかなり迷惑だな。」

舞「コウって戦闘狂だったの？」

コウ「ち、違うんだ舞、俺は、俺はただ強いやつと戦うのが楽しいだけなんだ！」

舞「それを戦闘狂って言うんじゃないかな？」

作「どこと無く寒い会話はほつといて、業務連絡（？）」「

今回は、少し長めとなっております。

本来は次週投稿予定でしたが明日の10時に投稿します。

作「連絡終了！」

コウ・舞「また次回お会いしましょう。」

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIB>です。ご協力お願いします。

第1章・16話 学園襲撃（前書き）

今回はちよ〜つとだけ残酷描写有り。

そして、前回同様超展開はご都合主義のお約束。

では、どうぞ。

追記

数日前、「神様の力で異世界へ〜チートってありですか？〜」の作者である Arishia さんにクロスオーバーを依頼したところ、何と、何時になるかわかりませんが、OKが出ました。と言っても私の作品のキャラが一方的に出るだけですが。気になった方は覗いてみて下さい。

第1章・16話 学園襲撃

何故か魔王の入学が決定して終わった一般の部決勝。
誰もそのことに突っ込むことなく終わったのはある意味奇跡だ。

〈そして現在〉

「何で俺がこんな雑務をせにやなんのだ。」

今俺が持っているのは軽く見積もっても1tは超えるゴミだ。
それを平然と担いで運んでいるのだから会う人に毎回二度見される。

これを校舎の方まで運んでくれと頼まれてしまった。
先生やら生徒会役員やらとにかくいろんな人たちにお願いされて
仕方なく持ってきたがいくら俺でも疲れるものは疲れる。

「はあ。・・・重い。」

俺にこんなことをさせておいてみんなは何をしているのだろうか？

〈その頃みんなは・・・〉

何時ものメンバー（コウジを除く）と生徒会、それに新たに加わった魔王での大所帯で観戦している時だった。

「おっ？何だあの黒いマント着たやつ。」

「どれどれ？」

魔力に関しては特出したラウはいち早くその変化に気付いた。

ラウが発見したのは現在一般の部の三位決定戦で戦っているグルーブの

中で一際異彩を放っている、全身をすっぽり包んだ黒マントの人物だった。

マントのせいで性別も顔も分からない。

「みなさま！これより最高のショーをお見せしましょう！」

その黒マントの人物は性別をはっきりとさせない抑揚の無い声で、しかし会場中に響き渡る大きな声でそう言った。

「我々”ロスト”の特別ショー、得とご覧あれ！！」

その人物がそういった途端、会場中が霧に包まれた。

「何だ！？何があっただんだ！？」

先生たちと生徒が大混乱に陥った。

ざわめきは一瞬で全体に伝わり、誰も周りが見えていない。

「ぐあああああ……!!」

グシャッ!

「ヒ、ヒイイ……!! た、助けて……」

バリッ!

辺りには霧と共に肉の引き裂かれる音と血の臭いが広がった。それにより人々の混乱はピークに達する。

今まで何とか平静を装っていた一部の先生と、生徒会役員もこれにより冷静さを失う。

「何!? 何が起きているっていうの!?!」

「大丈夫だレミネ! 落ち着け!」

叫ぶレミネ。そしてなんとか必死にそれを押さえ、なだめようとするゴルド。

辺りに広がる血の臭いが更に濃くなる。

この事態は異常だ。誰もがそう思う。

しかしながら唯一まったく動じていない人物もいた。

「あらあら、皆さん静かにしないとだめですよ。」

こんな状況でも一切ペースを変えないリアナに呆れながらも、そのおかげで冷静さを取り戻すレミネとゴルド。

「まったくもう、あなたは・・・でもありがとう。」

「私は何もしてませんよ？」

「君のその何時も通りが僕たちを冷静にしてくれたんだ。」

「それにしても皆さんどうしてこんなに慌てているのかしら？」

流石にこの発言には頭を抑えなくなるレミネとゴールドであった。

だがしかし、事態が異常であることに変わりない。

バサアツ、バサアツ

何かとてつもなく巨大なものが羽ばたく音がした。

そして今まで辺りに死臭をばら撒いていた張本人が姿を現す。

「おいおい、こりゃあ一体何の冗談だ？」

近くにいたラウが呟く。

「同感ね、よりによってコウジくんがいない時に・・・」

姿を現したのは十数メートルはあるつかという巨体に、

それを支えて飛び上がるだけの凄まじい力を持つ一対の翼。

濁っているながらも、闘争本能を燃やす深紅の瞳。

そして強靱な顎と鋭い牙から成り立つ口、そこから滴る多量の鮮血。

そう、そこにはまぎれも無い”ドラゴン”がいた。

く再びコウジへく

「ん？」

闘技場から霧があふれ出ている。

それと同時に血の臭いが風に乗って運ばれてくる。

「こいつぁ、まずいかな。」

担いでいたゴミを放り投げ、闘技場に向かって全力で走る。

「間に合ってくれよ！」

「加速」に「縮地」を重ねとんでもない速度で疾駆する。

「はあっ、はあ、．．．ここ．．．やっぱり無駄に広すぎる．．．．．」

だが、泣き言を言っている暇など無い。

闘技場に近づくに連れて血の臭いが濃くなってゆく。

ついに入り口にたどり着いた時、

「お前がキサラギ コウジだな？」

「.....」

「悪いけど、こいつらは貰ってくよ。さらばだ。」

「おい、待てよ。まだ話は終わっちゃいないぜ？」

破滅の翼を魔力出力最大で発動する。

続けて地表から浮かび上がり、飛翔する。

「そいつらは俺の大切な友人だ。返してもらっぞ。」

「でもこっちにも都合があるんだよ。」

この国に報復するっていう大事な目的が。」

逃げようとするドラゴンの前に回りこむ。

それでも相手は勢いそのままに突っ込んでくる。

「しつこいな、でも・・・」

「!？」

突然奴の前に魔方阵が浮かび上がりドラゴンごとそこに飛び込んで姿を消した。

逃げられた。そう感じて怒りがこみ上げる。

「くそがああああ!!--!!」

叫んだ。

でも、ここで叫んでも何も始まらない。

破滅の翼を解除して、いったん地上に戻る。

「主殿すまない。言い訳ではないが我は魔力の塊、それ故制限された魔力空間から出てきて直ぐの今では本調子が出せなかったのだ。それにこれのせいでもある。」

なんとか普通に話せるまで回復した魔王が頭に巻きついた物を指しながら

説明を始める。それはきつく締め付けている様だった。

「それは？」

向けようの無い怒りを押さえ込みながら聞く。

「これは魔力を封じ、装着者を弱らせ続ける違法魔道具だ。」

「取れないのか？」

「一度つければこれをつけた者がはずすか装着者が死ぬまで取れない。」

魔力の塊である我に取ってこれほど厄介なものはない。」

それって、まずくないか？

「そうか、ちょっとこっち来い。」

「？」

魔王を呼びその異物を掴み「分解」を使って跡形も無く消し去る。

「こ、これは一体？」

「気にするな、それよりも」

手から塵をはたき落としながら言う。

「あいつをちよつとぶつ飛ばしてくる。」

「主殿！行くなら我も連れて行ってくれ。このままではひけぬ。」

「ああ。少しでも多いほうがいいな。」

出発前にちよつとした作業を始める。

「創造」を使い、とある武器を生み出す。

”魂心砕血刀” 我が家に代々伝わる名刀。というか妖刀。

すでに持っている陽影と同じく使用者が弱れば弱るほどその切れ味を増す。

手に現れた”魂心砕血刀”はイメージした通り、目に痛いぐらいの濃い紅。

普通の刀より拳一個分ほど長いその刀身は優美な曲線を描き、見るものを魅了する。

名前の由来は、はるか昔にこれを使って斬った者は魂を、心を失ったかのようになる事と、水さえも切り裂く鋭さ。そしてその紅の刀身のせいであつしか血を切り裂くと捉えられてしまいこのような名前がついた。

それを陽影とは反対側へと差し、準備は完了。

チリン

透き通った綺麗な鈴の音が鳴った。

”魂心砕血刀”の柄の部分についているごく普通の、少し色の濁った鈴。 ”風月花鈴”と呼ばれているこの鈴は現代の言葉で言うならば

Emotion Eater、通称E2と呼ばれている。

この名が示す通り、この鈴は使用者の感情を吸収する。そのおかげで戦闘中に余計な感情をいれずに済む。

つまり、常に冷静になれるのだ。

欠点としては、これを持っていると若干、事故率が高くなること。この無駄な効果のせいで昔、大怪我をしたことがある。と、それはともかく準備を進める。

次に”隔絶空間”を大きく開き、

人が二人は入れるぐらいの大きさにする。

「時空間操作」を使ってこれを転移門とする。

そして舞に念話で話す。

(舞?聞こえるか?)

(うん、こんな時にこれが役立つとわね。)

(そこの場所を教えてくれ。)

(今からここの情報を君に送るよ。)

どういう意味だ?と首を傾げつつも了承し、

送ってもらった。途端、頭に何らかの情報が流れ込んできた。

それを頼りに転移門の座標を調節する。

「ここに入ってくれ。直ぐにあいつに会えるはずだ。」

「やはり主殿は凄いな。これ程のものを・・・」

「そんなことよりさっさと行くぞ。」

入る前に魔王に回復魔法をかけてその異空間に飛び込む。

出た場所は廃墟のようなところから少し離れたところ。
不良が溜まっていそうな雰囲気だ。そこで舞から念話が入る。

《コウ、気をつけてね。

こいつらテロ組織みたいだから。たくさん人がいる。》

（ああ、ありがとう。直ぐに助けに行くからな。）

《うん、待ってるよ。》

言われてみれば入り口と思しきところには見張りが数人いた。

「さて、どうすつかね。」

「我が入り口で一暴れしよう。その隙に主殿は行ってくれ。」
「悪いがそれで頼む。」

言つて直ぐに魔王が飛び出し見張りに殴りかかる。
俺はその隙にさっさと入り口に入り込む。

時々入る舞からの念話で場所を教えてもらいながら、
捕まっている所を探す。道の途中で邪魔が入ったがそれら全てをな
ぎ倒す。

だが、途中で面倒になり、壁をぶち破りながら突き進んだ。

「カカ ットは何処だ〜!!!!!!」

某筋肉の塊こと、伝説のスーパーサ ヤ人風に言いながらも探す。
風月花鈴のおかげでふざけた事が出来るぐらいまでには落ち着いた。

「ここか!」

大きな扉があり、まさに怪しい。

「おらよつと!」

ドガアア〜ン!!!!!!

凄まじい音と煙を上げながら扉は吹っ飛ぶ。

部屋の中央には闘技場にいた全身黒フードのヤツがいた。

「!!!!!!」

「俺のダチを助けに来たぜ!」

突然俺が現れたことにより動揺したようだが

それ以上何もせず、急に黒い弾を飛ばしてきた。
被弾。

無視し、歩みを進める。

またも被弾。

それも無視。

「っち、化け物め！」

ヤツの言うとおり魔弾を受けても平然と闊歩するその姿は、
化け物以外の何者でもない。

「俺が化け物？違う！俺は悪魔だ！ふは！ふははははは！」

ブリーのような台詞をはきつつ接近する。

さつきも同じ人の真似（？）してたからまた出ちまった。

つかあいつ人かな？いや、サヤ人か。血が緑色だったし。

無駄なことを考えつつも更に接近する。

「おい、お前たち！さっさと出てきてこいつを殺せ！」

舞の言っていた事が本当だとしたら、こいつは最初に会った時の
雰囲気から、俺のことを知っていて人質を楯に俺を引き込もうと
しているのかと思っていたのだが、どうやら違っようだ。

最初ほどの余裕も無く、控えていたやつを出して、

俺を襲わせる。だが、俺はそこまで甘くない。

まずは、冷静さを取り戻して人質を楯にされない様に
あいつらを取り返す。

「ザ・ワード！」

「時空間操作」を使いほんの数秒だけ時を止める。

原作っぽく状況が分かるまま動けないもどかしさを味わってもらおう。

「さて、これで大丈夫だな。」

網を引きちぎりみんなを解放する。

これで心置きなく暴れられる。

「貴様ああ！！何をした！！！！！！」

「お前が知るところではない。もう人質はいない。好きに暴れさせてもらっぞ。」

そう言つて、魂心砕血刀と陽影を抜刀。

美しく輝きながらも怪しさも放つ相反するような二つの刀。

その二振りの刀で舞うように駆け巡る。

敵を斬つて斬つて斬りまくる。

鮮血と肉片が舞い散る。

だがそれさえも完成された一つの動きの中では
舞いを一層引き立てるだけでしかない。

返り血がつかぬほどの早業で、切り抜く。

ひとしきり暴れて黒フードのヤツ以外は全て消えた。
殺しちゃいけないけどな！

「くそっ！くそっ！！こうなったら・・・」

GYAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ヤツがそう言った瞬間、またしてもあの生物の咆哮が響いた。
広い部屋の奥から再びあのドラゴンが現れた。

「またこいつか。」

気絶しているみんなを一先ず部屋の外の安全なところに非難させる。

「主殿！」

「丁度いいとこに来たな！みんなを頼む！」

ジャストタイミングで合流した魔王にみんなのことを任せて
ドラゴンに向き合う。そしてそのドラゴンはいえ、
こちらに向かって火球を飛ばしてきていた。

「おお、おお、危ねえなあ。」

余裕ぶっこいているが回避するか消し去るかしないとやばい威力だ

った。

「今度はこっちの番だ!!」

大跳躍し、ドラゴンに肉薄。

そして思いつきり頭をぶん殴る。

GUGAAAAA!!!

ドラゴンの悲鳴が響き渡る。

(舞の野郎、この前ドラゴンは俺より微弱の神力しか持っていないから
ダメージを与えられるとか言ってたのにあんま効いてねえじゃねえ
か!)

舞に対して文句を言いつつも追撃しようとして刀を引き抜き、
その周囲に「分解」を纏わせる。
いくらなんでもこれなら致命傷を与えられるはず。

そう思い、切りかかる。

「私を忘れちゃいないか？」

相変わらず性別をはつきりさせない声で言いながらヤツが魔法を飛ばしてくる。

それに被弾してもダメージは受けませんが視界が悪くなり、攻撃しづらくなる。

「めんどくせえなあ！」

「如月護身流体術 秘奥 幻武無双・臙影」！！」

分身する過程を省略して一気に「臙影」発動させる。

そして邪魔が入る前に近づく為に「加速」と「縮地」を併用し、超急接近。

「……」如月護身流体術 禁技 神殺し「！！！！」「」「」

禁技をそう何度も使っているのか？という疑問もあれど、

それは確かに効いたようで、ドラゴンは大量に出血しながら倒れた。

GRRRRRRR……

弱弱しく唸るドラゴン。

「悪いな。今更手を抜く気はねえんだ。」

「させるかあ！！！！」

今度は黒フードのヤツが接近してきた。

それを軽く払って壁際まで吹き飛ばす。

その衝撃で今まで覆っていたフードが取れる。

「……女？」

そこには傷だらけながらも紛れも無い少女がいたのだ。

そかし今はそんなことに構ってられない。

先ほどの火球とは比べ物にならないほどの熱量をドラゴンの口から感じる。

ここまでイメージ通りでなくてもなあ、とか思いつつもそれに対して一策講じる。

「はい、これは何でしょうか？」

空気中の窒素を冷やし、

大量の液体窒素を作ってそれを目の前に留まらせる。

「正解は液体窒素です。知っていますか？液体窒素は気化するとその体積が何と！およそ七百数十倍になるのです！これをこっやって・・・」

ふざけた口調で、一人講義をしながら大口開けてるドラゴンの中いぶち込む。

G A A A A A ! ! ! ! ? ? ? ? ? ?

何やら情けない声を上げながら、悶えるドラゴン。

「そして！それを腹の中で気化させればどうなると思いますか？答えは簡単です。

これだけの量を一気に気化させたならば、当然、破裂しちゃいますよね」

寒い講義を続けながらも集中して放り込んだ液体窒素の塊を気化。

パフウツ・・・

何か空気が抜けたみたいな音がしたんですけど！

てつきりドラゴンが破裂してグロイ事になるかと思っただじゃねえか！

一人突っ込みを終え、変な音を出したドラゴンへと目を向ける。

「・・・誰？」

そこには、まあ、その、なんだ、理想的な女性の体型をした、露出の高い服を着た美女（？）がいた。

今日は変な人とのエンカウト率が異常なほど高い。

これはある意味呪われているのだろうか？

「私は、パーヴィア・ラビン・ミットだ。まずはお前に礼を言おう。」

「What's? 何故に？」

「私は今までその奴にわけの分からん薬を飲まされ、無理やり従わされた。」

そしてさっきお前が私の中に何か打ち込んだ時、その薬が突然消えてこの姿に戻れたわけだ。

お前にそのような意図が無かったとしても結果的に私を救ってくれたからな。」

まあ、感謝されるのは悪いことじゃない。

それにしてもこいつ心が広いな。
仮にも殺そうとしたやつにお礼をいえるなんて。

「それは分かったが、お前の正体は何だ？」

「私はドラゴニス、半龍人だよ。」

「なる。それでドラゴンになってたわけか。」

もう何を聞いても驚かないし突っ込まないぞ。

「それよりもこいつにはたっぷりお礼をせねばならないな。」

指をバキバキ鳴らしながら壁際に近づくパ・ヴィア。

「まあまあ、ちよつと待て。」

「何故止める？お前ごと焼き払ってもいいんだが？」

「いまやっても仕留めらんねえよ。見ろよ。」

黒フードのヤツはすでにドラゴンに乗って逃走した時に使っていたのと同じような魔法陣を展開しており、もはや手遅れだった。

「なら、行かれる前に叩き潰す。」

「だから待てつて。少し話をさせてくれ。俺もお前ほどではないが大切な友人を拉致られて怒りを感じている。」

もう、取り逃がした時ほどの怒りは無い。

むしろこいつのことが心配だ。

「お前は何故こんなことをした？」

「・・・私はこの国を許さない。」

「どうしてだ？」

逃亡できると確信したのか相手はこちらの問いに素直に答えてくれる。

確かに、国を潰そうとするなら国が運営している大規模な施設を狙った方が効率いいわな。

そしてこれなら俺のことを知っていたのにも納得が行く。大方、要注意人物かなんかとして認識されていたのだろう。

そして、会長さんたちはその俺を抑制する為の人質。もつとも、ただ近くにいたからかもしれないがな。

「誰も孤児を・・私たちを誰も認めてくれないし、私たちに居場所が無いから。」

こいつもか、最近はこんな風に言う輩が多いな。

「誰も認めてくれない？居場所が無い？泣かせるねえ。」
「.....だがふざけんなよ？」

飄々とした雰囲気から抜けて、急に鋭い怒気を放つ。
また悪い癖が出ちゃった。

「.....!!!!」
「認めてもらおうともしないヤツを誰が認めてくれるっていうんだ！？」

自分から何もせず認めてもらおうなんて虫がよすぎんだよ!!
それに居場所が無いだって？笑わせんな！居場所は誰かから貰った
り分けて

貰ったりするもんじゃねえ！！居場所つつつのは他でもない自分
身で作り

上げるものなんだよ！！それすらもできないのか？そんなことも分
からないのか？」

「わ、私は……」

「でも、大丈夫だよ。」

「……」

鋭い怒気を一瞬にして和らげる。

これが相手を救い出す時には最も有効な手段だ。

卑怯に見えるがこれから先は俺の本心だ。

「俺が、いや俺たちが、お前を認めてやるし、居場所にもなってや
る。」

「……え？」

これって軽く告白に近い気がする。

「でもそれにはお前が自分でそうして貰える様に努力することが大
切なんだ。

だから俺はお前にこれを伝えたかった。白々しいかもしれないけど、
在り来たり

過ぎるかもしれないけど、お前は、一人じゃないって……」

うわぁ、言っちゃたよ。流石にこれは恥ずかしすぎる。

「お前らが孤児でもなんでも認めてくれるし居場所になつてくれる
やつもいる。さっきと言ってることが違うかもしれないけど、
確かにそういう人もいるって事は覚えておいてくれよ。」

「……（ありがとう）」

少女は消えた。おそらく転移魔法に近い何かを使って。名前も聞いていないし、言いたいことが伝わったか分からないけど、少女の残した言葉はちゃんと俺に届いた。

これであるのテロ組織は活動しなくなってくるといいんだけど。

そう思いながら、魔王の元に戻ろうとする。しかし、そうさせてくれないやつがいた。

「お前、中々いいこと言うじゃないか。傍から聞いていただけだが、お前のことがひどく気に入ったぞ。お前について行ってやろう。」

「って事はまさか・・・また？」

「お前の言うまさかかは分からんが、お前のいる学園とやらに行ってみたくなった。」

誰か俺を助けてくれ。これ以上変なやつが俺の周りに増えたら、俺はあ！俺はああ！！！！

「主殿。そろそろ帰るとするか。」

「そうだな。」

そろそろ一人でぼけたり突っ込んだりするのにも疲れしてきた。

” 隔絶空間 ” を広げて大きく作り。みんなが通れるだけの広さを作る。

これだけの人数が通るとなるとかなりの大きさになる。

疲れた体を引きずりながらも、気絶しているみんな

(舞だけは気絶したふり)

を空間に突っ込み学園に座標をあわせ、転移門を発動させる。

これもつと使いやすくしたいなあ、
と思いつながら”隔絶空間”に入る。

何故か勝手についてきているパーヴィアに突っ込む気力も無い。

今日はとても長く感じたし、とても疲れた。

だが、この後の学園での一騒ぎのほうが大変だったというのは、
やっと休めると思っていた鋼嗣にとっては、
かなりの大ダメージになったという。

アーメン。

第1章・16話 学園襲撃（後書き）

作「サブタイトルが続きそうな感じですが、続きませんよ？多分・
」

コウ「調子に乗ってまた新キャラを・・・」

舞「いい加減、読者の方の身にもなってよ。」

作「はい。マジですんません。気をつけますが、のりで増えて行き
そうです。」

「
コウ・舞「長くなるとめんどくさいのでまた次回お会いしましょう。」

作「さようなら」

追記

この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIb>です。ご協力お願いします。

第1章・17話 戦の後に・・・（前書き）

何人かの方に指摘されたので舞の喋り方（平仮名）を全て修正しました。

ご指摘下さりありがとうございます。もし、他に至らぬところがあればまたご指摘していただけると幸いです。

感想は返信しましたが、ここでもお礼を言わせていただきます。雨雲様、dalimabowz様感想ありがとうございます。

いつものごとく前置きが長くなってしまいました。どうぞ。

追記

今回は短い上に何時もよりひどい出来な気がしますので、あまり期待せずに御覧下さい。そう言えば、私も忘れていたのですが、この作品のアンケートを作りました。URLは<http://enq-maker.com/1WJVRIB>です。ご協力お願いします。それと、このアンケートに唯一答えて下さった方がいたのですが質問を更新するさいに消去しなければなりません。本来に申し訳ありません。ですが、書いて下さった様に今度ラウが報われる（？）やつを書いてみたいと思います。

追記

しつこくアンケートの宣伝を各話の後書きに書きまくりました。ちなみに私の作者ページからもそこに飛べます。

第1章・17話 戦の後に・・・

「大丈夫だったかね？」

転移門を出て直ぐ校長にかけられた言葉がそれだった。つか、校長これに関しては何も突っ込まないんだな。転移魔法ってこの世界では恐ろしく珍しいっばいのに。

「大丈夫といえは大丈夫だが。精神的には、何かもう俺のライフはとづくにゼロよ！ってぐらいきつい。」

「ふむ、君の言っている事が少々分からんが要するに休みたいんだな？」

そりゃあもうすごい勢いで首を縦に振りまくりましたとも。

「それよりも校長。」

「何だね？」

こいつは通常時は普通の偉そうな校長だな。

「さっきの襲撃の後処理はどうなった？」

「それなら心配要らんよ。」

奇跡的に死者はゼロだ。重傷者なら数え切れんほどいるがな。これもひとえに君のおかげだよ。君があの方に迅速に行動してくれなければもっと被害が出ていたかもしれんからな。感謝するぞ。」

校長に礼を言われたが実感がわかない、

俺はただ単に友人を助けたい一心で動いていたからな。

後に知ったことだが、
襲撃事件のときに校長はそれなりに奮闘していたという。
伊達にここの校長はやってないんだな。

「感謝されるようなことはしてないさ。」

俺は自分がしたい思ったことをした。それだけだ。」

何も知らない人が聞けばこれほど傲慢な物言いは無い。

もともと、校長はそうは思わなかったようだが。

「はははは、君はやっぱり面白いな。私も君に興味があったのでね。」

おいおい、まさかと思うが王様よ。

校長と知り合いつて事は無いよな？

(.....)

だめだ、あの王様が笑顔で頷いている姿しか想像できない。
これはまた面倒なことになるかもしれない。

「そ、それよりも校長。少し相談が・・・」

「何だね？」

「ああ、また新しい入学希望者。」

「お前がここの校長だな？私を学園に入れる。」

いやあ俺が言えたくちじゃねえが、流石にそれはどうよ？

「おk」

「うむ。それでいい。これで殺さずにすんだな。」

校長軽っ！どんだけだよ！さっきまでのシリアスは何処行った！？

く宇宙のかなたまで（笑）by作者く

ここって校長に相談すれば大抵のことは通るのか！？

しかもパーヴィアさんは何か、

凄く物騒なことを言ってるっしやいましたし。

もうやだ・・・さっき変なテロップが入ったし・・・

「どうしたんだコウジ？お前らしくも無い。」

俺がリアルorz状態になってる時にラウに声をかけられた。

「もう目覚めたのか。早いな。」

「俺の復活力なめんなよ？」

「それは馬鹿だからよ。」

ナナさん、それは会話がかみ合っていない気がします。

「何故っ！？何故そこで俺が馬鹿にされるの！？」

「お前は元々そういう立ち居ちなんだよ。」

俺も便乗。こいつのおかげで元気出てきた。

「あゝコウジくんだあゝ。」

寝ぼけモードの会長さんがいらっしやいました。

「え？ちよつ、待て、落ち着け！話せば分かる！ごぶっ！」

「すうすうすう。」

俺にタツクルをかました会長さんはまた直ぐに眠っちまいました。

「俺の上で寝るのはやめてもらえんかなあ？」

タツクルで俺を押し倒したままです。

これ、どうしましょうかねえ？」

「ああ、何だか私も眠たくなってきました。」

「待て待て待て待て〜い！！！」

俺の制止もむなしく、ハルも倒れてきました。

しかも起きています。これはなんて言う罰ゲームでしょうか？

「コウジっ！貴様だけは〜！！！」

「……はあ」

何故か俺が起こられた上に呆れられてるんですけどお！

こんな羞恥プレイ受けてる者の身にもなってくれ。

結構視線が痛くてきついんだぞ！

「では、私もノリで。」

パーヴィアも来た。しかもノリで。

「うおい！ノリで混ざるなあ！つか誰か助けてくれえ〜！」
「神よ。あの者に天罰を．．．」

怖っ！周りの生徒たち怖っ！！凄まじい団結力だね
しかもラウも混ざってるし。俺もう死ねる気がするよ。

「誰か呼んだ〜？」

舞、お前じゃないと思ふ（う）。

やべえあまりのやばさについ歴史的仮名使いになっちまったZE。

「と、とりあえずここは最終手段 気絶！！！！！！！！」

場が何処と無くカオスな雰囲気になって来たからやっちゃったぜ。
後悔はしてない．．と思ふ（う）。

はっ！ついまた歴史的（ry

「主殿！主殿！」

魔王が呼んでいる。

「ん？ここ何処だ？」

見知らぬ天井・・・

ではなく見慣れた俺とラウの相部屋である888号室だ。

「おお、あの時に最終手段を使って・・・」

「見てる側としては面白かったんだけどね。」

はっはっは、それは冗談だよな舞？

「それにしても君には助けられてばかりだな。」

「おお、ゴールド。無事だったか。」

ベッドから起きて辺りを見渡す。

かなりの広さを誇り、

無駄な装飾品が少ないこの部屋も今日ばかりは華やかだった。

あの襲撃の時に俺の助け出した奴らが全員この部屋に乗り込んでいた。

「そう言えば戦祭りはどうなったんだ？」

学園に戻ってきてから一番気になっていたことを聞く。

「うーん、それなんだけど、現段階では中止って事みたい。」

リアナが答えてくれた。

やっぱり予想通り、中止になってしまったらしい。

ちよっと残念だ。

何で二人して納得してんだ？

つまり俺にそんなことを言っただけなのかな？

「それはそうと主殿。」

「ん？何だ？」

忘れかけていた魔王に話しかけられて少しビックリ。

「我とパーヴィア殿はどうするのだ？」

「どうするって・・・ああ、住む場所か。」

「それなら此処でいいじゃない！！！」

余分なものが出てきやがった。

つかこいつ何処から湧いて出たんだ。

「呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃ〜ん

はい、みんな大好き校長先生です。」

「別に呼んではないが何だっけ？」

こいつに関して突っ込むのもやめよう。

無駄に体力を消耗するだけだ。

「この二人にのこことだ。住む場所無いんだったら、

こいつらを連れてきたお前のところに住ませればいいだろう。」

切替早いな校長。お前は芸人が向いてる気がするぞ。

「別にいいぞ。こいつらが構わないなら。」

「我は構わん。」

「私はむしろ此処がいいわ。」

「それでは二人の了承を得られたのでここに住むことを許可する。」
「さて、問題は山ずみだけど、とりあえず・・・」

「『『『パーティーだ!!』『』『』」

この場にいた俺以外の者の意見が一致した。
でも何故にパーティー？としてパーティー？

「『『『だつて一応優勝したじゃん?』『』『』」

一部の人の喋り方変わつてるとかそんなことは置いといて、
優勝したからレッツパーティーらしい。

俺的にはもっとひっそりやってもいいと思うんだがな。

そう思いながらも団結したこいつらを俺一人で動かすのは
とてつもない労力がある。そのため諦めて一緒に騒ぐことに決めた。

これは中々強烈なパーティーになりそうだ。

第1章・17話 戦の後に・・・（後書き）

作「え」、読者の皆様。今回は私からお願いがあります。しばらく忘れていた、PV1000000オーバー、ユニーク1000000オーバーの記念として番外編をやりたいのです。そこで、あつかましい事とは分かっておりますが、読者の皆様から何をして欲しいか、また、どんなもので良いのか、等を教えていただきたいのです。私に出来る範囲で実現します。感想にて、ご意見をお待ちしております。

「
コウ・舞「割と深刻に悩んでいるので助けてくださる方はお願いします。」

作・コウ・舞「ではまた次回お会いしましょう。」

追記

ちなみに今は先程上で掲げていたものよりアクセス数などは増えていますので、もしかしたら連続で番外編という事になるかもしれません。

また、次話は何時を通り明日の朝十時に更新です。

長々とした後書きに付き合っていたいただき、ありがとうございました。

第1章・18話 戦に宴は付きもの（前書き）

今回は例の物が再び登場？何かは読んでいるうちに分かるはずです。ヒントはハルがおいしそうといったアレです。

では、どうぞ。

追記

やっつけてしまいました。新しい小説のネタを思い付いたら止まらなくなっちゃいました。で、考えた結果両方やっつけてしまえという結論にいたりました。

そのため、読者の皆様にご迷惑をおかけするかもしれません。今まで通りに更新出来ないかもしれませんがなるべくこちらでも更新していきたいと思います。

こんな小説を楽しみにして下さっている方々、誠に申し訳ありません。

切り良く第一章終了までは今まで通りに更新します。といっても後一話で終わってしまいますが。

言い訳、もとい詳細は活動報告に記載してありますので時間がありませんでしたら、覗いてみて下さい。

第1章・18話 戦に宴は付きもの

「そんなこんなでレッツパーティー！」

「なあなあ魔王。」

「何だ？主殿？」

大急ぎでパーティー会場を作り上げている時に魔王にずっと言わなければと思っていたことを聞く。

と言っても、そこまで大切なことじゃないが。

「お前のことは何て呼べばいいのかな、って思って。」

「別に主殿の好きな呼び方で構わんぞ？」

「でもそれだと周りの人が呼びづらいじゃねえか。」

「うゝむ、それもそうだな。」

「ペテル・リジェリア・ベルリード・ラ・ルバアルハリアをどうやって短くするかな？」

ということと助っ人を呼んでみました。

「てなわけで、どうするよ？」

「無難にペテルで同かしら。」

会長さんです。きっと助けられます。

「でもそれじゃインパクトがなあ。」

「じゃあどんなの？」

「最初と最後をとってペリア。」

「何か珍獣っぽくない？」

「じゃあ、アル。呼びやすいぞ。」

「それでいいんじゃないかしら。」

思ったより時間掛からなかった。

某錬金術師の弟みたいな名前だが別人だぞ？

「ってことで、お前は今日からアルでどうだ？」

「うむ、主殿に与えてもらった名前、大切にするぞ。」

「いや、別にそんなことせんでもいいんだが・・・」

言う前に魔王・・・もといアルは鼻歌交じりにスキップして

何処かに行ってしまった。

あいつがあんなに嬉しそうなのは初めて見るな。

そう考えつつも作業を終えて、一端全員集合する。

「あれ？これだけ？」

手近なイスに座りながら辺りを確認する。

此処に集合していたのは

ハル、舞、パーヴィア、会長さんの女性陣四人だけ。

「他のみんなは何処いったんだ？」

「ナナはラウを連れて机とかを借りに行つて、魔王は鼻歌交じりにスキップして何処かに行つちやったし、ゴールドとリアナは先生に此処を使つて良いか許可取りに行つちやった。」

舞が説明してくれた。

後で魔王の改名を宣言しなくては。

つてかここの使用許可取つてなかったのかよ。

俺が創つた物で軽いダンスホールみたいなを作つたんだ。

でも最初は此処に立てて良いかひやひやしたぜ。

だって明らかにまずいよねここ。

お墓の隣ですぜ。

いくら開いてる場所がここだけで、広いつつても、流石に此処は無いんじゃないかな。

講義はしたんだよ？でも

「大丈夫よ。毎年此処使つてるから。」
と、リアナに言われた。

そして押し切られる形でここに建てちまつた。

今更氣にしてもしょうがないかと思ひ、立ち上がる。

思案しているうちにみんな自分の持ち場に戻つていた。

「おゝい、コウジ、ちょっとこれを味見してくれないか。」

「ん？どれだ。」

パーヴィアに呼ばれた。

再び自分の仕事に戻つた彼女の役割は料理らしい。

「おお！すごい美味そうじゃないか。」

目の前に置かれたのは、魚の蒸し焼きのようなものに、丸々一匹焼かれた小さめの牛の様なもの、それに特大の野菜サラダだ。

どれも手が込んでいて彼女の腕のよさが伺える。

これで全てではないのだろうかこれだけ作れるならとても期待できる。

「んじゃ早速。」

そう言って近くにあった魚を口に放り込んだ。

直後、口中に魚臭くない程よい香りが広がる。

舌触りがよく、かま無くてもとろけてしまいそうなほどだ。

「お前料理上手いんだな。この料理とっても美味しいぞ。」

途端にお玉を持って心配そうにこちらを見ていた彼女の顔に笑顔が広がる。

「それは良かった。ではこの調子で全部作ってしまうとしよう。」

そう言って機嫌よく戻っていった。

・・彼女の服装については目の毒なのであまり見ないようにしよう。

「コウ様、私のも味見してみてください。」

立て続けにハルにも味見を頼まれた。

呼ばれたのでハルが料理している場所まで向かう。

すると、辺りに瘴気がたちこみ始めた。

これは何かの演出だろう、と割り切り、歩みを進める。

さらにハルが料理している場所へと近づいた。

今度は舞が倒れていた。

「お、おい！どうしたんだ！」

心配になり舞を抱き起こす。

「う、迂闊だったよ。神をも殺しかねない究極の兵器が・・・」

そう言って舞は倒れた。

こ、これはどうせまた舞が悪ふざけをしているんだ。

またしても割り切って先に進む。

「コウ様、これ食べてください。」

ずい、と差し出されたのは何時ぞやの

ダークマターを連想させる禍々しい物体。

ハルの笑顔はひまわりのようだが何故かそれが悪魔の微笑みに見えて仕方ない。

このデスゾーン（ハルの料理しているところ）に足を踏み入れた時点で、多少なりとも覚悟が必要だったんだ。そしてもう逃げられない。

此処は男らしく散るしかない。

そう覚悟を決めて目の前の兵器（ダークマター 製作・ハル）に立ち向かう。覚悟を決めてそれを口に放り込んだ。

「……………!!!!!!」

う、美味いだと！

この傘の会社の人たちが開発しそうな料理に見えないものが！

しかも最高級の黒毛和牛並みのあ……じ……が、ごぶっ

「並みの毒薬すら効かぬこの体にこれ程のダメージを負わせるとはな。ハル、俺の完敗、だ……」

油断した瞬間に体がいうことを聞かなくなる。意識が途絶えた。

「あれ？お腹一杯になって眠くなっちゃたんですか？」

しょうがないですね、と言いながら途中で落ちていた舞も回収して、がんばって運ぶハル。

見ているだけならとても微笑ましいが、残念ながらこの所業は彼女がやったこと。しかも気付いていない。

「ふう、疲れました。」

額の汗をぬぐってやり切ったくみたいな顔をしています。

ここまで運んでくれたのには感謝するがアレ（ダークマター）はとてもまずい。味的な意味でなく。

俺はもはや人の身とは言えない程の回復力を誇る為、アレによって受けたダメージは既に回復していた。

「・・・ハル、料理じゃなくて他のことを手伝った方がよくないか？」
「え？何ですか？」

う、と言葉に詰まる。純粋なやつほどやりにくいことは無い。

だが、あの料理は兵器として転用も可能なくらいすさまじい。それを身をもって体験したのだから説得力のある言葉だと思う。

「えっと、ほらさつき机借りに行ったやつらが人手が足りないって言ってたし。それを手伝いに行ったらどうかな？なんて。」

「そうですね。それなら行きましょう。」

手をとって歩き出すハル。

あえてそのことには突っ込まずラウたちを探す。

「あら、仲がいいのね。」

今まで見たこと無いぐらい冷たい視線で、繋がれた手を見つめる会長さん。

あれ？もしかしてこれまずい？

「はい とっても仲良しですよ。」

気付かないハル。何故か苛立っていく会長さん。
状況がよく分からないが極めてまずい。

早急にこの場を離脱せねば。

そう思つてそろりそろりとハルの手から逃れ、脱出を試みる。

「何処に行くのかしら？」

「と、トイレに！トイレに行ってくるんですよ！」

「ふん。じゃあ待つててあげるから早くなさいな。」

思いつきの言葉で逃れようとするが失敗。

結局、運命は変わらない。

だが、変えなければならぬんだ！

このままでは俺の命が！

「いや、やっぱりラウたちの手伝いをしにいくのかと。」

「そう、私も手伝いにいくわよ。」

に、逃げられない。

パニックに陥った鋼嗣は二人の手をとって無我夢中に走り回った。

「ちょ、ちょっとコウジくん！」

会長さんは顔を赤くしながら何か言つてたが届かずに、
爆走を続ける。そして、ようやくラウとナナを見つける。

「はあ、はあ、はあ、ら、ラウ。手伝いに、来た、ぞ。」
「随分と急いできたな。しかも両手に花とは。」

肩で息をしながら両手を見る。

ハルと会長さんは目を回していた。そのうえ顔色も悪い。

急ぎすぎたせいだろうか。後で謝っておこう。

そう思いながらも二人を壁際に寝かせて、

ラウとナナの手伝いをした。

俺の参加により、思うより早く準備が終わり、
ついにパーティーの準備が整った。

「おっほん、まずはお知らせがあるから、俺の話聞いてくれ。」

見慣れたメンバーの前に立ち、大声で呼びかける。

「えー、まずは魔王。名前があまりにも長すぎたため、
俺と会長さん、それと本人によって呼び方が決まった。」

「私の名はアルに決まった。改めて宜しく頼む。」

アルが前に出てきて礼をする。

ワアアア！！と会場（？）が沸く。

ノリが良いことに苦笑しながらも続けて紹介をする。

「次はパーヴィアだ。」

「半竜人のパーヴィア・ラビン・ミットだ。宜しく頼む。」

「知ってるやつもいるかもしれないがこいつは俺たちを襲ったやつだ。でも、こいつはあの時操られてたからなんだ。」

決して自分から進んでやったわけではない。それは分かってくれよ？」

「あの時は迷惑をかけてしまったな。すまない。」

アルとは別物の礼をする。

「と、いうわけでこのことについては終わりだ。」

これ以上なんか文句あるやつがいたら俺のところに来い。

パーヴィアの代わりに俺がぶっ飛ばす！！以上！！」

先程の雰囲気は何処へやら、丁寧に腰を折りながらお辞儀する。

クソ爺とクソ親父にこのようなことも教え込まれていたので、

それなりに教養はあるつもりだ。

・・・日常時では絶対にしないが。

「パーティーを存分にお楽しみ下さい。」

にこ、っと紳士のよな笑みを浮かべる。

普段はこんな言葉遣いも態度も取らないが今日はパーティーがあるのでその余興としてやっただけだ。

この時に遠くからなにか声が聞こえたが気にしない。

実は遠くから隠れ鋼嗣ファンが覗いていて、魔法を使い、その姿を激写しまくっていた。

そこで、今回のこれだ。

激写していた人たち全員が鼻血を出して倒れた。

もちろん、女子生徒だけでなく男子生徒も含む。

恐るべし、如月鋼嗣！

「さて、連絡も終わったし飯にありつくとしますかね。」

そう言って、バイキング形式でよそってきた大量の食事に食らい着く。

ちなみにハルの作ったダークマターは勿体無いので一応出しているが、置いておくだけで周りのものに瘴気を振りまくので、片隅に置いてある。

舞と協力して最後の処置を施した。

犠牲者が出ないようにしつつすらと警告が書かれた紙を張ってある。

それをおいしそうに食べているのはハルだけだ。

ふぐは自分の毒では死なない。

それを見た鋼嗣はそう思った。

「僕はどうしてこんなに苦労しなければならいんだー!!」

酒が入っているらしくゴールドが酔っ払っていた。

一人で騒いでいる。彼の苦勞性を考えれば、

ああでもしなければやっていけないんだろう。

この世界の法律はかなり緩くて、未成年でも酒、タバコはOK。

ただし薬物の類は禁止。と微妙な規制がかけられている。

この世界は魔法が故に危険な薬物も存在する。

ん？酒？

そんなことを考えていたら少し引っ掛かりを覚える。

誰かにそれを飲ませてはならない。そんな気がしたのだ。

その誰かを必死に思い出そうと己の記憶と奮闘しているうちにそれは起こった。

第1章・18話 戦に宴は付きもの（後書き）

作「もし番外編が決まらなかったらどうしよう。」

コウ「大丈夫だって、もし決まらなかったら俺が無双する様でも書いてりゃ良いじゃないか。」

舞「それは何時もやってる気がするよ。」

作「それに、もし読者の方から連絡があつてそれを実現できないのは非常に失礼だから。何時ものようにその回を軽く流す気は無い。」

舞「これから先も番外編についてはしばらく募集し続けています。ご協力のほどお願いいたします。」

作・コウ「お願いします。」

舞「ではまた次回お会いしましょう。」

追記

次話更新はおそらく来週の土曜の朝十時のはずです。出来なかつたらごめんなさい。

第1章・19話 宴の終わりに（前書き）

機械王様、感想とご指摘ありがとうございます。勉強不足が目立つミスでしたね。

新規投稿する小説のタイトルが「アイ＝エフ・Future」（現在は「柵を絶て！」です）に決まりました。

この小説のようにチート作品ですが、行き過ぎではないと思います。文章を少しまじめぶって書いてみましたが、この作品を読んで下さった方なら気にいってくれる・・・はずです（？）投稿日は本日10月9日土曜午後5時過ぎを予定していますので、覗いて頂ければ幸いです。

前から言ってきましたがしばらくはそちらに力を入れたいと思います。

では、ごじゆ。

第1章・19話 宴の終わりに

「まあまあ落ち着けよ舞。」

「うるさいうるさい僕は素面じゆんだ。」

真つ赤な顔に据わった目では説得力が無い。

さっきまで

「僕は神様く 破壊神く そんな僕がジャスティス!!」

とかわけの分からんことを叫んでいたし。

普段のこいつからは考えられないことだが、
酒の入ったこいつは中々手がつけられない。

酒を飲ませてはいけないヤツが誰かを思い出した時にはすでに手遅れだった。

中学の卒業式のとくに水と間違えて飲んだこいつを
止めるのは大変だった。今のように妙にハイテンション
になるし説教癖が出る。迷惑極まりないのだ。

結局その時には酔いがさめるまで待つしかなかった。

だが、今なら酔い止め薬を創って飲ませれば収まるはずだ。

そう思つて早速一人分の酔い止め薬を創った。

それを飲ませようと舞に手を伸ばした時、

突如振り返った舞が言った。

「コウ、君に少しいたいことがあるんだ。」

まずい。この雰囲気はこいつがお説教モードに入る時のものだ。

「こないだの戦いから危ないと思ってたんだけど僕は君に危ない目にあって欲しくないんだ。」

「……………」

予想していたようにくだらないことではなかった。意外な言葉に思わず耳を傾ける。

「君は優しい。優しすぎる。でも、それは優しさじゃない。

君のそれはもはや傲慢と言いつつ換えてもいい。」

「……………」

俺自身これには反論できない。

俺は自己満足や気まぐれでしか行動しない。もしくは自分の大切なものを守る為に。

「俺は自分の持つ力で救える人しか救わないし、救えない。俺がやってきたことも偽善だし独善だ。」

俺は御伽話おとぎばなしに出てくるような本物の

”勇者”じゃ無い。だから己を通す。

「その考え方で行けば今の君なら大勢を救える。その代わりに多大な危険をさらすことになるけど。」

舞の言うことも最もだ。

舞の顔を盗み見ればもうすでに赤みは引いており、透き通るよな白い肌を外気にさらしている。

おそらく今言ったことも全て本音なのだろう。
最初こそ酔いに任せて勢いで言っていたのかもしれないが、舞が心配してくれている。

そのことを考えただけで心が温かくなる。
俺が言うのもおかしい話かもしれないが、
恋、というものはおそらくまた違った感覚。

「君がすることに指図する気は無いけど、なるべく
無茶はしないで欲しい。もう君はあの時とは違うから。」

そこには言外にお前はもう一人じゃないんだから
周りのことも考えて行動しろ、という意味が見え隠れしている。

俺の昔話を持ち出すことを考えればそれ程気にかかっているんだろ
う。

「ああ、お前のいいたいことは分かったよ。
でも俺は俺の在り方を変えやしないよ。これからもな。
それにお前の言ったことがあるなら尚更、な。」
「そう、ならもう僕から言うことは無いよ。」

そう言っつて柔らかく微笑む。

「いきなり変なことを言ったりしてごめんね。」
「気にするな。その、嬉しかったから・・・」

流石にこの台詞はちよつと恥ずかしい。
前にも恥ずかしいことを言ったりしたことはあるがどれも自分では

殆ど気付かないからだ。

「え？聞こえないなあ？」

くっ・・・こいつ分かっててやってやがる。

「だから！お前に心配されて嬉しかったの！！」

気心の知れた中といえど恥ずかしいものは恥ずかしい。
それでも大声で言ってしまった。

「「「・・・」」」

お互いになんともなく気まずい雰囲気が出る。

「今までまともに関心してくれるやつなんていなかったからな。」

赤くなった顔を隠すように月を見上げながら言う。

「僕の言いたいことが伝わったならいいさ。あれは僕が神としてではなくて僕自身、創雑舞として言ったことだよ」

気まずい雰囲気はとくに霧散している。

先ほど舞が酔っていた時にこの辺りにいたやつらはとっくの昔に
なくなっていた。

そのおかげでおれが恥ずかしいことを言ったのも、
大声で言ったことも誰にも聞かれていない。

「さて、そろそろもどっか？」

「うん、そうだね。」

二人で手をつなぐ、などせずに、
月がとても綺麗に見える此処の場所から中に戻る。

「それじゃ此処で一つ面白いことでもしますかね。」

舞の酔っ払い騒動で軽くなった心とは裏腹に連戦で重くなった体を
持ち上げる。

「面白いこと？」

隣に座っていた会長さんが今日はおろしている長い
ストレートヘアを左右に揺らしながら聞いてきた。

「ああ、とっても綺麗なものだよ。」

そう言ってホールの中央まで歩いていく。

パーティーも終盤に近づいてきたのでそれを飾るに相応しいものを
俺も準備した。

「このパーティーにご参加くださった皆様！
これから一種の催しものをお見せしましょう！」

「ごゆっくりどうぞ、と締めくくり少なすぎる参加者から視線を切り離す。

「森羅万象全ての事象を司る世界よ。」

ほんの少しでいい。我が願いを聞き入れ、それを表したまえ。
究極魔法「アサイラム」

俺を中心に不可視の光が広がっていきホール全体が包まれる。

究極魔法「アサイラム」

俺が魔法を使えるようになってから少しずつ作ってきた究極の魔法。
その空間内では発動してから一度だけどんな条件も無視して願った
ことを目の前に具現する。

捉えようによつては神をも凌ぐが、死者を生き返らせたり、
新たな生命を生み出したりなど、神のみに許された禁忌を
犯せばその代償は自身を持って払わなければならない。

その上、以上ともいえるほどの魔力を持っていかれるし、一度発動
したら連発はできない。

しかしながらそれらのリスクをもつてしても有り余る程のメリット
がある。

それを今から具現する。

「世界よ。この場に白き花を咲かせたまえ。」

世界に願う。

「うわゝ、綺麗〜。」

「これは・・・。」

「とっても綺麗です。」

何も俺は”花”を咲かせたわけではない。

少しこじやれていつてみただけだ。

天井からこの世界にあるはずの無い雪が舞い落ちる。

雪が降らないというのは学園での授業中に知った。

似ていることが多すぎて今まで思わなかったが、

やはり此処は異世界なんだと痛感させられた。

雪はまだまだ舞い続ける。

ホール内に設置された魔法を応用して作った照明からでる光が

雪の一つ一つに反射してとても幻想的で息を呑むような光景だった。

本当は普通の魔法を使ってもよかったのだが、

どうしてもこんな風に自然な感じにはできない。

「コウ様、これは何ですか？」

雪をポーッと見つめながらハルが言った。

「これは雪だ。俺のいた世界だとあまり珍しくない自然現象だよ。」
「そうなんですか。」

ホールにいた人全員がそれに魅了され、一言も発しない。
耳が痛くなりそうな静寂が数分間続いた後、ようやく誰かが言葉を
発した。

「今更な挨拶だが優勝おめでとう。そしてこんなすばらしい光景を
ありがとう。」

校長だった。

何時ものふざけた話し方でなく凜とした雰囲気を持った声だった。

パチパチパチ・・

パラパラとだが拍手が起こる。

次第にそれはこの人数では考えられないくらいの大音響に達する。

校長の挨拶と盛大な拍手によってパーティー、
もといたただの馬鹿騒ぎが終わった。

「「おやすみ。」

「「おやすみなさい。」

何時ものごとく寮の前で別れを告げて、お互いの寢床に向かう。

「今日は疲れたな。」

「ああ、まったくだ。」

ラウの言葉に同意する。

今日は一日の間に多くのことがありすぎた。

あまりの多さに整理しきれず、頭が爆発しそうだ。

「寝るか。」

「そうだな。」

いつもはここで飯を食いに生徒用食堂に行き、その後しばらく雑談、といくのだが今日は既に食事は済ませてあるし、風呂もさっき入った。

そのため二人とも布団に入って直ぐ睡眠をむさぼった。

（およそ一時間後）

どんどんどん！！！！！

「何だ？何だ？」

突然の物音に俺は飛び起きた。

ラウは相変わらず変な寝言を言いながら眠り続けていた。

「ああるじどの〜。」

「こお〜じい〜。」

この声はアルとパーヴィアだ。

「しまった忘れてた！」

二人ともこの部屋に住むということのを忘れて、閉め出してしまったらしい。

「悪い！さあ、早く中に入れ。」

二人に謝りつつも部屋に招き入れる。

・・二人とも酒臭い。

おそらく酒の飲みすぎで俺らと一緒に入ってこれなかったのだろう。

「頭が痛い。」

「酒の飲みすぎだ。さっさと寝ろ。」

アルを空いているベッドに寝させて一息。
とはいかなかった。

「むづ〜〜〜。」

目が据わったパーヴィアが獲物を狙う目で見ていた。

これは、まずい！

「ま、待てパーヴィア！疲れてるだろ？早く寝ようぜ？な？」
「じゃあ枕して。」

そう言っつて飛びかかり文字通り俺の腹を枕にして寝ちまった。
このままなのも如何なもんかと思っつて、眠ったままのパーヴィアを
抱えて空いている最後のベッドに移した。

「これでやっつと寝れる。」

咳いてベッドに倒れこむ。

「限・・界だ・・」

次の日に目覚めるのはかなり遅くなりそうだ。
そう考えてから直ぐに寝息をたて、意識を手放した。

第1章・19話 宴の終わりに（後書き）

今回で第一章は終わりです。今まで読んで下さった読者の皆様、お付き合いありがとうございました。

・・・別に連載停止とかではありませんよ？

とりあえず一つの区切りとして、です。この作品は私の初作品ですのでそれなりの愛着がありますから。

と、話は変わって宣伝です。くだいですが私の新小説「アイ＝エフ・Future」（現在は「柵を絶て！」です）もよろしく願います。

では、いつものあいさつで締めさせていただきます。

作・コウ・舞「また次回お会いしましょう。さようなら。」

作「・・・最後だけ出てきやがった。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8545m/>

親友と書いて神と読む！

2011年8月23日08時08分発行